

中米ニカラグア

東洋医学大学物語

内戦渦中の最貧国に飛び込み、中南米唯一となる

東洋医学の大学を築いた八巻晴夫の奮闘と感動の軌跡！

高橋正夫

あらすじ

「困っている人を救いたい」という父の意志を受け継いだ八巻晴夫は、妻と幼い子供二人を連れて、内戦渦中の中米ニカラグアに渡った。言葉の壁、習慣の違い、物の不足、資金難など、多くの困難と闘いながら、僻地に赴き、妻の美知子とともに東洋医学の鍼灸治療を使つて、医療に恵まれない多くの人々を救つていった。増える一方の患者に対応するため、労働組合と協力して労働者出身の鍼灸師も誕生させていくが、短期間での養成では優れた治療家の育成に限界を感じ、高い水準での医療教育を目指した東洋医学大学の建設を決意する。時には自然災害に見舞われて、救難援助に力を注いだり、時には盗賊に遭つて、命を失いかけたり、また自分の生活を犠牲にしながら、道なき道を切り開き、ニカラグアの人々の幸せのために、中南米初となる「日本ニカラグア東洋医学大学」を開学するに至った。数々の試練を乗り越えていった根底には、常に「困っている人を救いたい」という父との同じ思いが流れていた。

プロローグ

第一章

旅立ち前

第二章

異国での奮闘

第三章

大学を開学

エピローグ

開学から十二年目を迎えて……日本ニカラグア東洋医学大学創立者 八巻 晴夫

プロローグ

まぶしいほど青く澄みきった空に、かわいた祝賀の花火の音が鳴りひびいた。空に花開いたいくつもの光の残像のような白い煙が、やさしくそよぐ風にその身をゆだねて、ゆるやかに細長く形をくずしながら流れていく。

二〇〇四年三月一日、午前――。

中央アメリカのニカラグア共和国の首都マナグアにある医療施設で、これから歴史的な行事がおごそかにとり行われようとしていた。それは、中南米で初めてとなる、東洋医学のはり灸治療を教える大学の開校式である。

この大学を創立したのは、八巻晴夫、八巻美知子という、二人の日本人であった。

六千三百平方メートルの広い敷地のなかに、三十のベッドを有するクリニック棟、血液や尿検査のできる検査棟、学生の授業をおこなう教育棟、医療関係の書籍を集めた図書室、そして、学生の宿舎となる寮などがすでに完成していた。

予算の関係で、講堂や体育館はまだ建てることができず、教育棟につながる中庭の入口付近の広場を使って、開校式の準備がすすめられていた。

三十メートル四方ほどの四角い中庭のまん中には、熱帯地方に特有の青々とした大きな葉の植物が

植えられ、その周辺をとりまく緑のじゅうたんのような芝生は、学生たちが頭とからだを休める憩いの場となる予定である。

その中庭に入るところに、数段の階段があり、階段の上には屋根のついた小さなステージがしつらえてある。ここが、この日行われる大学開講式の壇上となるのである。

土がむき出しになった階段下には、たくさんの折りたたみ椅子が並べられ、人々の来場を待っていた。

午前十時を過ぎると、祝賀の花火の音を合図にしたかのように、人々が集まりはじめた。

まもなくしてそれほど広くない会場に三百人ほどの人々が集まると、準備したすべての椅子席は人で埋まり、あふれた人々はその周囲をとりかこんで開会を待った。

あちこちで飛び交うあいさつや、大きな笑い声が、この日を迎える喜びを表している。

午前十一時、八巻晴夫と八巻美知子が、数名の来賓をひきつれて壇上にその姿をあらわすと、にぎやかだった会場は、波がひくように静まり返った。

司会のジョニー・メデーナの緊張した第一声が、静寂を破るかのように放たれ、盛大な拍手を浴びながら、新生生たちが一列となつて会場後方から入場してきた。

大学の新生と聞けば、およそ二十歳前後の青年を思い浮かべるのではないだろうか。だが、そこに姿をあらわした学生たちは、まだあどけなさの残る若者から、貫禄たつぷりの壮年まで、年齢も様々な二十八名の男女であり、さらにその半数以上が女性であった。



大学開学式 2004年3月1日

新入生全員が会場の最前列の席に着くと、そのひとりひとりの名前を司会者が読みあげていった。名前を呼ばれた者が腰をあげ、後ろを振り向いて会場の人々に顔を見せると、そのたびに、祝福の拍手とたくさんの方々の笑顔がその学生を包んだ。

学長のカルロス・キンテーロのあいさつのあと、数人の来賓の祝辞へとつづいた。

政府関係者などの招待者が、大学開校のお祝いと期待の言葉を述べ終わると、司会者はひととき大きな声で、「ドクトール ハルオ・ヤマキ」と、大学の創立者である八巻晴夫の名前を呼びあげた。

大きな拍手と歓声がわき起こると、小柄な日本人男性がスツと壇上の席からたちあがり、演壇の方へと歩いていった。男性は演壇で原稿を開くと、会場に集まった人々に顔をむけ、ゆっくりと頭をさげた。

ふたたび顔をあげて、原稿に目を落とすと、やや緊張した面もちでそれを読みはじめた。

「来賓の皆様におかれましては、大変にお忙しいなか、日本ニカラグア東洋医学大学の晴れの開学式にご参集いただき

きましてまことにありがとうございます」

マイクを通して、大学創立者である八巻晴夫の声が、会場にひびきわたった。

「本日、二〇〇四年三月一日、中米ニカラグアの首都マナグアのこの地におきまして、日本ニカラグア東洋医学大学が開学いたしました。ニカラグアに新たな文化を築きゆく大学がスタートしたのです。ニカラグアに新しい歴史の第一歩が始まったのです」

声は徐々に高くなり、新しい歴史の開幕を叫ぶように宣言すると、それに呼応するかのようにな大きな拍手が起きた。

拍手の音を全身にうけながら、彼は深く呼吸をして高揚した気持ちをいったん落ち着かせると、つづいて大学設立に至る経緯を語るように述べはじめた。

「率直に申しまして、この東洋医学大学の開学に至るまでの道のりは、大変に長く、大きな困難をともしませんでした。決して順調で平坦な道を歩んできたものではありません。その道筋は、ニカラグアの道路と同じで、雨が降ると川のようになったり、いたるところに穴があつたりするような大変な道でした。

ときには豪雨のあとの土砂にまみれているような道であつたり、ときには寸断され、破壊されて、前進が危ぶまれるような困難な道であつたりもしました。

しかし、それでも私たちは、その道を一步一步たゆみなく歩き続け、さらに道なき道を切り開いていかなければなりません。なぜならば、道を作り、歩まなければ、私たちが頼りにしている多くの患者さんたちを、見捨てることになってしまうからでした」

あたたかな人柄と情熱を感じさせる話しに、誰もが身動きせず聞き入っている。

「まだ内戦の続く一九八七年に、私どもがニカラグアに来たばかりのときは、私たちは『はりを使う東洋の魔術師』と呼ばれていました。この国には、はりやモグサを使う東洋医学の治療というものを知っている人が、ほとんどいなかったからです」

一瞬、妻の美知子とともに、一歳と二歳の二人の幼子をつれてニカラグアへ飛びこんできたときの光景が、晴夫の頭をめぐった。

「今や東洋医学は、ニカラグアでも絶大な信頼を獲得しています。私たちは今まで四十五万人ものニカラグアの人々を治療し、救ってきました」

四十五万人という言葉に、「オー」という驚きの声があちこちからあがった。

しかし、それは決して大げさな数字ではなかった。ニカラグアに赴任して、無我夢中で治療を続けていくうちに、いつのまにかこのような驚くべき人数に達していたのである。

彼は原稿から目を離し、会場に顔を向けて言った。

「もはや私を、『魔術師』と呼ぶ人は誰もいません。道ばたで患者さんに会えば、『オーラ　ドクトール　ハルオ（やあ、ハルオ先生）』とあいさつされています」

そしてすぐに新入生たちのほうに目をやりながら、笑みを浮かべて言った。

「皆さんに対しても、『魔術師』と呼ぶ人はもういませんので、安心して下さい」
会場がドツと大きな笑い声ではじけた。

新入生たちも互いに顔を見合わせ、笑いあい、それまで固く張りつめていた空気が一瞬にしてほころんだ。

八巻晴夫はこの時のあいさつの中で、大学開学への困難な道のりを支えてくれた恩ある人たちの名

前を、皆に紹介しておきたいと思っていた。と言うのも、この大学は自分と美知子だけの力でできあがったものではなく、多くの人たちの支援や励ましがあつたからである。その人々への感謝の思いを、新入生たちにもしっかりと伝え残しておきたかったのである。

「私は、このたびの新たな大学開学を、これまで私たちを支えてくれた多くの方々と共に、喜びを分かち合いたいと思います。そしてつつしんで、その皆様がたに心からの感謝の気持ちを表明したいと思います」

続けて、晴夫にとって恩人となる人々の名前を、ゆっくり読みあげていった。

荒船清彦元日本大使ご夫妻様、

宮本吉範元大使様、

鈴木齋日本中米東洋医学普及委員会日本代表幹事様、

本間昭之助京都仏眼協会理事長様、

後藤修司東洋医学学校協会理事長様

……。

名前を読み上げるたびに、ひとりひとりのなつかしい慈顔が、彼のまぶたに浮かびあがった。

晴夫と美知子が感謝したいと思う人は、日本人とニカラグア人をあわせると、実に四百名以上にもなり、今日の式典の限られた時間の中では、到底全員を紹介することはできないが、それらの人々の名前を刻印した銘板を大学構内に設置し、永遠に感謝の気持ちを残せるようにするということも決め

ていた。

今、その代表として十名ほどの恩人の名前を読みあげると、さらに故人となつてしまつた特別な存在の二人を紹介したいと言つた。

その一人とは、大学理事会の事務局長を務めてくれたウイロン・バヤダレスである。

ウイロンは、晴夫と美知子が困つたときに、いつでも相談にのり、陰に陽に二人を励まし支え続けてきてくれた大恩人であつた。彼の存在がなければ、大学開学への道のりは、はるか遠いものになつていたに違ひなかつた。社会制度も法律も違ふニカラグアで、元官僚であり、知識も教養もあつた彼のアドバイスが、どれだけ二人にとつて助けとなつてきたか、それははかり知れないものがあつた。

もう一人は、晴夫に東洋医学と西洋医学の深い知識を与え、治療家としての心構えを厳しくもあたたかく鍛えてくれた、東京女子医科大学教授の代田文彦であつた。

代田文彦の父は、東洋医学の重要な著作を数多く残し、昭和時代に東洋医学の復興に貢献してきた代田文誌という偉大な人物であつた。代田文彦は、父のその偉業を受け継ぎ、日本の東洋医学界を牽引してきた西洋医学の内科医師であり、また学者でもあつた。

晴夫は東京都世田谷区瀬田にある日産厚生会玉川病院の東洋医学内科で、四年間にわたつて代田文彦から懇切丁寧な指導を受けた。

さらにニカラグアに渡つてからも、恩師である代田からの励ましは続き、それが陰しく困難な道を歩んでいける原動力となつていった。

だが、悲しいことに、この大学の開講式を前にして、その恩師は突如他界してしまつたのである。

大学開校式の報告を、誰よりもまづ先に伝え、喜びの声を最もききたかつた人であつた。その恩師

の突然の訃報は、晴夫を深く悲しませた。

せめて生前の先生に、開校式だけでもご報告したかった——
何度も何度も悔やまれた。

晴夫は、恩師の生前の面影を心に浮かべながら、一枚の紙を背広の内ポケットからとり出した。

「恐縮ですが、代田文彦先生からいただいたお手紙を、ここで紹介させていただきます」

そう言いながら、スペイン語に翻訳した手紙を読もうとした瞬間、急に胸に熱いものが込みあげ、またたく間に涙がまぶたにあふれ、手紙の文字がかすみ、声が出せなくなってしまうた。

うつむいたまま無言になつてしまった晴夫を、いったいどうしたのかと、聴衆は黙つたままじつと見つめている。

晴夫は、みんなの視線を感じながらはやく話を進めなければと心の中であせっていたが、やさしかった恩師の面影が心に浮かぶたびに涙があふれ、のどがつまってしまふのである。

その時である。彼の左脇から、スツと水の入ったコップがさし出された。

晴夫の異変を察した美知子が、自分の手もとのコップに水を注ぎ、彼のそばに寄り、そつとさし出したのである。そして、彼の背中に右の手のひらをやさしくあてた。

この光景を目のあたりにした聴衆は、あらためて晴夫と美知子の絆の強さを感じた。

晴夫はコップの水を少し口に含むと、ゆっくりとそれを呑みこみ、深く呼吸をして気持ちを落ち着かせてから、恩師からの手紙を読み始めた。

「研修センターの設立が確実に実現する由、おめでとう。全身全霊からお祝い申しあげます。

立派な施設、優秀な指導と条件が整ってきて、ご同慶に耐えませぬ。苦労がやつと実りましたね。

今までの血のにじむような努力のすえ実現するのだから、当然といえば当然ですが、世の中、ままならぬことが多いので、何よりもお見捨てなさらなかつた神、佛に感謝致します。

中南米のセンターとして、近隣諸国を含めての、まさにセンターとしての第一歩を歩み出すわけですから、心がうきうきするほどうれいす。

微力ですが、ご協力できることがありましたら、遠慮しないでお申し出ください。最大限協力をいたします。

何と言つても体が資本です。身も心もひきしめてがんばってください。 代田文彦

晴夫は手紙を読みながら、恩師が目の前で自分に話しかけてくれているような気がした。

晴夫の熱い気持ちを感じとつた聴衆からは、地鳴りのような拍手がわきおこり、大学一期生となる新入生たちの顔も決意で紅潮していた。

拝復
石井センターの設立が実現おめでとう。
ふんばり、全身全霊をお祈り申し上げます。
土日は施設、優秀な指導員と新幹線、
来り御同慶の御時。昔ながらの、
みんな、今迄の血のにじむような努力
おかげで、当然といえば当然ですが、世の中、
ままならぬことが多いので、何よりもお見捨てな
さらなかつた神、佛に感謝致します。
南洋大陸のセンターとして近隣諸国を含
めてのまさにセンターとしての第一歩を歩
み出すわけですから、心がうきうきするほど

です。僕も晴夫の御時が実現おめでとう。
ふんばり、全身全霊をお祈り申し上げます。
土日は施設、優秀な指導員と新幹線、
来り御同慶の御時。昔ながらの、
みんな、今迄の血のにじむような努力
おかげで、当然といえば当然ですが、世の中、
ままならぬことが多いので、何よりもお見捨てな
さらなかつた神、佛に感謝致します。
南洋大陸のセンターとして近隣諸国を含
めてのまさにセンターとしての第一歩を歩
み出すわけですから、心がうきうきするほど
1996.3.12 代田文彦
八巻晴夫様

代田文彦先生からの手紙

開校式は、一時間をやや過ぎて無事に終了した。

晴夫は雲ひとつない青空を見あげて、開学の二カ月前に他界してしまった父を思い浮かべながら、心のなかで叫んだ。

「お父さん、やったよ。大学ができたんだよ。東洋医学の大学だよ。いっしょに喜んでください。今まで本当にありがとう！」

式典には、父の形見である背広、ネクタイ、靴を身につけ、文字通り父子一体となって迎えた開校式であった。自分の喜びが、そのまま父の喜びでもあるかのように感じられた。

日が暮れると、晴夫と美知子をはじめ、クリニックに勤務する理学療法師、マッサージ師、事務職員など、四十人ほどの関係者が一つの部屋に集まり、祝賀のパーティーがはじまった。

パーティーは、サルサ、メレンゲといったラテンアメリカ特有の陽気なダンスで盛り上がっていく。サルサは、キューバやエルトリコが発祥といわれ、メレンゲは、カリブ海の島国ドミニカ共和国に伝わる舞曲である。大・中・小のギターやトランペットを手にしたマリアッチという楽団を呼び、軽快なリズムと情熱的な歌にあわせて全員が踊りまくる。

ラテンアメリカのこの国では、ダンスがコミュニケーションとしての重要な役割を果たしている。いつもは恥ずかしがりやの女性でも、いざダンスになると、人が変わったように激しく踊るのである。

晴夫も美知子も、腰をたどたどしく動かしながら、ニカラグア人とからみ合いながら踊る。このときだけは立場の上下もなく、相手の好き嫌いさえも吹き飛んでしまうから不思議である。

ニカラグアに来てから、ニカラグア人と同じ気持ちになるには、こうしたダンスを一緒に踊ること

がどんなに大切なのかを二人は知った。ニカラグア人にとって、ダンスは人生の一部であり、どんな言葉よりも心を結ぶかけ橋となるのである。

夜も更けてマリアッチ楽団がひきあげると、本来なら祝賀パーティーは終わるのだが、ニカラグア人はいつまでも延々と踊り続けていた。

晴夫は頃合いをみて、みんなに今日の開学式のお礼を言って家路についた。

家に帰る途上、今まで歩んできた苦勞が、頭の中を駆けめぐった。

「ようやく、多くの人たちから期待されていた大学ができた。かなり茨の道だったが、期待を裏切ることなく目的を達成できて、本当によかった。：実にきつかったな。こんなに大変だとは思わなかった。」

今までの苦勞を思い出すと、胸が苦しくなる気がしたが、そうした困難を乗り越えた先には、必ず状況が大きく開かれていくということも、身を通して体験し、確信していた。

「重要なのはこれからだ。今日入学した学生たちを、何としてでも、一流の鍼灸師に育てあげなければならぬ。そのためにもこれからやるべきことは、まだまだたくさんある。」

夜空を見上げると、無数の星がキラキラと美しく輝いていた。

満天の星空と自分が、一体となっている感じさえた。

「この東洋医学による人材育成の戦いには、どこまで行ってもゴールは無いだろう。死ぬまで前進し

続けなければならぬかもしれない。美知子もきつと同じ覚悟でいるだろう。これこそ二人がともに選んで歩んできた道であるし、僕らがこの世に生まれてきた使命なんだ」

晴夫は心のなかに熱く込みあげてくるものを感じながら、思いを未来に馳せた。

「数年後に、このニカラグアが誇れるものは何かと問われたら、この大学が育てあげた質の高い東洋医学の若者たちをあげるようになるだろう。そして、その東洋医学の流れは、中南米全体にも広がり、ゆくゆくは、恵まれない人々を助ける医療活動として、世界中に展開していくことになるだろう。先ずその第一歩を実現させていくのが、僕たちの仕事なんだ。それが僕たちの使命なんだ。先ずはニカラグアに東洋医学の光を輝かせていこう！どんな困難があっても、命をかけて、とにかくやっていくしかない！」

晴夫は、これからの目標を自分に言い聞かせるように何度も心の中で反芻し、明日からの学生の育成と大学の発展に思いを馳せた。晴夫の新しい戦いが、今まさに始まったのである。

第一章 旅立ち前

晴夫の誕生

昭和二十六年（一九五一年）十月三十日、山梨県の甲府市に住む八巻家に元気な男の子が誕生した。二人の娘のあとに生まれたこの子どもは、「晴夫」と命名された。

父母はこの男の子の誕生をことのほか喜んだ。その喜びの奥には、家の跡継ぎができたという以上に深い理由があった。

八巻晴夫の父の名は正寿、母はちとせという。

大正四年（一九一五年）、正寿は山梨県の甲府市で九人兄弟の四男として生まれ、幼いころに父親を事故で亡くした。そのため、幼少期は大勢の兄弟たちとともに、貧しい生活を過ごさなければならなかった。

正寿は幼少のころから賢く、尋常小学校を卒業すると、兄たちは上京をすすめた。東京に出ると旧制海城中学校に入学し、丸の内の中央郵便局で配達物の区分けの仕事をしながら学費と生活費を稼ぎ、学業をつづけた。

学校を卒業すると、「勤め人になって安定した暮らしをするよりも、病気などで苦しんでいる人を救う生き方をしたい」と考え、東京神田にある自彊術（じきようじゆつ）学院の門をたたいた。

自彊術とは、大正五年に中井房五郎が東洋医学を基礎に創案した医術であり、道家（中国の老子や

荘子の教えを信条とする一派）の導引（道家で行う養生法のひとつ）と、三十一の動作による健康体操を組み合わせたものである。

正寿は自彊術学院に住み込みで学びながら、自らの体も鍛えていった。

自彊術を習得すると、最も苦しんでいる人々にこの治療を生かしたいと考え、満州（現在の中国東北地方）で実業家として成功していた宗像金吾の助けをかりて、中国に渡ることを決めた。

日本政府は、昭和六年（一九三一年）九月十八日の満州事変をきっかけに、満州国の維持と日本の農業を助けるため、「武装移民団」と「農業移民団」を中国に送りだしていた。

満州国には、荒れはてた土地を汗水たらして開拓する多くの日本人がいたが、過酷な労働はそこで働く人々の体をボロボロにしていた。

正寿は、昭和十三年に念願の治療所と体操の道場を満州で開き、働く人々の健康を守るために懸命に働いた。

満州に来て五年が過ぎ、仕事が安定すると、伴侶を得るためにいったん帰国することにした。そして、そのとき日本で紹介されて出会ったのが、ちとせであった。正寿二十七歳、ちとせが二十一歳のときである。

ちとせがはじめて正寿を見たとき、笑うと口元からのぞいた八重歯が印象的で、やさしい人柄と、小柄でありながら全身からみなぎるたくましさに、心をすぐに奪われてしまったという。

一方の正寿も、ちとせの愛らしい容姿に加えて、人に対する思いやりの深さを感じ、会ったその場で結婚を決めたという。

正寿は結婚式を済ませると、早々に新妻を連れて満州にもどり、健康体操と治療の仕事にふたたび

専念しはじめた。その正寿のもとには、彼の帰りを待ちわびていたかのように、日本人が次から次へと押しよせてきた。

新婚の二人は多忙ななかでも、幸せで充実した毎日を過ごしていたが、昭和十九年三月、正寿に軍隊への召集令状がくだった。それは結婚からまだ十カ月もたっていない突然のできごとであった。

日本は、昭和十六年十二月八日に英米に宣戦布告して、はじめは勢いづいていたが、やがて戦況が悪化してくると、次々と若者を徴兵していった。

昭和十九年には、日本本土も空襲に見舞われるようになり、大本営（天皇直属の最高戦争指導機関）の発表とは裏腹に、敗戦の色がますます濃くなっていった。

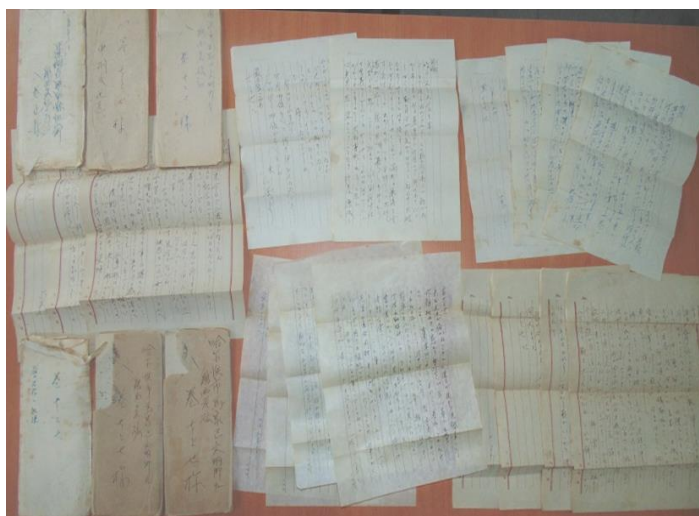
こうした厳しくなる戦況のなかで正寿は現地徴集され、この時ちとせは妊娠していた。正寿は妻とおなかの子どものことを心配し、また中国大陆での今後の戦況の悪化を予想し、ちとせに日本へ戻るよう説得した。

ちとせはお腹の子をいたわりながら、やつとこのことで夫の甲府の実家にたどり着くと、そのときを見越していたかのように、中国から手紙が次々に届いた。それらは達筆な字で書かれた正寿からの手紙であった。

軍のきびしい検閲を通り、戦禍の荒海をも渡ってきたのであろうか、くたびれたように変色した手紙には、愛する妻と、これから生まれてくる子を思いやる言葉で埋まり、ちとせは涙なしに読めなかった。

夫のやさしく思いやりにあふれた手紙の数は、やがて五十通にも及んだ。

お腹にいる子は、夫婦のただひとつの希望の宝である。この子のためなら、どんなことでも耐えてみせる、生き抜いてみせると、正寿とちとせは固く誓っていた。だが、そうした切なる思いにもかかわらず、ちとせのお腹の子は、産声もあげることなく死産してしまつたのである。



軍の検閲を通つた正寿から愛の手紙の数々

愛する夫を結婚からわずか十か月に至らないうちに戦争に奪われ、そのうえ夫との生きる希望であった大切な子を守れなかったちとせは、人目のつかないところで毎日泣いた。戦時下で決して口には出せないが、人々から幸せを奪っていった戦争を心の底から憎んだ。

昭和二十年八月、戦争が終わると、ちとせは正寿が生きて帰ってくることをひたすら祈った。

しかし、その肝心の夫は、終戦から二年たっても帰ってこない。夫は戦死したに違いないとあきらめかけていたところ、やせ細って変わり果てた正寿が、突然ちとせの前にあらわれた。

ガイコツが服をきたような夫の姿に、はじめは幽霊ではないかと我が目を疑ったが、「いや幽霊じゃない。私の夫が帰ってきたのだ！」とわかると、ちとせは嬉しさのあまり夫に抱きつき、思いきり泣きじゃくった。

当時三十万人ぐらいいたとされる満蒙開拓団の人々で、日本へ無事に帰国できた人たちは、十一万人ほどだと言われている。

ロシア軍が中国に南下してきたとき、日本人を守るはずの関東軍はその役目を果たさず、人々は自力で逃げるしかなかった。

敵に追われて逃げまどう人々は、追い詰められて集団自決の道を迫られ、そのとき死にたくないという泣き叫ぶ子供たちにまで、身内から銃口が向けられたのである。

わが子を助けたい一心で中国人にあずけた赤子や幼子たちからは、のちに多くの残留孤児をうみだすことになってしまった。

また、たとえそのときに生き延びられたとしても、ロシア軍に捕まって厳寒の地シベリアに抑留さ

れたり、現地の中国人に囚われの身となったりして、日本の土を踏むことができたのは、ほんのひとにぎりの運がよかった人たちだけである。

正寿もシベリアに抑留された一人であったが、終戦から二年たつてようやく解放され、生きて帰国できた幸運な一人だったと言えよう。

ちとせは、死線をくぐりぬけて帰還してきた夫に涙して喜んだが、一方の正寿はそのときにはじめてわが子の死産を知り、愕然とした。残酷な戦争は、二人から幸せの何もかも奪ってしまったのである。

しかし、それでも二人は励ましあい、親戚から土地を借りて田畑を耕し、歯を食いしばって困窮した生活にも耐えた。その苦労のかいもあつて、ささやかながらも落ち着いた日常を少しずつ取りもどしていった。

まもなくすると、長女が生まれ、次女にも恵まれた。そして、昭和二十六年十月に、念願の男の子が誕生したのである。

戦時中の最も大変なときに死産してしまったのは男の子であった。そのときの悲しみを正寿とちとせは片時も忘れることができず、二人は親の責任を果たせず申しわけなかったと、心の中でずっと詫びつづけてきたのである。

それが、このときに生まれてきた男の子が、死産した子の生まれ変わりに思え、自分たちの悲しみに曇っていた心を晴らしてくれるために、ふたたび生まれてきてくれたのではないかと思えた。

夫婦は男の子に喜びと感謝の思いを込めて、「晴夫」と名づけた。

父の背中、母の愛

生活に少しづつ余裕がうまれてくると、これからどのように生きていこうかと二人は語り合った。「中国のハルピンで健康道場を開いて、多くの人たちに治療をしてあげていたときが、いちばん充実していたな」

「あの戦争が、みんなを不幸にしまったわ…」

「苦労してようやく落ち着いてきたけど、このままでは、甲府の片田舎で一生を終わらせてしまう…」戦争の傷跡がようやく癒えてくると、二人は前向きに未来を考えるようになっていった。

正寿の心の奥から、若い時に抱いた「困っている人を救いたい」という熱い思いがふつふつとわき出てきた。また、かわいい子供たちの教育を受けさせてあげたいし…、とにかく俺が治療の仕事で頑張るにしても、まずは東京に出なければものにならないと思う」

正寿がちとせに上京したい思いを伝えると、ちとせは目を細めて強くうなずいた。二人は熟慮したすえ、家を売り払い、昭和二十八年三月に、三児を引きつれて上京した。

はじめは東京の品川区に居をかまえて生活したが、もっと東京の中心地でひと旗あげようと、昭和三十七年には港区の六本木に移った。このとき正寿は四十七歳になっていた。

正寿は治療院を立ち上げ、満州の時のように大勢の人々の治療ができると簡単に考えていた。だが、顔見知りの全く新しい場所での仕事は、思いのほか苦戦を強いられた。



東京に出てきた八巻一家

東京は人口が多いといっても、医院や病院も数多くある。そのような中で、医者ではない正寿の治療をわざわざ求めてくる人など、そんなにいるはずもなかった。

仕事がなかなか波に乗らず、描いていた夢とは反対に、生活もしいに困窮していき、「困っている人を救う」どころか、自分たちがまさに「困っている人」になってしまった。しかし、それでも正寿はあきらめなかった。

一念発起し、かつてはあれほどやめられなかった酒とタバコをピタリとやめた。それはちとせも驚くほどの気迫と奮闘ぶりで、正寿は全力で自分の治療院の宣伝に力を注いだ。

はじめは患者を街中で勧誘して、連れてきては適切な治療を施した。

痛みや苦しみを癒して喜ばれると、彼の腕のよさは着実に人から人へとその評判が伝わっていき、治療院はまたたく間に患者が増え、繁盛していった。

やがて患者を受け入れるスペースが手狭になるほどになり、今度は六本木の一等地として有名なロアビルの向かいのビルの四階に治療院を移転させ、さらなる発展を期した。

六本木というおしゃれな土地柄もあり、有名人

の来院も増え、当時、一世を風びしていた歌手の藤山一郎も治療を受けに訪れた。そして、あの声量と若々しい姿を保てたのは「八巻先生の治療のお陰です」と絶賛されたという。

移転して広くなった治療院は、自彊術による体操教室も開けるようになり、治療のかたわらに開く体操教室に若者も多く集まってきた。

正寿が、「イチ、ニ、サン」と張りのある声で音頭をとりながら模範の動作を示すと、生徒たちは教室のなかの鏡に映った自分の姿を見ながら、楽しく自彊術の健康体操をおこなった。

正寿が二十二歳のときに満州の地で開いた健康道場は、三十年の時を経て、東京六本木の中心地に、「六本木自彊術体操教室」という名称で復活することができたのである。

治療の仕事に頑張り、大勢の患者から慕われている正寿の背中を見ながら、すくすくと育っていく男の子がいた。それは長男の晴夫であった。

汗を流しながらいきいきと働く父の姿は、晴夫の小さな心にも強く焼きついていった。

「みんながお父さんを頼りにしてやってくる。僕も、お父さんのように立派な人間になりたい」父の働く姿は、晴夫にとってまぶしいほど輝いて見えた。

また、母のちとせは、思いやりと愛情のかたまりのような人に思えた。

近隣の若者たちに分け隔てなく接し、特に地方から出てきた一人住まいの青年には、「おなかやすいていないかい」「勉強や仕事はうまくいつているかい」「病気はしていないかい」などと心を配り、あたたかも母親のように愛情をかけていくのである。

そんなちとせを慕って、晴夫の家には多くの青年たちが、入れ代わり立ち代わり出入りした。

ちとせは腹をすかした若者らに、家にある食べ物惜しみなくふるまった。そのため晴夫が夜に冷蔵庫を開けると、中はいつもからっぽのことが多かったのである。

ちとせはそうした若者たちから、「六本木のおかあさん」と呼ばれ、わが子のように慈しんだ彼らの中からは、やがて外国に飛び出して活躍したり、地域の人から推されて政治家になったりする人物もあらわれたのである。

そのように、人のために尽くし、慕われ続ける父や母を晴夫は大好きだった。

こうした父母のそばで育った晴夫は、小学校に入ると友達の面倒見の良さが抜群な子供に成長し、同級生の誰からも頼りにされ、小学生から中学三年生までの間、学級委員や生徒会長に推薦され続けた。

中学を卒業すると、高校は都立の城南高等学校（現在の六本木高等学校）へ進学し、クラブは卓球部に所属し、主将として部員をリードしていった。

医学部受験と挫折

「どうしたら、お父さんやお母さんみたいに、人に喜んでもらえる人間になれるのだろうか」

高校も三年生になると、晴夫は自分の将来の道を、父母の生き方と重ねて考えるようになった。

「僕は何を目指したらよいのだろうか……」

いろいろな考えているうちに、ひとつの目標が大きく浮かんできた。

「そうだ、医者になったらいい。それも眼の医者になって、目の病気で苦しんでいる人たちを助ける

ことができれば、とても喜ばれるだろう。そして、医者として、お父さんのやっている東洋医学を科学的に証明できれば一石二鳥だ！」

正寿の施術を受けた人たちは、誰もが感謝して帰っていった。そのなかには、医者から見放されて、藁をもつかむ思いでやってきた人たちもいた。

しかし、どんなに感謝されても、日本における東洋医学の社会的評価は低かった。

医師はその肩書きさえあれば、「先生」とか「お医者さん」と、誰からでも敬意をもたれるが、指圧やあんまなどの施術師は、どんなに腕が良くても、「あんまさん」とか「指圧屋さん」と町の便利屋さん程度にしか見られない。

父の人柄や仕事ぶり、そして患者さんたちの喜ぶ姿を目のあたりにしてきた晴夫にとって、その原因となる東洋医学の社会的評価の低さに、歯がゆくも悔しくもあつた。

「あんなに多くの方がよろこんでいるのだから、お父さんの仕事は、社会からもっと評価されて良いはずだ。東洋医学はちゃんとした医学だということを科学的に証明できれば、お父さんもお医者さんのように評価されるはずだ」

自分が医者になって、西洋医学の立場から東洋医学の素晴らしさを証明していければ、父もきっと喜ぶだろうという考えに固まっていた。

しかし、医者になるには、大学でも難関中の難関といわれる医科大学に入学しなければならぬ。だが晴夫は医者になるとひとたび決めると、医学部入学を目ざしてただちに猛勉強を開始した。そのときは一生懸命に勉強しさえすれば、必ず医者になれると信じた。

だが、高校三年生の現役での受験は見合わせるようになってしまった。

当時、左翼の学生たちが東京大学の安田講堂に立てこもり、それを排除しようとする警察機動隊との間で激しい攻防戦が繰り返され、東京大学の入試が中止となり、その余波は他大学の受験にも及び、ほとんどの大学が大学紛争で揺れていた。晴夫はその混乱した時期に大学に入学することが、はたして良いこととは思えなかったからである。

とりあえず四谷にある名門予備校に通い、翌年の受験を目指して、勉強に明け暮れた。

だが、次の年に受けた大学医学部は無残にもすべて落ちてしまった。医学部はこの大学でも、考えていた以上に難関であることをこの時あらためて思い知らされた。

やむなく両親に頭を下げ、その翌年の合格に向け、今度は御茶ノ水にある予備校に通うことにし、再び受験勉強に拍車をかけた。

狭い教室には、自分と同じように追い詰められた精神状態の浪人生が、すし詰めの状態になっている。四人掛けの机では、肘を閉じていないと、となりに座った相手ににらまれるというありさまであった。

昼食は上智、中央、明治、日大といった大学にもぐりこみ、安い学食をほおぼり、そして午後からは夜遅くまで図書館で勉強した。睡眠時間を削って、頭も体も壊れるのでないかと思うほどまで頑張り、今度はさらに満を持して受験に挑んだ。

しかし、それでも大学医学部の合格はかなわなかった。

「こんなに頑張ったのに、なぜ……」

晴夫はこれほど自分が情けないと感じたことはなかった。絶望と虚脱感で胸が張り裂けそうな思いであった。

「おとうさん、おかあさんに申しわけない……」

父と母のやさしい顔が浮かび、思わず涙が出てきた。

「もうこれ以上、お父さん、お母さんにも迷惑をかけられない。灰色の空のような浪人生活も、もう耐えられない。医者への道はあきらめよう」

晴夫は大きな挫折感を抱きながら、今回はじめて医学部以外で受験して合格していた大学への進学を決めた。それは父のすすめもあつて受けた大学であり、東京の郊外に設立され、世間にもあまり名前も知られていない開学二年目の大学であつた。合格していたのは医学とは関係のない法学部であつた。

晴夫の入学する大学は、東京都の武蔵野の自然豊かな丘の上に建設された創価大学という真新しい大学であつた。このときは経済、法学、文学の三学部しかなく、どの大学も大学紛争で荒れているさなか、平和と人間教育を建学の精神にかかげ、優秀な教授陣もそろつていた。

父は、息子が医学部でなくとも、日本の未来のために「人間教育」を標榜して設立された大学へ入学することを心から喜んだ。

「人間にとつて大切なものは、何になるかではない。どう生きるかだ。この大学は、それをお前に必ず教えてくれるだろう」

そう言いながら、父は晴夫に白い封筒を手渡した。封を開けると、一万円札が何枚も入つていた。

「それは、私の尊敬する方が、私の治療を受けられたときにいただいたお金だ。このお金だけは、一生で大事なときに使おうと決めて、ずっと大切に残してきたお金だ。今がそれを役立てる時だと思う。入学金の一部として使いなさい」

晴夫は父のその言葉を聞いたときに震えた。これまで医学部への入学だけにこだわり、狭い考えに固執していた自分がとても恥ずかしくなった。

大学に入学すると、晴夫は今までのモヤモヤした気持ちを晴らすかのように、生き生きと勉強に励んだ。

しかし、知識を得るだけなら、一人で本を読むだけでもできる。大学で学ぶからには、もっと大きな意味があるはずだ。それは、父も言っていたとおり、人格を鍛え、大事な生き方を身に付けていくことこそ大事だ。人は、人によって磨かれる。尊敬できる師に指導を受けながら、学友から触発をうけ、内面を磨くことのできる最高の場が大学ではないかと、晴夫は考えた。

晴夫は大学に入学すると、自分の体と精神を鍛える場として、中学、高校と得意としてきた卓球部に入学した。

卓球部は創部から二年目に入ると、関東学生卓球連盟に加盟し、正式な対外試合の火蓋を切った。春、秋のリーグ戦では、大学の榮譽をかけて全員が一丸となって戦う。初陣は下位の五部リーグからであった。

試合の前には、学生と大学創立者が一緒になって作った大学の学生歌を高々と歌った。

紅群れ咲く つつじの丘を 白蝶あそこに 喜び舞いて
葉桜薫れる キャンパス広く 集える若人 緑のしげり・・・

歌いおわると、全員で円陣を組み、主将のかけ声に合わせながら気合をいれる。

「ファイト、ファイト、ファイト、ファイト」

「頑張ってこい！」

「気合負けするな！」

「行ってこい！」

大きな声援を受けて試合がスタートする。

当時、卓球部員のレギュラーになったメンバーは、勝利の決意を「血判状」にしたため、試合に臨んでいったという。自身を鼓舞するためだったというが、ともあれ晴夫は、青春のエネルギーを白球にむけて打ち続けていった。そして、そのときにも喜び、涙し、ともに心を磨き合っていた仲間たちは、晴夫の生涯の宝となっていた。

またたく間に時が過ぎゆき、大学生活も四年目を迎えると、社会人としての方向を決めなければならない時期になった。しかし、医学部を目指していたときのように、将来、大いなる志を実現するというような明確な目標は、まだ抱くことはできないでいた。

一流の社会人めざして

晴夫はいくつかの企業を訪問し、ようやく立川ブラインド工業株式会社というインテリア製造業の会社に就職が決まった。

入社式では会社からの指名により、新入社員四十名を代表して、社長や取締役の前で入社抱負を述べ、社会人の第一歩を踏み出した。

「どんなことがあっても、仕事で会社に認められる人間になろう。嫌な仕事も進んでやっていこう」と腹を決めて、朝から晩まで全力で仕事にとり組んでいった。

建設会社、設計事務所、施主、販売店、問屋等へ足が棒のようになるほど、足しげく、粘り強く訪問しては、着実に信頼関係を築いていき、やがて会社で一目置かれるほどの優秀な営業成績をあげるようになり、社内の仲間、上司、お得意さん、お客さんの誰からもかわいがられる社員となっていた。

早朝に会社を出て、日が暮れて会社に戻ると、晴夫の机にはお客さんからの問い合わせのメモ用紙が、いっぱい貼られていたそれが毎日のことであり、会社の幹部たちからは、なぜ晴夫の机だけメモ用紙で埋まっているのかと、不思議に思われたほどである。

晴夫は当然のことをやっているつもりであったが、そのことが社長の耳にも伝わると、社内でも働く社員、信頼の社員として、全社員で紹介されることになったことになった。

また、会社が製造する間仕切りの全国販売コンテストが行われることになったときのこと、晴夫は販売店、問屋を毎日訪問しているの、何気なくコンテストがあることを顧客に伝えていた。すると「いつも世話になっているから協力するよ」と、規格品をお得意さんたちがゴソツと購入してくれたのである。その結果、押し付けるような売り込みをせずに、見事に全国一位の販売実績をおさめてしまった。

営業といっても、結局は人と人とのつながりであり、そのつながりを築くのは誠意しかない、晴夫は父の仕事に対する姿から学んでいた。



入 社 式

入社して四年がたっても仕事は全く苦にならず、それどころか東京の高級ブランド店が居並ぶ銀座の営業所に配属され、一流のトップ営業マンとして順風満帆の日々を過ごしていた。

晴夫は、外国の大使館が立ち並ぶ六本木の、やや高級なマンションにひとり住むほどになっていたが、それほど恵まれた環境にありながら、ある頃から、心に充たされないものを感じるようになっていた。

すべてが何不自由ないほどうまくいっているのに、このままの自分で良いのだろうかという思いが、じわじわと心のなかに広がっていったのである。

「十年、二十年、三十年と過ぎ、やがて定年を迎えることになる。このままの生き方で良いのだろうか。たった一度しかない人生を、本当にこれで後悔しないのか」

その時だった。父が口癖のように言っていた「困っている人を救う生き方をしたい」という言

葉が心に突きささった。

安定したサラリーマンになるより、苦しんでいる人を救う生き方をしたい――

父が若い頃に将来を決めることになったその強い思いが、晴夫の胸の中をつかんだ。

「そうだ、もう一度、人を救える医療の道をめざそう。今度は医者じゃなくてもいい。はりや灸で、父と同じ東洋医学の道で挑戦すればいいんだ」

晴夫は目の前がパツと明るくなり、胸の中がだんだん熱くなってくる感じがした。

「まだ遅くはない。こんどは医学部受験ほど難しいことじゃない」

晴夫はそう腹を決めると、ただちに行動に出た。

大森にある東京衛生学園という東洋医学の専門学校の入學試験を受け、合格を勝ち取るとすぐに勤めている会社に退職願いを持ち込んだ。

しかし、会社側は頑として晴夫の退職を拒んだ。会社にとって晴夫ほど優秀な社員をそう簡単に辞めさせるわけにはいかなかったのである。

晴夫は就職するときも大変だったが、退職するのもこれまた大変であることをそのときはじめて知った。

「会社に不満があつて辞めるものではありません。会社の御恩は一生忘れません。私の夢をご理解いただき、私のわがままな願いをどうかお許しください」と、何度も何度も頭をさげ、懇願し、押し問答の末、ようやく退職を受け入れてもらった。

このとき晴夫は二十七歳になっていた。それは父が母と結婚を決めた年齢でもあった。

美知子との出会い

はりや灸で仕事をするには、資格（免許）が必要である。その資格を得るためには、鍼灸の専門学校で三年間、あるいは四年制の鍼灸大学で必要な知識と技術を学び、さらに国家試験に合格しなければならぬ。

晴夫は専門学校に入学すると、午前中は授業に出席し、午後からは生活費と学費をかせぐために、学校近くの老舗のうなぎ屋で出前のアルバイトをした。

夜遅くまで働くため、朝起きるのはいつもつらく、学校の授業にギリギリでかけこんだ。そして一番後ろの席で居眠りしてしまい、そのため定期テストの点数は合格すれすれのことが多かった。

そうした晴夫とは対照的に、いつも教室の一番前で目を輝かせて授業を聞いている女性がいた。細身であるが、きりつとした顔立ちの女性である。

彼女の名前は美知子と言い、晴夫より二歳年上で、真剣に授業を聞く彼女のテストの点数はいつも満点に近かった。

美知子は神奈川県の高校を卒業すると、化粧品で有名な資生堂に入社し、工場調査室に勤務した。

しかし、頸肩腕症候群という難治性の疾患に罹患し、どんな治療を受けても改善できずに苦しんでいたが、それがたまたまはり治療のできる医者にかかり、みごとに治ってしまったのである。

この驚きの体験は美知子の心を大きく動かし、そのことをきっかけとして、はり治療に理解ある患者の会を組織したり、自ら中国に二度も渡航してはり灸治療を体験したりした。また、独学で習得した健康法を会社の組合の人に教えたり、更には横浜寿町にいる日雇い労働者やホームレスの健康問題

に関わったりして、仕事のあいまをぬっては果敢にボランティア活動にも参加していた。

だが、苦痛を訴える人に対して、何の医療の資格もない美知子は、いつも自分ができることの限界を感じていた。

そこで意を決し、医学を基礎からしっかりと学び、はり灸治療の免許をとって困っている人を助けようと、東京衛生学園に入学してきたのである。このとき美知子は二十九歳になっていた。

自身に明確な目標をもっている美知子は、いつも教室のいちばん前に座り、真剣に授業を受けていた。そして、教員に質問しても納得がいかないと、医科大学の図書館にもぐりこんで徹底して調べた。さらに勉強の合間に時間をつくっては、ボランティアの活動にも精を出していた。

もともと面倒見の良い晴夫は、専門学校でもいつのまにかクラスの人気者となり、学生たちのまとめ役になっていた。

授業の合間にクラスの仲間たちと談笑したり、運動会、旅行会、忘年会を企画してはクラスの心をひとつにまとめようとしたり、また悩みのある者には相談相手になったりもしていた。

美知子はそうした和やかな雰囲気の中のなかで、晴夫がいつも口癖のように言っている言葉が心に残った。「困っている人を救う生き方をしたい」という言葉だった。その言葉から、彼にほかの学生たちとは違うまじめな人柄が感じられた。

晴夫は澄んだ意志の強い目をしている。また、彼には人に対する強い思いやりがあり、それが自分の心と通じるものがあるようにも美知子には感じられた。

晴夫も、美知子がただ成績優秀な女性というだけでなく、困っている人がいるとためらいもなく手をさしのべていく果敢な行動力に驚き、次第にはかの人は違った目で見えるようになっていった。

「自分がやりたくてもできないことを、彼女はあたりまえのようにやっている」

晴夫は美知子のことを知れば知るほど、このようなすごい女性もいるのかと驚いた。

ある日のこと、友人と連れだって、茅ヶ崎にある美知子の家に行った。湘南の海岸で砂療法という自然療法を体験する目的のためであった。

美知子の家を訪問すると、生き物をたくさん飼っていて、そのなかには体の不自由な飛べない鳥も鳥かごのなかにいた。美知子はその小鳥にやさしく語りかけながら、餌をあげていた。

晴夫はそんな何げないしぐさにも、彼女のやさしさがにじみ出ているように思えた。

晴夫と美知子は親しく会話を重ねるなかで、お互いの考え方や価値観が同じであると思うようになっていった。

「美知子さんとなら、きっと同じ思いで、いっしょに歩んでいけるに違いない」

晴夫の美知子に対する思いは、尊敬から確かな愛へと深まっていき、そして二人は夫婦として一緒になった。

二人の師

晴夫と美知子は三年間の専門学校の授業を終えて、無事に国家試験にも合格したが、それだけでは人を治療するのに十分な治療技術は身につけていないと感じていた。

二人は話し合った末、それぞれ違った有名な先生に師事して、実践的な臨床技術を学ぼうと決めた。互いに違った先生に指導を受ければ、二人が一緒に仕事をしたときに治療技術の幅もそれだけ広がる

と考えたからである。

美知子は、筑波大学の東洋医学技術研修センターに入り、芹沢勝助名誉教授の指導をうけることになった。

芹沢勝助は目が不自由ではあるが、鍼灸の業界のみならず、一般の人にも本などでその名前は知られ、日本鍼灸界を代表する東洋医学の大家であった。

美知子は芹沢のもとで一年間の研修をうけ、研修期間中にはNHKの朝の健康番組に助手として出演するなどの活躍もした。

晴夫は日産厚生会玉川病院の東洋医学内科に入り、代田文彦医師に数年間指導をうけることになった。

代田文彦は、日本の東洋医学界の草分けで昭和の中興の祖とも言われた父親の代田文誌のあとを継ぎ、東洋医学を日本の医療の揺るぎない一角にするために貢献している類いまれな内科医師であった。代田文彦は研修生たちに、常々こう語っていた。

「鍼灸師が医師と対等に話ができるようにならなければ、東洋医学の向上は図れない。どうしても質の高い鍼灸師を養成する必要があるのだ」と。

代田文彦には、日本の鍼灸師の医学的レベルが低いために、日本で東洋医学の評価が高まらないという思いがあった。それを変えていくには、鍼灸師が医師と対等に話せるだけの医学的知識や技術を身につけ、どんどん活躍していかねばならないと考えていた。

代田は教え子の鍼灸師たちに対し、徹底して西洋医学の知識を教えこんでいった。そのことは、かつて西洋医学の立場から東洋医学を証明したいと考えていた晴夫の思いが、代田との出会いでまさに



叶えられていくようでもあった。
「一症例でもよいから、患者さんを治療して治ったら、なぜ治ったのか、その原因を自分なりに分析して、しっかりとレポートしなさい」

玉川病院での研修生と共に

上段左から二人目が代田文彦先生

代田は研修生たちにそう指示し、その内容を毎週行われる臨床生情報会でどんどん発表させていった。

こうした厳しい日々の訓練の繰り返しにより、晴夫は治療技術と臨床に必要な知識や分析力を着実に身につけていき、さらに治療家としてあるべき姿や治療の心構えまでも、代田から叩き込まれていったのである。

代田文彦の父であった文誌は、大極療法をあらわした澤田健に師事したが、その澤田は若いころ満州に赴き、たくさんの患者を治療してきた。その経験と技術が文誌に伝えられ、またそれが子の文彦にも引き継がれている。

そうした代々の流れは、晴夫の父である正寿が満州でたくさん人の治療をし、今その精神を受け継いで同じ道を歩もうとしている晴夫自身の姿とも重なり、不思議な縁を晴夫に感じさせていた。

美知子の研修は一年間で終わったが、晴夫は結果的に

四年間の研修を重ねた。その間、二人は節約につとめ、晴夫は休日の仕事や夜の往診で生活費を稼いだ。

晴夫が研修を受けている四年のあいだに、男の子が二人誕生した。長男には「専太郎」と父の正寿が名づけ、年子で産まれた次男には、正寿と晴夫の二人の名前を合わせて「寿晴」と晴夫が命名した。

美知子は出産と育児に追われながらも、持ち前の頑張りや積極性で、近隣のママたちを集めては健康講座を開いたりしていた。

二人は時間があると、自分たちの将来の夢を楽しく語り合った。

「できるだけ条件の良い場所に治療院をつくって、たくさん患者さんが来るようにしよう」「誰にでも喜ばれるような治療院にしたいわね」

専門学校を卒業してから、長かった晴夫の四年間にわたる臨床研修も、もうすぐ終わろうとしていた。

ニカラグアへの旅立ち

晴夫は研修が終わりに近づいたころ、すぐにでも仕事ができるようにと、治療院の場所さがしをはじめた。

玉川病院がある二子玉川を通る田園都市線沿いの不動産屋を、一軒一軒まわりながら、あそこがい、ここもいと、場所探しにも夢が広がっていた。

そのようなあるとき、美知子は夫の帰りを待ちながら、新聞を開いていた。

何気なく見ていた朝日新聞の社会面のある記事に目がとまった。それは、伊藤千尋という人が書いた「髭のアトムは鍼灸師」という見出しの記事だった。

そこには、日本と地球の反対側にある中米ニカラグアという国で、はりを使って人々を救っているという一人の日本人の活躍が紹介されていた。しかも、その国は内戦の最中だという。

新聞には、あごひげたつぷりの日本人の鍼灸師の写真も掲載されていた。その写真の男の名前は井上真といい、アトムという愛称で呼ばれているらしい。

今まで、ボランティア活動では誰にも負けないほど頑張ってきた美知子の胸が、急に高鳴った。

「日本人でもこんなすごい人がいる。しかも同じはり灸で、外国で困っている人のために貢献しているなんて」

その記事に、美知子の目はくぎ付けになった。

晴夫が帰ってくると、美知子はすぐにその記事を夫に見せた。

晴夫は、ちようどその日、横浜で行われた鍼灸学会へ出席し、はり灸の国際的な広がりのお話を聞いてきたばかりのところであった。

「ねえねえ、これこれ、おもしろそうじゃない」

晴夫は美知子から渡された記事を手にとると、何度も読み返した。

井上真という人の活動の記事を読むと、今自分たちがこの地で開院しようとしていたことが、急に小さなことのように思えてきた。

記事の最後に「ボランティア鍼灸師を求む」という呼びかけがあった。

晴夫の頭のなかで、この呼びかけが何度も何度も繰り返された。

美知子はそんな夫を背にして、「はりで貧しい人たちの役に立つなんて面白そうね」と明るく言い、夕餉のしたくにたった。

「日本で開業するのもいいけれど…、ニカラグアみたいな開発途上国に行つて、東洋医学がどれくらい効くのか、どの程度通用するのか、そういうのを実際にこの目で見て、この手で感じてみたいな。もし行ったら、自分たちもそういう厳しい状況のなかで得るものもたくさんあるだろうし…。例えばたくさんの患者さんを治療することによって、治療の勘なんかも得られるかもしれないな。二年か三年でもいいから行つてみたいな…」



朝日新聞の記事

ひとり言のように晴夫はつぶやいた。

しかし、そのあとは黙って腕を組んだまま、じつと何かを考えているようだった。

晴夫と美知子には、治療院を開院して、豊かで楽な生活をしたという願望はほとんどなかった。むしろ、どうしたら多くの困っている人を助けることができるか、そこに二人の共通した思いがあった。

晴夫は居ても立ってもいられない奇妙な気持ちになってきた。体の奥に潜んでいた自分でもどうにもならないような血が、むずむずと湧き出してくるような感じがした。

「うーん、うーん。よし、行ってみようか。行くのなら家族みんなで行こう！」

晴夫はそう思い立つと、美知子と相談しながら、「髭のアトム」を支援している日本の組織をさがしだし、ニカラグアへ渡航するのに必要な情報を集めはじめた。

美知子は面白い「記事」があると軽い気もちで晴夫にそれを見せたのだが、多分こうなるだろうという予感は少なからずあった。

ニカラグアへの渡航費や生活費は、すべて自前でというのが条件である。

資金は開業のために蓄えてきたものが手元にあるが、二、三年にわたる海外生活を考えると、それだけではまったく足りなかった。

さらに二人には〇歳と一歳の子供がいる。よくよく考えれば、その子供たちを連れてすぐに渡航するのは、どう考えても無理なことである。

また、ニカラグアは亜熱帯の気候で、伝染病も蔓延しているようであるし、さらに大きな問題は、いつ終わるとも知れない内戦が続いている。そんな状況下で、なんとか親の反対を押し切れたとしても、せめて子供の予防注射だけは済ませなければ出発できないと考えた。

二人は熟慮のすえ、出発を一年遅らせることにした。その一年の間に、子供たちの予防接種を済ませ、自分たちを応援してくれる仲間を集めて支援組織を作り、十分な準備を整えてから出発しようと考えた。さらに美知子の持家を売って資金を作ることまで決めたのである。

ニカラグアに家族で行くということを聞き、驚いたのは母のちとせである。

戦時中、初めての子を死産で亡くし、その生まれ変わりのように授かったかけがえのない息子の晴

夫が、かわいい孫を二人とも連れて、内戦が続く遠くの危険なところへ行ってしまうというのである。なぜ大切な息子や孫たちが、大嫌いな戦争をやっている国へわざわざ行かなければならないのか。父親の後を継げば、いくらだって患者はいるのに——と、晴夫たちの言うことが母にはまったく理解できなかった。

「何であなたがオカラグアなんていう国へ行かなければならないの。ほかの人に行かせればいいじゃないの」

「オカラグアじゃないって言ったでしょ。ニカラグアだよ。誰も行く人がいないんだからしようがないでしょ」

「だから、どうしてあなたがアフリカに行かなくちゃいけないの……」

まるで禅問答である。

しかし、正寿は黙ったまま、目をつぶっていた。

恐らく、晴夫と同じ歳の頃、満州へ行つてかなうことができなかつた大志を思い起こしていたのかもしれない。『血は争えない』というが、東洋医学をもって海外へ行こうとするわが息子と、自分の若いときの雄志が重なって見えたのかもしれない。

晴夫と美知子の二人は、知人、友人、親類など知りえるすべての人々に支援を呼びかけ、四百名もの会員を集めて『日本中米東洋医学普及委員会』というNGO（非政府機関）の組織を立ち上げた。

NGOは、ODAとよばれる政府開発援助とは違い、文字通り草の根の有志の集まりにしかすぎない。だが多くの人々による支援組織ができあがると、真心の支援金や東洋医学の本や物資の援助を集

めることができた。また、このときまでに美知子の家屋も八百万円で売れた。

子供の子防接種は小児科の医師になんとか頼みこみ、これ以上早く出来ないというほどの最年少ですませ、あとは長期滞在査証を待つのみとなった。しかし、これが内戦の影響もあって、なかなか許されなかったのである。

晴夫は様々な人脈を通して働きかけ、ようやく在日ニカラグア大使館から長期の査証がおりると、これで準備はすべて整い、あとは出発するだけとなった。

出発を前にして仲間たちが大勢集まり、盛大に歓送会を開いたが、「万歳」を繰り返すようすはまさにかつての出征前夜のようにであり、集まった仲間たちの手前、これでもう後戻りはできないとあらためて二人の腹は決まった。

一九八七年六月、一歳の寿晴を美知子が背中におぶり、二歳の専太朗のズボンのベルトに犬の鎖のように紐をくくりつけ、まるで子犬を連れていくような格好で四人は旅立った。ニカラグアがどのような国か、内戦は本当に大丈夫なのか、生活習慣はどうなのかなど、行ってみなければその実情はまったくわからない。それでも「行けばきつとなんとかなるさ」と不安を打ち消し、志だけを高く胸にたぎらせ、二人の子供を強く抱き寄せながら、日本の成田空港を飛び立っていった。



ニカラグアへ家族で旅立ち

第二章 異国での奮闘

ニカラグアの悲劇の歴史

南北アメリカ大陸を結ぶ、ややつぼまったところに、ニカラグア共和国はある。三角形の形をしたこの国は、北海道と九州をあわせたほどの面積で、そこに東京の半分ぐらいの人口の人々が暮らしている。



中米ニカラグア

気候は亜熱帯に属し、高温多湿ではあるが、豊かな自然に恵まれ、コーヒー、バナナ、砂糖キビ、牛肉、葉巻などの第一次産業がこの国の経済を支えている。

だが社会的インフラの整備が遅れ、一人あたりのGDP（国内総生産）は低く、医療の普及も行き届かないため、男女とも平均寿命は短く、乳児死亡率は高く、世界でも発展の遅れた貧しい国として知られていた。

さらに、火山噴火、地震、ハリケーンなどの自然災害が頻繁に起こり、それらもニカラグアの経済や国民に甚大な被害や苦痛を与えてきた。

この国の歴史を振りかえってみると、決して幸せとはいえない道を歩んできている。

一五〇二年にコロンブスが四回目の航海でこの地を発見すると、その二十年後にはスペイン人が大勢流れ込んできた。

ラス・カサスの「インディアスの破壊についての簡潔な報告」（岩波文庫）によると、それまで恵まれた自然の中で平和に暮らしていた原住民のインディオ達は、スペイン人の入植により、キリスト教の異端者として虐待されたり、食べ物を奪われたり、奴隷として過酷な労働をさせられたり、はたまた捕えられて売りさばかれたりしたという。

一八二一年にグアテマラのクリオーリオ（中南米やカリブ海生まれのスペイン人など）が独立宣言をして、ニカラグアは一時期メキシコの一部となり、一八二三年にはグアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、コスタリカなどの国々とともに、中央アメリカ連邦が結成されたが、一八三八年に再び分かれてしまった。

十九世紀中には、大西洋から太平洋に出る運河建設の候補地としてニカラグアが注目を浴び、イギリス、フランス、アメリカなどの国々が相次いで開発を計画した。

なかでもアメリカは、国内の南北戦争が終わり、二十世紀に入ると、ニカラグア運河を本格的に建設しようとして合意を取り付けた（後に、米国のヘイ・コリア条約により、運河建設の合意と米国の特権事項を承認する『ヘイ・コリア条約』の締結に至る）。

しかし、アメリカによる運河建設は、火山噴火などの災害もあつて難航をきわめ、フランスがパナマ運河建設の権利を得て一九一四年にパナマ運河の開通に成功すると、あえてニカラグア運河を建設する意味がなくなり、アメリカによる運河建設の話はそのまま断ち切れとなった。

アメリカは運河建設をあきらめたが、ニカラグアで運河建設を行っていたときに結びつきを強めたニカラグア国内の親米政権を通じて、相変わらず様々な力による干渉を行なった。そのため、アメリカのやり方に反対する勢力もニカラグア国内で拡大していき、その反対勢力の先頭に立ったのがサンデーノ將軍であった。

サンデーノ將軍はゲリラ戦を得意とし、三十三年にわたりアメリカと戦いつづけ、終にアメリカ軍を撤退させることに成功した。

ところがアメリカ軍撤退という勝利の翌年、国家警備隊の司令官であったソモサはサンデーノ將軍を暗殺し、再びアメリカの支援を取り付けて、一九三七年に自ら大統領に就任してしまったのである。

その時から一九七九年までの四十二年間という長きにわたり、ソモサの一族はアメリカの後ろ盾を得て独裁政治を行っていた。この長期の独裁政権は、人権抑圧や腐敗にまみれ、ニカラグアの民衆にとつてはまさに暗黒の時代ともなってしまった。

ソモサ独裁政権に虐げられた農民、学生、労働者たちは、ソモサに暗殺された英雄のサンデーノ將軍の名前をとつて、サンディニスタ民族解放戦線(FSLN)を結成し、臨時政府を樹立し、民衆の支持を受けながらソモサ独裁政権に対し攻勢をかけていった。

やがて劣勢に転じたソモサ一族は、アメリカに亡命し、ソモサの独裁政治は一九七九年の七月一日にとうとう幕を降ろすことになったのである。

ニカラグアに誕生した革命新政権は、土地改革、教育、医療の面で次々に改革の手を打っていた。しかし、その改革が余りにも急激過ぎたため、政権の内部に不満が渦巻き、意見の分裂が起こり、

政権の維持がますます困難となっていた。

そのころの模様を、日本の新聞社の中南米特派員としてパナマに赴任していた清水武氏は、次のようにレポートしている。

「一九七九年、サンディニスタ革命が勃発した。同じ中米の隣国ということもあって、政府軍と革命軍との戦闘の様子は、日常的にパナマの茶の間のテレビに流れてきた。

戦況は、アメリカとキューバを仲介にしたソ連との駆け引きがこれに加わり、状況を複雑化させていった。

内戦の戦況は、ソモサ（政府）軍の非人道的なやり方が、国際的に非難されるようになってから急速に反政府側（革命軍）に有利に展開していった。

アメリカのテレビ・リポーターが路上で倒れた。

カメラは現場を克明に写している。

その無防備な彼に政府軍の兵士が発砲した。

助けを乞うている彼に容赦なく打ち込まれる弾丸。

銃声と共に地上に横たわったリポーターの体が、土煙の中で、十センチほど飛び上がった。

なんともショックで残酷なシーンが、世界の茶の間に飛び込んだのである。

私も同じジャーナリストの一人として、あまりの生々しさに身を震わせる思いだった」

非情で残酷な内戦の様子が浮き彫りにされる。同じ国に生まれた国民でありながら、大国の思惑を背景とした政治の対立で、憎しみ、殺し合いが生まれているのである。



サンディニスタの勝利 1979年7月19日

清水氏はさらに、その後の推移を次のように伝えている。「以来、国際世論の支援を受け、コマندانテ・セロことエデン・パストロ將軍の英雄的な戦いのおかげ、民衆の熱狂的な拍手と興望をになって、サンディニスタ軍が首都マナグアに凱旋の入都をしたのである。」

でも、歴史はなんとも思いもかけなかった方向に動いていくものか！

独裁政権からの《開放の救世主》とあれほど歓迎され、誕生したサンディニスタ政権も、当初の民族主義路線からやがて急速に左傾化し、ソ連、キューバの援助を受ける中で、いつしか《真つ赤》に変色してしまった。

そして今度は、左からの思想の統一と軍備の拡大化が進み、発言の自由の芽は再び摘み取られてしまったのである」と。

かわいそうなのは、右に左にと政治に大きく振り回される一般庶民である。平和で幸せな生活を求めるという人間としてあたりまえの願いが、為政者と大国の横暴によつて踏みにじられてしまうのであった。

一九八一年に誕生したアメリカのレーガン大統領政権は、ニカラグアに樹立された反米政権から反米の嵐が中央アメリカ全体に広がることを懸念し、ニカラグアの反政府組織であるコントラに武器を与えた。

反政府軍であるコントラは、アメリカからの軍事支援を受けて活気づき、一方のサンディニスタ政権側はキューバやソ連から軍事支援を受け、内戦の長期化はますます避けられない状況になっていった。

内戦により、国家予算の五〇%以上が軍事費にまわり、国の将来を担う若者は次々と兵隊としてとられ、国民の生活は慢性的な物不足で苦しめられた。

息子を徴兵された母親たちは涙し、人々の内戦への不満は日増しに高まり、それが内戦を終結させ

る大きな原動力となっていた。

ようやくコンタドローの仲介により一九九〇年に総選挙が行われ、内戦はようやく終了したが、それは内戦が始まってから十年もたってからのことであった。

ニカラグアの民衆はソモサの独裁に苦しめられ、その次には内戦で悲劇を味わい、国も国民も大きく疲弊してしまっていた。

内戦が終了すると、新たに就任したビオレッタ・チャモロ大統領は、直ちにアメリカや日本を訪問し、外国との関係改善に尽くした。そしてその努力が実り、経済封鎖は解かれ、ようやく物がどんどん国内に入ってくるようになった。

内戦後まもなくすると、今まで道路をわがもの顔で走っていた床の抜けたオンボロ自動車は姿を消し、スーパーマーケットにも外国からの輸入品が並ぶようになり、豊かに変わっていくように見えた。

しかし、そうした恩恵を受けられたのは、ほんのわずかな金持ちであり、ほとんどの貧乏なニカラグア人は、ただ指をくわえて見ているだけであった。

新政権になっても政治の世界はあきれほどの汚職と公金横領、不正が続き、民衆は消費税一五%という高い税金に苦しんでいた。

失業率も六〇%を超え、いたるところで泥棒やひったくりなどの犯罪も絶えない。

小さくても家のある人はまだ良かった。町をちよつとはずれると、板を張り合わせた壁に、ビニールシートを屋根代わりにかぶせて暮らしている大家族が多い。

トイレはというと、地面に穴を掘り、満杯になれば埋めて他のところに穴を掘るといった繰り返しで、衛生面などは二の次であった。

ゴミの集積所になると、生活に使えそうな物、売れそうな物を求めて、貧しい大人から子供までもが大勢集まって来た。

ゴミを収集したトラックが到着すると、われ先に新しいゴミを求めていつせいにかけ寄り、さかんにゴミの山を掘りかえす。

しかし、集められてきたそのゴミも、この国の貧しい状況を反映してか、再利用できそうなものはほとんど無いのである。

このように、貧困と災害と内戦で苦しめられてきたニカラグアの人々ではあるが、しかし表情は意外と明るく、みな前向きであった。

飛行場で荷物をもって建物を一歩外にでると、何人もの子供たちがあつという間に寄ってきて荷物を取り合う。荷物運びで、駄賃を稼ごうというのである。

また交差点などの赤信号で車を止めると、若者たちがすぐに走りより、頼みもしないのに車のフロントガラスを勝手にふきはじめる。

また車道の両わきには、新聞、飲料、果物や野菜など、あらゆるものを販売していて、減速するとすぐかけ寄って来て、開けた窓から品物を強引にさし入れてくる。

大人も子供もあらゆることを商売にし、生活するために必死の努力をしているのである。首都でもあたりまえのように、馬車と車が一緒になって走っている。牛車も見える。

だが、そんな生活の彼らにも悲壮感はない。ラテン民族の明るい性格からくるのかもしれないが、どんなに困っていても、笑顔で目が輝いているのだ。

貧しくても、災害に苦しめられていても、内戦で悲しい思いをさせられても、生きるためにそれを

嘆いているひまなど彼らにはなかったのかもしれない。過去を振りかえるよりも、明日に向かって生きていくというのがラテン民族、とりわけニカラグア共和国の人々の特徴なのかもしれない。

レオンからのスタート

日本からニカラグア共和国に行く直行便はない。必ずどこかの国で飛行機を乗り継がなければならぬ。

幼子二人を含んだ四人の家族は、JAL（日本航空）の快適なサービスを受けながら、アメリカ・ロサンゼルス空港に到着した。乗り継ぎ時間の都合で、アメリカで一泊し、さらにメキシコで乗り継いでニカラグアに入る予定である。

八巻家にとってこれが初めての家族旅行であり、それも行き先は、日本人にまったく馴じみのない異国である。

日本からアメリカに向かう機内は、すべて日本語が通じた。

アメリカからメキシコに向かう機内は、簡単な英語が通じた。

そして、メキシコからニカラグアに向かう機内では、スペイン語が中心の世界に変わり、耳慣れない外国語の機内放送が流れると、急に不安な気持ちになった。

アメリカまでの機内は非常にきれいであったが、乗り継ぐごとに飛行機の質が落ち、ニカラグアに向かう機内では、わがもの顔で飛ぶハエさえ目についた。

小さな飛行機の中は日本でもあまり見慣れないラテンアメリカ系の人が多いせいかな、なにか雰囲気

が違う気がする。

時おり、通り過ぎる乱気流により、飛行機がガタガタと大きく揺れる。

旅の疲れのせいか、子供たちのぐずりもとまらない。

美知子が狭い飛行機のなかで幼子をあやしていると、めずらしい東洋人家族の様子に、ちらちらと視線が注がれてくる。

飛行機はメキシコから五時間かけて、ニカラグアの首都マナグアにある古びたアグスト・セサル・サンデーノ飛行場に夕闇のなか到着した。

飛行機のドアが開けられ、一步外に出ると、たちまちムワツとした生暖かい湿気が体をつつみこんだ。

タラップを降りると、すぐに一歳の寿晴を美知子が背中におぶり、二歳の専太朗にくくりつけたひもを晴夫がしつかりとにぎり、緊張した面持ちで飛行場の建物に歩いて移動した。

長期滞在のために準備したいくつもの大きな荷物を受け取ると、ものものしい税関を通り、到着ロビーにむかえに来ていたニカラグア人と会った。

古びたトラックの荷台に荷物とともに四人が乗ると、飛行場からレオンまでの真つ暗な夜道をただひたすら走った。

外灯などない闇夜の道は、周りの景色など全くわからず、自分たちがどこを走っているのかさえわからない。前を照らす車のライトだけが頼りである。

晴夫も美知子も不夜城のような明るい日本では、これほどの闇夜など経験したことがなかった。

途中、軍服に銃を持った人間を見かけたが、車を止めると危険だということで、そのままかまわず

に突っ走った。

「これはもしかすると、とんでもないところに来てしまったのかもしれない」

ドキドキしながら、子供を抱きよせ、車のゆれるままに息を凝らしてじっとしていると、二時間ほどしてレオンの街の細々とした灯りが遠くに見えてきた。

レオンは、スペインの植民地時代、ニカラグアで最も栄えた街である。

その中心には中米で最大規模を誇るレオン大聖堂があり、聖堂の両脇にはライオン（スペイン語でレオン）の像が人々を迎えている。

この聖堂は、一八世紀の半ばから建設がはじめられ、全体の完成までになんと百年もかかったという。

晴夫たちがニカラグアに到着した一九八七年は、まだ内戦が続いていたが、レオンでの戦闘はすでに終わっており、かすかな灯りの中に浮かび上がる建物のいたるところに、無数の銃弾の跡が残っているのが見えた。

また地雷や戦闘で傷ついたのであろうか、手や足のない若者や、体のあちこちを包帯で巻いた人が、暗がりになっったり座ったりしているのも見えた。

平和な日本からやってきた晴夫と美知子は、テレビや映画でしか知り得なかった世界にそのまま飛び込んでしまい、夢とも現実ともつかない不思議な感覚に包まれていた。

内戦のことは新聞の記事でも知っていたつもりだが、知ると見るとでは大違いである。

実際に傷ついた人々や破壊された建物を目の当たりにすると、平和な日本から来た自分たちが今ここにいること自体に現実味がなく、悪夢を見ているような気持になる。

「ここで道に迷ったらどうしよう」

急にそんな心配が心にわいた。スペイン語をまだほとんど話せないことが、今さらながらいつそうの不安をかきたてた。

「このようなところで迷子になれば、家族みんなが路頭に迷ってしまうかもしれない。今から日本へ戻ることもできないし……」

晴夫は、自分一人で家族を守ることができののだろうかと急に心配になったが、そんな晴夫の心情を察してか、一歳の子供をあやししながら美知子が言った。

「大丈夫よ。なんとかなるわよ」

晴夫は美知子の気丈さに驚きながら、負けまいと言葉を返した。

「分かっているよ。たとえ言葉が通じなくても、ニカラグアの人だって同じ人間だもの。僕たちは、みんなの役に立つために来たのだから、一生懸命やれば、必ず分かってもらえるさ。大丈夫！」

そう晴夫は美知子に言葉を返しながら、それは弱気になりそうな自分の心にも一生懸命に言い聞かせていた。

レオンには、日本から鍼灸師の水村靖夫が先に着任していた。

水村は夜遅いにもかかわらず、晴夫たち家族の到着をずっと待っていてくれた。

晴夫たちは、右も左もわからないこの異国で、言葉の通じる日本人に会えることが、こんなにも嬉しいことだとは思っていなかった。

水村は八巻夫妻の赴任を前もって聞いてはいたが、まさか本当に幼子二人をつれてニカラグアにや

つてくるとは信じられなかった。ましてや、晴夫も美知子もスペイン語がそれほどできないという。あまりに無謀な家族ではないかと思っていた。

水村のほかに、平山孝信という鍼灸師が一九八六年の六月からニカラグア入りしていた。

平山は、かつて成田闘争と称して成田国際飛行場建設を巡って争いがあったとき、建設反対派に属し、成田で座り込みをして建設を阻止する活動をしていたという。

一方の水村は、空手道を極めた硬派の思想の持ち主で、座り込んだ人をごぼう抜きにする成田空港建設推進側の一人だった。

考え方も行動も相反する二人がニカラグアの地で出会い、協力して仕事を始めたというのも奇妙な縁であった。

だがその平山は、晴夫たちがニカラグアに来ると、すぐに入れかわるように帰国してしまった。

八巻家がニカラグアに渡るきっかけとなった「井上アトム」こと井上真は、一九八五年一月からニカラグアで鍼灸治療を開始し、このときすでにレオンのオスカル・ダニロという大学病院のリハビリ科で、鍼灸医師として働いていた。

このように考え方も生き方も違った人間同士が集まって、中南米ではじめてという東洋医学のプロジェクトを、これからこのニカラグアで始めようとしているのである。

夜も遅かったので、自己紹介も簡単にすませると、すぐに用意してくれていた家に案内された。それは小さな一軒家であり、わずかな庭もついていた。

白壁の家の中は十畳ほどの一部屋で、ここでこれから家族四人が生活していくのである。

ニカラグアの多くの人々が、ベニヤ板を張り合わせたような粗末な家に大家族で暮らしていることを聞かされると、これでも大変ぜいたくな方なのだと思わざるを得なかった。

ニカラグアへ渡る前に、できるだけスペイン語を勉強しておいたほうがよいと言われ、美知子は子育てをしながら、こつこつと勉強していた。しかし晴夫は渡航準備に忙しく、スペイン語の勉強をする時間の余裕がなかった。これが後にどれほど苦労の種になるかを、このとき晴夫はまだ予想すらできなかった。

ニカラグアに着いた翌日、二人は子供たちを連れて近隣の家々にあいさつにまわった。

晴夫はジェスチャーと片言のスペイン語をまじえて、ここに来て住むからよろしくと伝えたつもりだったが、ほとんどその言葉が通じず、奇妙な東洋人家族が物乞いに来たのかと困惑の表情をされた。

しかしその中で、裏手に住む十人の大家族のリディア・カステイヨだけが、彼女にも同じ年頃の子供たちがいたことから、晴夫たち家族に関心を持ってくれて、詳しく話を聞いてくれた。

リディアはその出会いをきっかけにして、食べ物購入のことから日用品の調達の仕方にとりまき、二人に親切に教えてくれた。そして何よりも晴夫たちにとつて助けとなったのは、二人の子供のめんどうまでみてくれたことであつた。

子供の専太郎と寿晴は、早朝、親が目覚ます頃にはすでにその姿が家になかった。専太郎が寿晴の手をひいてリディアの家にパンツ一つで行き、同じ年頃の子供たちにまじって、おもちゃを勝手に引っぱり出して遊んでいたのだ。子供たちの世界には、国の違いや言葉の壁など関係なかった。

ニカラグアでは、年上の子は年下の子のめんどうをみるのがあたりまえのことであり、リディアも

また、専太郎と寿晴を自分の子供たちと分けへだてなく世話をしてくれた。

晴夫と美知子は何から何まで助けてくれるリディアに心から感謝しながらも、今はありがたく甘えるしかなかった。

レオンに着いて、異国の環境に慣れる余裕もないうちに、すぐに町の中心部にあるペルラ・マリア保健所の二階に併設された鍼灸クリニックで、晴夫と美知子は治療をはじめた。

当時のニカラグアでは、人々が病院などでたやすく医療を受けられる状況になかった。国家予算の六〇%近くが軍事費に使われ、医薬品は極端に不足し、医薬品のほかに、検査器具、検査に必要な資材、それに医師までもが不足していた。また医療に支払えるお金さえ、多くの人々は持ち合わせていなかった。

その点、東洋医学のはり灸治療は、はりともぐささえあれば、高価な薬や検査器具などの必要がなく、費用もほとんどかからない医療である。そして場所を選ばず、どこでも治療を行なうことができ。そこにはり灸治療の良さがあり、東洋医学をニカラグアのような貧しく恵まれない国で役立てようとするねらいもあった。

レオンの街には、病気の治療を受けたくても受けられない人があふれるほどいた。だが、はり灸治療などの東洋医学という言葉を知っている人は、全くいなかったのである。

どうしたら自分たちの治療を知ってもらえるか。どのようにしたら受け入れてもらえるのか。まずそこから始めなければならなかった。そのためにも、一人でも多くの人に治療を体験してもらい、効果を知ってもらうしかなかった。

いざ治療を開始すると、治療のまえに言葉の問題が大きな壁となって立ちはだかった。

ニカラグア人が治療を求めてやってくる、スペイン語がまだうまくできない晴夫は、大きなジェスチャーと大げさな顔の表情で、どこが痛いかを聞こうとした。

その様子を状況を理解しない人が見たら、おかしな東洋人がこっけいな踊りをしているように見えただかもしれない。

はじめは、患者が話すスペイン語を辞書でいちいち調べながら、症状を確認したり、患者の体のあちこちを押して、痛みのためにゆがめた顔の表情や反応によって疾患の部位を特定したりして、そこにはりを打つなどという手間も時間もかかる治療を行なっていた。

ほとんどが痛みのある場所にはりを打つという、なんとも単純な治療法ではあったが、はりを打たれて痛みから解放されたニカラグア人は、まるで夢でも見たかのように目をまるくして驚き、満面の笑顔で帰っていった。そして、その驚きの効果を家族や友人たちなど出会う人々に話しまくり、今度はその話を聞いた人たちが、ぞくぞくと保健所におし寄せてきた。

晴夫も美知子もどんどんやってくるニカラグア人の治療を懸命にこなしながら、使えるスペイン語を少しずつ身に着けていった。

しかし、それでもスペイン語で恥ずかしい失敗をしてしまうことがよくあったのである。

あるとき足が痛いという患者が、晴夫の治療を求めてやって来た。

晴夫は、足にはりを打つので靴下を脱ぐようにと彼に言った。

しかし男は驚いた顔をして、晴夫の顔をじつと見ている。

晴夫は自分のスペイン語がうまく伝わらなかったのだと思い、もう一度はつきりと大きな声で、靴

下を脱ぐようにと言った。

すると男は顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

そこに水村があわてて飛び込んできた。

水村の話しを聞いて、今度は晴夫の顔が真っ赤になった。

靴下（カルセティーネス）と言うべきところを、パンツ（カルソンシーヨ）と言ってしまっていたのである。

また、手の不自由な患者が来たときのことである。

どの程度まで手が使えるかを確認したくて、スプーンを使って食事ができるかと尋ねた。

とたんに患者の顔が青ざめた。

このときも、クチャラ（スプーン）と言うべきところを、クカラツチャ（ゴキブリ）と言いまちがえて、患者にたずねていたのである。

こうした言葉のいい間違えは、普段の生活でもよくあった。

ある日、肉の炭焼きをしようと、店に炭を買いに行った。

店のおばちゃんに晴夫はたずねた。

「ボルカンはあるかい」

「ボルカンねえ」とおばちゃんは怪訝な顔をして、店のそとに出てきて言った。

「ボルカンならあっちだよ」

そう言いながら、遠くの方を指さした。

おばちゃんの指さす先に見えたのは火山だった。

そのときになつてはじめて晴夫は気がついた。

「またやつちやつた。ボルカン（火山）じゃなくて、カルボン（炭）だった」

晴夫とおばちゃんは大笑いになった。

晴夫のこうした言葉のミスは日常茶飯事であったが、こうして恥をかきつつ笑われつつも、スペイン語の能力は日ごとに上達していったのである。

物が無い―驚きの生活事情

レオンで内戦が一段落したとはいえ、人々に仕事はなく、お金もない状況は、以前とまったく変わらなかった。そのこともあり、晴夫たちのところで無料で治療が受けられるときいた、病気に苦しんでいる人々の喜びは大きかった。その治療が、彼らにとってわけのわからない東洋医学であっても関係なかった。

痛みから解放されたある患者は、二人に抱きついてその喜びを表し、ある患者は家で大切にしているものを感謝の気持として持ってきた。

そのお礼とは、産みたての鳥の卵二つであったり、ニカラグアではぜいたく品である化粧石鹸であったり、にわとりを逆さまにするして生きたまま持ってきた人もいた。さらにどこで捕まえたのか、イグアナを持ってきた人もいた。

ものが無いうえ、ほとんどの生活必需品が配給制であったときに、お礼として持ってきた品々がどんなものであるうとも、それが彼らにとつてどれだけ貴重なものであるかを、晴夫も美知子もよくわかっていた。

無いのは物だけではなかった。電気や水も無かった。

ニカラグアでは停電が多いというより、電気が送られてくるときのほうが少なかった。夜になって電気が来ると、みんなが歓声をあげて電気様を迎えた。

水道の蛇口があつても水が出ないので、いろいろと工夫をして水を溜めておくのだが、その溜めた水さえなくなるとお手上げである。そんなときに水が出てくると「水がでた！」と大きわぎで水に敬礼する。

しかし、不思議なことに、水が無くてもビールだけはふんだんにあつたのである。しかも、当時は値段がとんでもなく安く、一ドルでビールの小ビンが七本も買えた。

だが喜んでばかりはいられない。電気がないということは、ビールを冷やす冷蔵庫が機能しないということであり、水も出ないので、水につけて冷やすこともできなかつた。

ニカラグアは年間を通して暑く、日中に道を歩くときは、日かげをさがしながら歩く。レオンの道は平らでなく、でこぼこばかりの道なので、とたんに体から汗がほとばしり出てくる。

そこで、暑いし、汗をかいたからビールでも飲もうかと思ひ、冷えていないビールを飲むと、ガボと泡だけが胃の中に入っていく、ゲップばかり出て、二本目はとても飲む気になれなくなるのである。

電話機はあることはあるが、まずそのままかかたためしが無い。中央郵便局の電話局へ行っても

何時間も待たなければならず、国際電話をかけるときは、何日間もかけて挑戦しなければならなかった。

日本で、電気も水も電話も使えるのがあたりまえの生活をしてきた晴夫たちにとって、ニカラグアでの生活はまさに驚きの連続であった。

ニカラグアでの交通事情はといえば、主な交通手段はバスかタクシー、そして各都市を結ぶ鉄道があった。



蒸気機関車

鉄道に乗ると、蒸気機関車から出る黒煙が、後ろにつながれた客車にもろに流れてくる。開いた窓から、のどと目に黒煙が直撃するからたまらない。汗にまみれた顔に煙があたりと、煙のすすでベトベトになる。

しかも、裏街道の林や野原の中をゆっくりシユツシユツといいながら走っていき、駅だかなんだかわからないところに停車すると、荷物の積み下ろしが終わるまでなかなか動かないのである。

ニカラグアの鉄道にとって時刻表など関係なく、のんびりとした列車は、時にはバスの四倍ほどの時間がかかることもあった。



満員のバス

こうした鉄道の運賃は確かに安かったのだが、あまりに効率と評判が悪く、結局採算がとれずに一九九〇年ごろほとんどが廃線となり、今は全くその姿を見なくなった。一般に地方から地方への移動手段はバスが利用されている。そのためマナグアのバスの切符売り場はいつも長蛇の列でゴった返っていて、その列はちよつとのスキに割り込みをされるため、切符を買う人は常に殺気だっていた。

切符を購入してバスに乗り込むと、バスの中は物売りが入り交じり、ジュース、コココーラ、水、鶏肉のフライ、果ては薬まで売っていた。

さらに目の不自由な人が一曲披露して、生活費をつとめている場面にも出会う。

バスの座席に座った途端に「暑いねえ。どこまで行くの？子供は何人いるの？」と見ず知らずの人から話しかけられてくる。

おしゃべり好きなニカラグア人は、だれかれとなく話しかけ、おしゃべりに終点がない。

知らない人とはしゃべらず、目もあわず、貝のように口をかたく閉ざしている日本人とは大違いである。

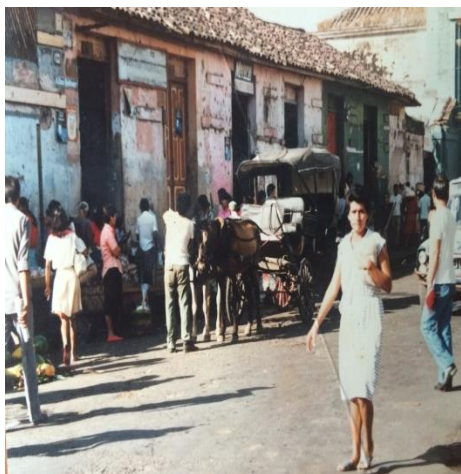
バスが走り出すと、運転席近くのスピーカーからラテンの音楽がガンガンなりだす。

その音楽が途絶えると、すかさず乗客から「どうしたの。音楽がないよ」と催促がかかる。このようにニカラグアのバスは、まあなんともにぎやかなものである。

タクシーはどうかというと、あまりの骨董品の車だらけで、笑ってしまうというより感心敬服に値するかもしれない。

例えばドアがなかったり、床に穴があいていて道路がみえていたり、フロントガラスがヒビだらけだったりしているタクシーが平気で走り、それが人々に当たり前のように受け入れられているのだ。

しかし、こうしたドアのないタクシーに乗ると、他人に見られていないのに、なんとなく気恥ずかしい気持ちになるのは、やはり日本人だからだろうかと思つた。



レオンの町並み

その破損ぐあいは半端でなくても、この国では車検などというめんどうなものではなく、動きさえすればよいのである。ただ走りだすとガタガタと音がうるさいのが難点であった。

バスに限らず、タクシーでも運ちゃんの立て続けの質問攻めが始まり、日本人ならきつと落ち着かないだろう。

タクシーには、地方と地方を結ぶインター・ロカールという少し大きめのものもある。それは運転手を入れて前列に四人、後列に四人が乗れる車で、昔の古いアメリカ車がその任に就いている。

ある日、晴夫はレオンからマナグア行きのそのタクシーに乗った。運転手を含めた前四人はかなりきつく、晴夫には浪人時代に通った予備校の四人掛けの机を思い起こさせた。

そのタクシーは約八〇キロのスピードで軽快に走っていたのだが、途中の道ばたで餌をついばんでいた鶏が、どうしたことか、そのタクシーのヒビの入ったフロントガラスめがけて飛んできた。

運転手はブレーキを踏む余裕もなく、鶏があたったフロントガラスは粉々に割れ、そのガラスの破片が晴夫たち乗客の頭や顔や胸にもふつてきた。

運転手は「なんてこった。鶏野郎め！」と怒鳴り、停車するのかと思いきや、そのままマナグアまでノンストップで走ってしまった。

晴夫を含めた乗客は、ぎゅうぎゅう詰めで身動きがとれず、ガラスの破片を身にあびたまま、マナグアでようやく開放されたのである。

晴夫たち日本人は、ニカラグアで暮らし始めて、日本人としての常識や考え方を変えていかなければ、この国では生活できないと感じていた。しかも、どんなに厳しい状況であっても、この国の人々はたくましく明るく生きているのである。ものが無くても、みんなで助け合って生きているのである。

こうしたニカラグアでの驚きの生活を経験しながら、保健所の一角を借りてはじめたはりの治療は、現地のニカラグアの人々に着実に受け入れられていった。

そのことを明確に裏付けるように、患者数はうなぎのぼりに増えていき、東洋医学がこのニカラグアでも受け入れられ、必要とされていることを確信させた。

晴夫と美知子が行なうはり治療は、たちまちレオンの町で評判となり、朝早くから保健所の前は治療を待つ人でごった返し、その様子を目の当たりにした保健所の医師たちは、こんどは自分たちが手に負えない患者を次々とまわしてきた。

いつしか晴夫や美知子は「はりを使う東洋の魔術師」と呼ばれるようになり、人々は治療が終わると満面の笑顔で、親しみをこめて「グラシアス（ありがとう）、ハルオ」「グラシアス、ミチコ」と言っ

ウイロンとの出会い

ニカラグアでの物不足はいいかわらず深刻であり、ニカラグアで二番目に大きな街のレオンでさえ、生活に必要なものを手に入れるのに苦労した。

ボロボロの米、泡がほとんどたたない石けん、マッチ、トイレットペーパーなど、それらが月に二回配給される。

しかし、それでも必ず手に入るとは限らなかった。実際にもものがないのだから文句の言いようもないと、誰もがあきらめていた。

やむなくどうしても必要なものを手に入れようとするならば、違法なヤミ取引に手を染めなければならなかった。

晴夫たちもヤミ取引で生活必需品を買おうとしたが、人々はものが少しでも余分であれば、真つ先に親族や親しい友人にゆずるので、外国人がヤミ取引で何かを手に入れようとしても、それは容易なことではなかった。

晴夫や美知子を悩ませたのは、こうした慢性的な物不足だけではなかった。ニカラグアに赴任して数ヶ月もしないうちに、病魔が晴夫と美知子を襲ったのである。

まず、美知子が Dengue 熱にかかった。

Dengue 熱とは主に熱帯地方に発生するウイルス性の疾患で、蚊によって媒介される病気である。その症状は、高熱や全身性の関節痛が起こり、重症になると出血熱やショック症状まで引き起こすことがあるやつかいな病気である。

美知子はこの病気にかかり、しばらく歩くことさえできない状態になった。

だが幸いにも晴夫のはりの治療により、はやく回復していった。

美知子が Dengue 熱を乗り越えたら、今度は二人とも肝炎に罹患してしまった。

肝炎の治療には、安静と栄養が必要である。

しかし、物不足のこの国で、栄養のある食べ物を手に入れることなど簡単ではなかった。

このときばかりは二人にとって悩ましい時間をすごさなければならず、日本から遠く離れた国で高熱にうなされながら、ただひたすら病期が過ぎ去るのを待つしかなかった。

肝炎がようやく乗り切れたと思ったら、こんどは晴夫がマラリアに二度もかかり、生死の境をさま

よった。

高熱が出ると横にならなければ耐えられず、熱が過ぎると薄荷（はつか）のようにカラツと体がすつきりする。この繰り返しが三日熱型マラリアの特徴のようである。

肝炎もマラリアもかなり耐えなければならぬ大変な病気であったが、ほかにも晴夫はこんな危険な体験もした。

家の台所にある引き出しを開け、中のタオルを取ろうとして左手をいれたところ、シュツという音とともに、人差し指を刃物で斬られるような鋭い痛みが走った。

「アツ、痛！」

見ると、タオルの中に体長六センチほどの黒いさそりがいた。急いで叩き落とし、靴で踏み殺した。

サソリの毒は猛毒で、簡単に人の命を奪うときいている。死ぬかもしれないとの恐怖に震えながら、手元にあつたもぐさですぐに刺された箇所を灸を試みた。

いくつもいくつも自分で灸をすえ続けた。熱いどころか不思議にその灸の刺激を心地よく感じていた。

この灸の効用だったのだろうか、少ししびれが残っただけで、大事に至らずにその場は済んだ。

サソリに刺されるなど、まさにニカラグアならではの出来事であった。

ニカラグアではこのように物不足による生活苦、命にかかわる数々の病気などの問題が、次々と二人に襲いかかり、重くのしかかっていたのである。

しかし、このような困難な状況と闘い、必死にがんばる二人を見つめ、陰に陽にはげまし、支えて

くれるニカラグア人もいた。

一人は、晴夫と美知子にとつて母のようなリディアであつた。

リディアは膝が悪いので、たびたび美知子がはりの治療をしていたが、リディアが二人に接するときは本当の母親のようにやさしく、いつも二人の心の支えになっていた。

またリディアにはノルマという娘がおり、美知子はそのノルマとも姉妹のように何でも話すことができ、とても親しかった。

そのノルマの夫は、ウイロン・バヤダーレスと言ひ、彼はサンディニスタ政権時代に第二地区の厚生省の局長をしていた西洋医学の医師であり、フランスへの留学経験もある学識豊かな人であつた。

しかし彼は、東洋医学を全く信用していなかつた。そのため、晴夫や美知子への態度もそつげなく、顔を合わせても、わざと無視するような冷たい態度をとつていた。

ところが、あるときそのウイロンが腰を傷めて動けなくなつてしまつた。

医師でもある彼は、いろいろと医学的な理屈は言うが、自分の腰痛を西洋医学の医師が治せないことぐらいはわかつていた。

そこで美知子が「私が治療をしましょう」と彼に話しをもちかけた。

ウイロンはしぶしぶ美知子の申し出を受けた。

「東洋医学に不信感がある人に、無理にはりを刺すわけにはいかない」

美知子はそう思い、ウイロンがまだはりより抵抗の少ないであろう指圧からはじめることにした。

指圧の刺激に慣れてきたところで、今度は皮内鍼という小さなはりを腰の表面に浅く刺し、絆創膏でとめた。

うつ伏せになっていたウイロンは、自分の後ろで何が行われているのか全く見えない。覚悟していたはりの痛みはぜんぜん感じず、美知子はきつと困ってまじないでもしているのであるうと思つたほどであった。しかし、先ほどまで痛みで緊張していた腰の筋肉がゆるみ、楽になったような気がした。

ウイロンは美知子から声をかけられ、恐る恐る起きあがってみた。

すると、いままで三日間も動けなかったのに、すぐそのまま起きあがることができた。

ウイロンは自分の体で起こったことに驚いた。

しかし、頑固な彼は、これは偶然よくなつたのだと言い放つた。

それからウイロンはふたたび腰痛を起こし、また美知子の同じ治療を受け、はりの驚くべき効果を体験した。

“東洋の医術は確かに効果がある”

さすがのウイロンもはり治療の効果を素直に認めざるを得ず、それからは腰痛を発症するたびに、すぐに美知子のはり治療を自分から求めた。

こうしてウイロンは東洋医学の効果を自分の身体で体験すると、美知子と晴夫に対して、尊敬と敬愛の思いを持つようになつていった。

“お金のかかる西洋医学に比べて、はり治療はほとんど費用がかからない。今のニカラグアに必要なのは、多くの貧しい人を助けられるこうした医療ではないのか！”

“また、晴夫と美知子は真剣にニカラグア人のことを助けようとしている。このような素晴らしい人間の外国人に今まで出会つたことがない”

ウイロンの心は大きく二人に傾き、自分にできることがあれば、何でもしてあげたいという気持ち

に大きく変わっていった。

大柄なウイロンにとつて、小さくてやさしい日本人夫婦は、とても愛おしく思えた。

二人に出会うと、ウイロンは大きく手を広げて、いつも二人を強く抱きしめるのであった。

晴夫も美知子もウイロンに抱きしめられると、自分達が赤ん坊になったような不思議な気持ちになり、なんとも言えない安心感を覚えた。

そんなあるとき「今日は一杯やろうじゃないか」と、ウイロンが晴夫を誘った。

彼の友人であるおかまちゃんと三人で、夜のレオンの街を飲み歩き、痛飲して明け方に帰宅したが、それらはすべてウイロンのおごりであった。晴夫がはじめてニカラグア人から御馳走になったのがウイロンであった。

ウイロンは晴夫たちに、ニカラグアの医療の実情や社会情勢について、知っている限りのことを教え、治療で問題があれば、どんなことでも相談にのった。そして互いに深い信頼関係で結ばれ、最高の友人となつていった。

晴夫の子供たちは、あいかわらずリディア・カステイヨが面倒を見てくれた。その子供たちも、もうすぐ四歳と五歳になろうとしていた。

こうしたニカラグアの人々のやさしさと助けが、晴夫たち家族を支えていた。初めは二、三年のつもりでやって来たニカラグアだが、まもなく三年目になろうとしても、日本に帰国する思いにはなれなかつた。

「何のためにニカラグアに来たのか。何のために今まで苦勞してきたのか。どれだけのことがこの国

で出来たのか”

そう考えると、今ここで帰ってしまえば後悔だけが残ると思った。まだまだやらなければならないことが山ほどあると感じていた。

二人のスペイン語は苦労の甲斐があつて、またたくまに上達し、ニカラグア人とのコミュニケーションもほとんどできるようになっていった。

二人には優秀な師のもとで特訓を受けた高い治療技術がすでにあるので、ニカラグアのどこに行っても活躍できる自信があつた。

「レオンだけでなく、医療に恵まれないところは、漁村、山間部、国境地帯などにたくさんあるはずだ」

実際にそうした地域を探してみると、ニカラグア国内にはあふれるほど浮かび上がった。

チチガルパ、エル ビエッホ、コリント、コシギーナ、アセラドーレス、ソモティーヨ、サントトマス、アチュアパ、カモアパ、ファイガルパ、プエルト カベサ、ブルーフィールズ…。

どこの地域も、自分たちが治療に来るのを心待ちにしてくれているように思われた。

「よし、僻地への巡回診療をはじめよう！」

晴夫と美知子の目は、レオンから外にも向けられ、自分たちの治療を必要とする人のもとへ自ら飛び込んでいこうという気持ちが高まっていった。

僻地での診療活動

レオンでのはり治療は、いつもながら朝早くから治療を待つ患者で大騒ぎの状況であった。もはや数人の日本人スタッフだけでは対応できない。

だが自分たちの治療を必要としているニカラグア人は、ここレオンだけではない。僻地へ行けば行くほど、正式な医療を受けられない人はもつと多いはずなのである。

「医療のない辺ぴなところでこそ、自分たちの治療をもつと役に立てなければならぬ。そのためニカラグアに来たのだから、今のやり方を根本的に見直さなければならぬ。さらに、僻地に行つて治療をするだけでなく、自分たちに代わつて、そこで治療のできるニカラグア人鍼灸師を育てることも、これからは大切だ」と考えるようになっていった。

かつてニカラグア人の医者に鍼灸を教える講座を開いたことがあつたが、受講した医者たちは、鍼灸を自分のクリニックの宣伝文句のひとつに利用しても、貧しい人たちを助けるために活用しようとはしなかつた。また西洋医学のほう为上という意識が強く、真剣に東洋医学を学ぼうとさえしなかつた。

そうした経緯から、こんどは医者を対象とはせず、一般のニカラグア人から鍼灸師を育てようと考えたのである。その第一歩として、一般人むけの本格的なはり治療のための東洋医学講座を開くことを考えた。

講座は百八十時間という長い時間を使い、基本となる医学知識、経穴（ツボ）、よくみられる症状の

治療、禁忌（やってはいけない治療）など、実践的で重要なことを徹底して教えこむ内容にした。そしてこの講座を終えたら、レオンのクリニックで臨床研修を三カ月ほど受けさせ、ニカラグア人鍼灸師を誕生させようという計画であった。

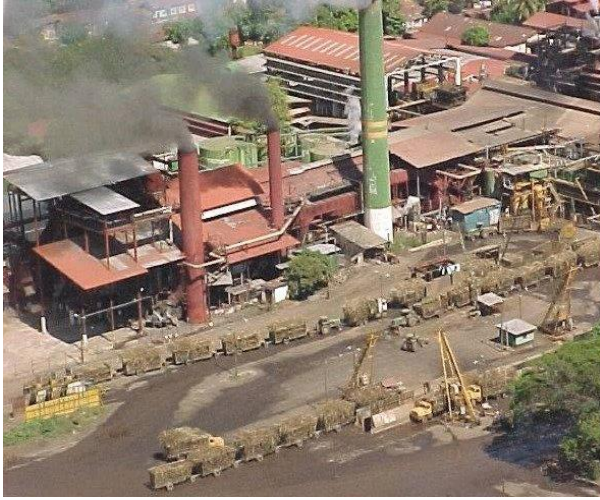
首都マナグアから三十キロほど離れたところに、チチガルパという町がある。その町には、ニカラグア最大級の砂糖工場、インヘニオ・サンアントニオがある。

この工場には約六千人が働き、その家族を含めると、三万五千人もの人々が周辺に生活している。

工場のなかでは巨大な機械が発する轟音とともに、サトウキビから砂糖を作りあげるときにできるキビのくずが空中に舞いあがり、視界はかすみ、騒音で耳はつまり、口中はいつもざらざらの状態になる。

そうした厳しい労働環境のなかで、労働者たちは十二時間交代の過酷な労働をし、彼らの健康にかなりの問題がおきていた。

晴夫たちは労働者の健康を守るために、組合と相談して、自然医学講座を開くことにした。それは「労働者が労働者自身の手で東洋医学を利用して、仲間の健康を守り、生産性の向上をめざす」ということを目標にかかげた、合計三



インヘニオ・サンアントニオ製糖工場

十回、六十時間に及ぶ講座であった。

いざ始めると、その努力と実績が評価され、一九八八年九月から労働者鍼灸師育成のための実践的な講座を、八巻晴夫、美知子、水村靖夫の三名で開くことになった。そこに工場の労働組合から、五人の労働者が鍼灸師候補生として推薦されてきた。

テキストは、よく見られる二十ほどの症状の治療、主要な経穴（ツボ）や治療のときの注意事項などをスペイン語でまとめあげ、臨床の研修は、レオンまで研修生を連れてきて、実際に患者にはりを行うという実践的な形で行うことになった。

選ばれた五人のニカラグア人の労働者研修生たちは、推薦をうけてきただけあって、たしかな手応えを感じさせた。

あるとき、こうした研修生たちの様子を見ていたひとりの老人が、「自分にはりを打ってほしい」と希望してきた。

老人はひざの関節炎を患っていたが、晴夫と美知子から指導を受けていた研修生は、はりを老人の膝のツボに打ち、見事に痛みを消し去った。

これには老人だけでなく、治療をしたニカラグア人研修生もその治療効果に驚いた。

こうした体験が重なり、研修生たちは自分たちの学んでいるはり治療にますます自信を持ち、研修にもますます拍車がかかっていった。

研修生たちは、労働が本業である。仕事で疲れた体にむち打つての研修である。

だが彼らは、週に三回行われる講座のほかに、講座のない日は十二時間の労働が終わると、レオン



養成された労働者鍼灸師

での臨床訓練を受けようと、寝る時間を惜しんで自ら通ってきたのである。その努力のかいがあつて、一九八八年十二月、受講生五人に、第二地区の厚生省の教育課長から研修の修了証書が手渡された。これがニカラグア人最初の鍼灸師の誕生であつた。その翌年の一月には、サンアントニオ砂糖工場のなかに鍼灸クリニックが開設され、これがニカラグア人鍼灸師による鍼灸治療の始まりとなつた。

手塩にかけて育て上げたニカラグア人鍼灸師による鍼灸クリニックは、非常に好評で、予想した以上の数の人々が毎日治療を求めてやつてきた。

五人の労働者鍼灸師たちは、本業の労働をしながら交代で治療の任にあたっていたが、その活躍の様子が大手新聞バリカード紙の一面トップに、「痛いところに鍼を打つ労働者鍼灸師」という題名で紹介された。

この新聞記事がでると、インヘニオ・サンアントニオでの成功を知ったニカラグア全土の労働組合の組織から、「自分のところにも同じような鍼灸師をぜひ育ててほしい」という依頼が相次ぎ寄せられた。

晴夫たちはその依頼に応える形で、毎年各地で東洋医学講座を開き、ニカラグア人鍼灸師を養成し、次々と各地にニカラグア人鍼灸師による鍼灸クリニックを開いていった。



エル ビエツホ鍼灸講座終了式



アセラドーレス鍼灸クリニック開所式

その一つであるエル・ビエツホ地区に開設した鍼灸クリニックは、最初は床にマットを敷いただけの設備であったが、その評判のよさに保健所や他の組織からベッドや机、イスなどの寄贈があり、徐々に体裁を整えていった。

晴夫たちは教育と治療に必要な鍼灸機材を提供するが、その他クリニック運営に必要なものは、各組織が独自に調達していくという建前をとった。

このエル・ビエツホ鍼灸クリニックには、連日六十人から百人以上の患者が押し寄せ、盛況となっていた。

そのほか、ニカラグア最大の港町コリエント、漁村のアセラドーレス、エルサルバドルとの国境に近いコシギーナ、山間部のアチュアパ、ホンジュラスとの国境地帯のソモテイージョ、サントトマス、山間部のカモアパ、ファイガルパ、カリブ海側のブルーフィールズとプエルトカベサなど、このような僻地にも相次いでカウンターパートナーの組織と共同で鍼灸クリニックを開いていった。なかでもコシギーナというクリニックは、バスで二百キロの距離を移動しなければならないところにあった。

バスと言っても荷台付き、幌付きのトラックで、手すりにつかまり、砂ぼこりの舞い上がる道を三時間以上も走るのである。そのため目的地に着くころには、体中がほこりで真っ白になるが、ここに晴夫は週に一度通い、一泊して帰ってくるのであった。

患者は、牛や馬に引かせた荷車か、トラクター、または歩いてやってくる。

全く辺ぴな場所にあるので、患者も大変な思いをしてやってくる。いろいろ苦労してようやく夜中にたどり着く人や、また何日もかけてやってくる人もいた。

そうした彼らも治療を求めてやってくるわけだから、体調はもともと悪いはずである。

だが彼らの住む近くに医者はいないし、もし、西洋医学のクリニックがあったとしても、薬がないし、検査もできないのである。そして何よりも彼らには払える金がなかった。

そこで晴夫が来る日を心待ちにし、その時にはどんなに大変な思いをしても、クリニックに駆けつけてくるのであった。晴夫のはりとモグサの治療だけが、彼らの唯一の希望であり、頼りであった。クリニックといっても、ここも土の床にマットを敷いただけの粗末な作りである。

それでも普段は静かなクリニック周辺は、この日だけはにぎやかなお祭り騒ぎのようになった。



エル ビエツホ鍼灸クリニック

晴夫はクリニック内に泊まるが、夜は大きなネズミがバタバタとうるさい。外で小便をすると、アンモニアの臭いを嗅ぎつけて、大きな蚊がブンブンと寄ってくる。クリニックのカウンターパートナーは牧畜を運営している会社だが、朝昼夕の食事は米飯とトルテイージャ（トウモロコシの実を茹で、水で練ったものを平たくして焼いたもの）、フリホーレス（豆）、めちやくちやに砂糖が入ったジュースだけで、メニューが変わることはなかった。

ある日、看護師で鍼灸講座の卒業生であるソニアの肩に、なんとAK銃がかかっていた。何をするのかと思いきや、その銃でイグアナを捕りに出かけた。晴夫がいつも同じメニューの食事なので、氣を利かしてイグアナのスープをご馳走してくれたのである。

首都から百六十キロほど離れたテオドロキン病院内に開設したクリニックでは、院長は東洋医学に好意的であったが、看護師や六人の医師たちが疑いの目で晴夫たちを見ていた。

あるときこの病院に、七歳の感染症にかかった男の子が家族に連れられてやってきた。

この男の子は、今までに西洋医学の治療を何度も受けてきたが、とうとう車イスの生活になってしまい、症状はさらに悪化を続けているという深刻な状態になっていた。

家族は最後の望みを東洋医学の治療に託してクリニックに来たのだが、男の子はすでに衰弱し、はりの刺激を加えるのも難しい状態になっていた。



テオドロキン病院内での鍼灸治療

美知子はニカラグアに来てから、日本の漢方薬に代わるものとして、ニカラグアに自生する薬草を研究していた。そこで、この男の子に薬草による治療はどうかと提案し、試してみることにした。

実際に使いだすと、みるみる症状は好転していった。その治療による変化を目のあたりにした医者や看護師たちは、感嘆の声をあげた。

このできごとがきっかけとなり、病院の医者や看護師たちは、自らも東洋医学による治療を希望し、また次々と患者を紹介してきたのである。

東洋医学の信頼を得たこの病院では、八巻夫妻が手塩にかけて育ててきたアルベルトが、一人で治療を引き継ぐことになった。

アチユアパ村のクリニックは山奥にあり、そこにも週に一度出張した。この村は電話帳にも記載が無く、郵便も思うように届かないほどの僻地である。

車で辿り着くまでの道路は、いたるところが穴だらけであり、また人の頭ほどの石がごろごろと転

がっていた。その道を通り合ひトラックや古いジープで、石や穴をよけながら数時間かけて行くのであった。

村は山の奥にあるため、車のない人々は、馬あるいは徒歩で移動しなければならない。

馬に乗った集団が、土がむき出しの道を闊歩するから、風が吹くと砂ぼこりで前がかすむ。すると馬に乗った人々が風で舞い上がった砂のカーテンの中から浮かび上がり、まるで別世界に来たような風景になる。

しかし、このクリニックで大勢の治療を行い、くたくたになって車で帰るときには、いつも大きな楽しみが待っていた。

それは、パノラマ画面のように広がる雄大で美しい夕焼けが見られることであつた。

どこまでもまっすぐな道路の前方には、広大な山並みがそびえ、その山並みから空全体が真っ赤な色に彩られる。

まるで大自然の壮大で美しい色合いの絵画の中に、車ごと吸い込まれていくような感動がある。

そのときだけは、自分が様々な悩みを抱えて生きているひとりの人間であることを忘れさせてくれた。

あるときのアチュアパ村での診療中のことである。

「先生来てくれ！」と男が飛び込んできた。

一生懸命に状況を話しているが、言葉がよくききとれない。

「とにかく行ってみよう。行ってみればわかるだろう」

晴夫ははり治療の道具を急いでカバンに詰め込むと、男のあとに従った。男は晴夫を連れて山の奥の方に入っていった。

男が足を止めた。

「患者はどこか？」

男が指さした先には、一匹の豚が横になっていた。

「患者は人間ではなかったのか」

豚や馬が一週間も寝たきりになると死んでしまうというが、男はどうやらこの豚を治してほしいというところのようだった。

「見たところ傷はないし、伝染病でもなさそうだ。どうやら腰に力が入らないようだ」

人間なら腰にはりを打つところだが、豚はどこから腰なのかわからない。だいたい日本でも、家畜はもちろんのこと、犬や猫にさえはりを刺したことなど一度もなかった。

しかし、晴夫はこの男の必死の願いを拒むわけにもいかず、「ままよ」とばかりに、灸を豚の背中を中心に数点施した。

灸をすえるとやおら豚は起きあがり、のそのそと歩き出した。

いつのまにか周りに集まり、じつと推移を見守っていた村人たちは、口々に驚きの声をあげ、拍手した。中には喜びのあまり、踊りだす者もいた。

晴夫は村人たちから口々にお礼を言われながら、複雑な気持ちで帰途についた。

それから一カ月ほどして、再びアチュアパ村を訪問しときのことである。またあのとときの男が晴夫の前にあらわれた。

「今度は何があつたのか、あの豚はやはり駄目だったのか……」

不安な気持ちを抱きながら、また山奥の村に往診カバンを持ってついていった。

村では大勢の人々が集まっていた。

晴夫は皆が集まっているまんなかに押し出され、座らされた。

何ごとかと不安に思っていると、晴夫の前に豚の丸焼きが出された。

一人の村人が満面の笑顔で、これはあのとときに治療をしてくれた豚だという。

晴夫は驚きながら、丸焼きの豚肉をほおばった。

にぎやかな踊りや歌が、延々と続いた。

各地域からの鍼灸クリニック開設の要望は、ますます増えていった。

中米ホンジュラスとの国境地帯にあるサントトマスとソモテイジョという保健所からも、「ぜひ来てほしい」との要請があつた。

「交通手段さえ確保できれば行きます」とひとまず答えると、「じゃあ救急車で迎えに行くから」ということになり、本当に週一回、早朝に救急車が晴夫たちを迎えに来た。そして二カ所の保健所を午前と午後にかけて、あわただしく治療にあたり、夜になると再び救急車で家まで送られたのである。

保健所と言つても名ばかりで、サントトマスの保健所には治療用のベッドがない。清潔とはいえないが、床に簡易マットをおいて大勢の患者の治療をこなした。

こうした床治療であつたが、それでも毎回多くの患者が、晴夫の来ることを、首を長くして待っていた。そうした往診が、なんと七年間も続いたのである。

美知子もたびたび遠方へ、出張に出かけることがあった。

美知子が出張するときには、ロングスカートか丈の長いワンピースを着ていくのだが、これは決しておしゃれのためではなかった。

ニカラグアには日本のように気の利いた公衆トイレなどない。そのため長距離を車で移動するときには、草原のどこでもそのまましゃがんで用が済ませるように、丈の長いスカートを着用するようにしているのである。

ニカラグアで活動していくには、日本人の習慣や社会常識にとらわれていると、不便さを感じるようになってしまう。

郷に入っては郷に従う必要がある、日本人としての常識の壁を取り払って、ニカラグア社会の中に溶け込んでいかなければならなかった。

しかし美知子は、むしろこうした不便を楽しみに変えて、ニカラグアで生活する工夫を身につけていった。それがやがて、日本より型にはまらないニカラグア人社会のほうのびのびとしていて、過ごしやすく、自分の性格にあっているとと思うようになっていった。

ニカラグアでは内戦が十年以上も続き、一九九〇年までニカラグア人同士が政権の座をめぐって争っていた。

晴夫たちがニカラグアに赴任したのは一九八七年であり、そのときはまだ内戦の最中であつた。

その赴任した当時、クリニックを開設した保健所は徴兵の検査場を兼ねており、若者の大半が検査に合格すると、家族にもその行き先を告げることができないまま、直接最前線に送られていった。

かわいい我が子を内戦にとられた母親たちのすすり泣き、号泣が、保健所の外にまであふれ、晴夫

と美知子の耳にいつまでも残った。

やがてその母親たちの苦しみや悲しみが原動力となって、一九九〇年の政権移譲へとつながっていく。

この国のこうした厳しい社会情勢や貧しさ、そして悲しみが、逆にニカラグア人の「生きる強さ」を育てていったのであろう。

失業率が五〇%以上あり、乳児死亡率も高い。そんな厳しい中でも、明るく生き、陽気に踊り、恋して、あるいは捨てられる——そのような人間味あふれる世界がニカラグアにはあった。晴夫も美知子もそうした純朴なニカラグア人が大好きだった。

こうした晴夫や美知子の僻地での活動は、ニカラグアの新聞、テレビなどのマスコミでも盛んに取りあげられ、二人の日本人の名前はニカラグア全土に知れわたり、ニカラグアで有名な日本人となっていた。

また日本のNHK放送局も取材に訪れ、二人の奮闘は日本にも知られるところとなった。

だが、いつまでも巡廻診療ばかりをしているわけにはいかなかった。自分たちの肉体にも限界があり、また自分たちの治療に頼ってばかりでは、東洋医学を本当にニカラグアに根づかせていくことができない。一時的に助けて、喜ばれても、次から次とくる患者はきりがなかった。もっと根本的に救う道への転換を模索しなければならなかった。

首都マナグアを拠点に

日本人は四季の変化をあたりまえのように受け入れているが、熱帯地方に属するニカラグアの季節と言えば、雨期と乾期のふたつだけである。

ニカラグアでは毎年の五月ごろになると雨が降りはじめ、それが十月か十一月頃まで続き、あとは乾期に変わる。

雨期といつても、日本の梅雨のようにシトシトと降る雨とはわけがちがう。

ひとたび雨が降りはじめると、短い時間ではあるが、傘が役にたたないくらい激しい豪雨となり、そのときは、誰もがすぐに避難場所を見つけて、雨がおさまるのをじっと待つしかない。

道路はみるみる川のようになり、道路とみぞの見分けがつかなくなり、自動車で運転していてものなら、マンホールやみぞに車の車輪が落ちたり、ときには車ごと流されたりしてしまうこともある。

晴夫もエル ビエッホで車ごと流されかかったことがあった。

治療がそろそろ終わるころに、雨期特有の雨が降ってきた。

女性鍼灸師のアントニアの家は、クリニックから車で十五分ほど畑の中に入ったところにある。

彼女のどうしてもという頼みで、車で家まで送っていくことになったのだが、そのとき彼女の家の手前にある小さな川を渡らなければならなかった。

普段なら川幅四メートルほどで、車のタイヤ半分ぐらいの水かさの小川である。

さて小川の手前まできて、晴夫は一瞬ひるんだ。水かさが増して、濁流となっているではないか。アントニアは大きな声で叫んだ。

「ハルオ！渡れる。行こうよ。行こう！」



雨期の豪雨

その声の勢いに圧倒されるまま、思わず一六〇〇CCのカロラーのアクセルを踏み込んだ。車はそのまま川の中央まで突っ込んだが、突然ブスツと止まってしまった。

「うあー」

熱いエンジンに濁流が流れ込み、ボンネットが白煙があがるのが見えた。

サイドドアのガラスに、濁流が渦を巻いて当たっていく。

濁流の水かさが、目の前でどンドン上がっていくのがフロントガラスに見える。

「これは大変だ！」

脱出しようと反対側のサイドドアを開けた。その途端、濁流が車の中にドドドツとばかりに流れ込んできた。

二人はものすごい水の圧力を全身に受けながら、言うように車から脱出した。

騒ぎをききつけたアントニアの家族が駆けつけてきて、大勢で車を川からひきあげた。

みんな胸まで濁流につかって、命がけの作業であった。

絶対に無理だと思いつつ、エンジンをかけたところ、エンジンは驚くことに稼働した。さすが日本のトヨタである。豪雨と濁流につかつたみんなは、ずぶぬれの体で手をあげて「やった！やった！」の大喝采となったのである。

晴夫も美知子もニカラグアに来たばかりのときは、こんな自然現象に驚くばかりであったが、もう何年も住んでいると、自分たちが日本人であることを忘れるぐらい、それらを生活の一部としてあたりまえのように受け入れていた。

僻地にクリニックを開設し、次から次と波のように押し寄せてくるニカラグア人の治療に追われる一方で、その地で活躍できるニカラグア人鍼灸師の養成にも力を注いでいったが、これにも大きな問題が出てきた。

今まで短時間で大勢の鍼灸師を養成しなければならなかったため、教える内容も基礎的な知識と技術に絞り込み、高度な臨床能力を身につかせるまでには至らなかった。

そのためニカラグア人鍼灸師たちは簡単な治療しかできず、ちよつとでも難しい症状の患者が来ると、彼らの技術ではすぐにお手あげになつてしまつていた。

その結果、晴夫と美知子が訪問するときだけ患者が多く集まるようになり、逆にニカラグア人による治療のときは患者が減るといふ現象が起きてしまつたのである。

研修を受ける生徒たちは、ニカラグアの労働組織などから、推薦または派遣されてきた労働者が中心であったが、彼らの中に高学歴の者は少なく、なかには字を書くのもたどたどしい者も含まれていた。

講座が修了したあとも、フォローアップの勉強会を重ねてはきたが、忙しい晴夫たちにも時間的な制約があり、ニカラグア人鍼灸師と患者との間に信頼関係を築けるレベルにまで引きあげることができなかつたのである。

こうしたことから、もし晴夫たち日本人がクリニックから手を引いてしまうと、クリニックが閉鎖に追い込まれてしまうということまで十分に予想された。

もはや今のレベルのニカラグア人鍼灸師だけでは自立はむずかしいと考えられ、将来ニカラグア人だけでこの国に東洋医学を定着させようと考えていた目標に、暗い影をおとすことになってしまった。晴夫たち日本人はひどく悩んだ。

「この問題を解決するには、より高度な教育を行い、質の高いはり灸師を養成していくしかない。医療技術の高いレベルの人材を育てなければ、東洋医学をニカラグアの地に真に根づかせることはできない」

晴夫はそう考え、恩師の代田文彦が何度も言っていた言葉を思い浮かべた。

「東洋医学を護り、更に発展させていくには、質の高いはり灸師養成が急務である」と。

この言葉を、あらためてニカラグアの地で認識させられたのだ。

「恩師のこの言葉を実行するには、まずしっかりとした教育を行う施設を設立しなければならぬ…。よし、東洋医学教育の拠点となる東洋医学研修センターを建設しよう。その前提として、まず首都マナグアに、しっかりとした東洋医学クリニックを開設するのだ」

これが、今自分たちが行なうべき最善の方策だと考えた。

しかし、目標が決まっても、予算もなければ、マナグアのどこに開設したらよいかも皆目わからな

い。

晴夫は美知子と相談しながら、様々な考えをめぐらし、打開策を練った。

そんな折、偶然にもヨーロッパのルクセンブルク公国から「東洋医学のプロジェクトに使って下さい」と、三千ドルの援助申し入れがふってわいた。晴夫たちの僻地での医療活動に感銘をうけた見知らぬ国から、寄付金が寄せられたのである。

驚いたのは、それだけではなかった。

「私の家をクリニックに使って下さい」と、日本へ帰国することになった在日ニカラグア大使館元領事夫人から、嬉しい申し出があったのである。

場所は、首都マナグアの中米大学の裏側の閑静な住宅街にある家で、しかも低額な家賃での提供であった。

元領事夫妻とは、晴夫たちがニカラグアに赴任する前から知っていた親しい間柄であり、晴夫たちの苦労をよく知ってくれている人であった。

突如としてわいた資金と、クリニックの場所提供の話しに、晴夫は驚きながらも「これは偶然ではない」と思った。「自分達にはこの国に使命があるから守られているのだ」と強く感じた。

「ありがたいことだ。本来にありがたい。必ず目標を実現しなければならない」

感謝の気持ちとともに、ますますやる気もわいてきた。

こうして一九九二年十二月一日、首都マナグアの恵まれた場所に、念願の東洋医学クリニックを開設する運びとなった。



マナグア鍼灸クリニック

提供された家の中はさほど広くなかったが、広間をカーテンで仕切り、八台のベッドをやつと入れ込んで、クリニックらしい体裁をととのえた。

しかし、ベッドとベッドの間を狭くしなければならず、そのため横伝いで歩かなければならなかった。

このクリニックには、ニカラグア人鍼灸師や受付係など、総勢六人のスタッフが常駐し、全員泊まり込みでのスタートとなった。

「このクリニックが軌道に乗るかどうかで、将来の命運が決まってしまう」

誰もがそう思い、どんなことがあっても成功させなければならぬと考えた。

いざ診療を開始すると、今までの心配が杞憂であったかのように患者が集まってきた。

十二月は四百四十七名、一月は六百三名、二月は一千五十名、三月は一千五百四十八名と、患者数はぐんぐんと増えていき、すぐに狭いクリニックでは身動きがとれないほどの盛況になってしまった。

このことは、医療に恵まれない僻地のみならず、病院や西洋医学のクリニックが多くある都市部でさえ、東洋医学の治療を求めている人が多いということを実にあらわしていた。

クリニックが開く朝八時前には、すでに二十人から三十人の人ばかりが門前にできていた。

晴夫たちは起床して着がえると、コーヒーをゆつくり飲む余裕もなく、パンを口にくわえたまま患者を迎える準備をはじめた。そして、昼食は手のあいた者から交代でとり、日が暮れるまで治療に明け暮れた。

クリニックを閉めるころにはスタッフ全員がヘトヘトであったが、心の中は誰もが充実感で満ちあふれていた。

その多くの患者の中には、いつしかJICAの専門家や青年海外協力隊員、日本大使館の日本人職員の姿もみられるようになった。

異国の地で体調を崩したときなど、同じ日本人による治療は安心でき、心強く感じたに違いなかった。

日本側支援組織との確執

マナグアに開設したクリニックが順調に軌道に乗っていく一方で、また新たな難問が生じた。

晴夫たちのこれまでの活動資金は、そのほとんどが日本の支援組織からの援助によって支えられていたものである。ニカラグアに滞在する日本人スタッフの生活費も、援助金の一部によってまかなわれており、NGOとしての日本の支援組織を通じて、日本の郵政省国際ボランティア貯金からの援助も受けていた。

ところがその日本側の支援組織とニカラグア現地の晴夫たち日本人との間で、ニカラグアでの活動に対する考え方のすれ違いが表面化してきたのである。このことは支援の可否の問題もからみ、予想

以上に大きな問題となつて膨らんでいった。それは純粋に東洋医学の教育普及を主張する日本側支援組織と、ニカラグアの人々を助けることを第一に考えて、柔軟に対応していききたいとする晴夫たちとの方向性の違いで、互いに譲ることができない状態になつてしまつた。

晴夫たちにとつて、目の前で苦しんでいるニカラグア人を救うことができるなら、どんな治療法でも受け入れるべきであり、時には東洋医学にこだわるべきでないと考えた。しかし、日本側支援組織としては、あくまで純粋に東洋医学の普及が目的であり、それ以外の医療はやるべきではないという考え方であつた。

互いにかんりの労力をさいて議論したが、日本の支援組織の考えに従うか、それともニカラグア現地の人を助けるために自分たちの考えを押し通し、支援組織と袂を分かつかの選択を迫られた。

結局、晴夫たちはやむなくこの日本の支援組織と別れることを決断した。そしてあらためて自分たちの行動を理解してくれる友人や知人たちを募り、新たに「日本・中米東洋医学普及委員会」を再結成することにした。

この再結成された組織は、前よりも小さなNGO組織で、鈴木斉氏を代表者として二百名ほどの会員が名を連ねた。

だが旧支援組織との別れは、郵政省国際ボランティア貯金からの支援金を失うことを意味し、予想していたこととはいえ、いつきに資金難に陥ることになつてしまつた。

活動資金としての収入は、患者から一回の治療費として支払われる二十コルトバ（約八十円）と、日本の支援組織からのカンパ金、そして日本でニカラグアの民芸品を売って得られるわずかの収益だけしかなかつた。

資金難に苦しんでいる最中、駐ニカラグア日本大使館の荒船大使夫妻が、患者としてクリニックを訪問した。

大使夫妻は晴夫たちの治療を受けながら、クリニックの切迫した状況を聞き、「自分達に何か出来ることがあるば、大使という公の立場を離れても、個人的に協力してあげたい」と励ました。

あるときその大使夫人が治療を受けに来た。治療が終わり、日本からすればあまりに安い治療費を支払ってもらうのも恥ずかしく思い、晴夫たちはクリニックとして夫人の支払いを遠慮した。

しかし、どうしても支払わせてほしいという夫人との押し問答の末、結局二十コルトバを受け取ることになった。

だが二回目の治療から、夫人はその二十コルトバとは別に、そつと百ドルを置いていくのであった。

また別の日、治療が終わったあと、カーテンで仕切られた狭い台所で夫人にお茶を出した。器は湯飲み茶碗がなく、コーヒーカーップにいった日本茶であった。

夫人は粗末な台所を見ながら、やさしい笑顔で言った。

「こういう所が一番落ち着いて、私は大好きなの」と。

その翌日には、湯飲み茶碗一式が届けられた。

夫人は日本に帰国してからも、さりげなく心温まる配慮をクリニックに贈った。

クリニックの資金繰りはますます厳しくなり、電気代も払えなくなり、翌日支払わなければ電気が停められるという事態にまで陥った。電気が停められれば診療もできなくなる。

するとちようどその日、日本から夫人の手紙が届いた。それは今まで治療を受けた感謝の言葉に添

えて「必要に応じてお使い下さい」と、そつとお金と同封されていたのである。
晴夫はすぐに電気代を支払い、危うく電気を止められずにすんだということもあつた。

マナグアに移転してから、日本の支援組織との軋轢に苦悶し、経済的に困難な中で必死にその日その日乗り越えてきた。もう駄目かと思うときが何度もあつた。
しかし、そのような苦境のときになると、不思議と助けてくれる人が必ず現れたのである。そしてそれらの苦境を乗り越えるたびに、前よりも先が大きく開けていくのであつた。

命の危機に遭遇

治療は形式ばかりにとらわれると、
患者が見えなくなる。
人間は機械ではない。
どんな人でも、どんな病気でも、
人それぞれの違いを認識して、
その人にあつた治療をしなければならぬ。

晴夫と美知子の二人は、東洋医学を根底にしながらも、形式にとらわれることなく、一人一人にあつた治療をこころがけていった。また、ニカラグアの人々のために、お金がかからない治療法はない

かと、世界にその情報を求め、そして良いと思う治療法が見つかると、まずは自分の体で試してみた。あるとき「飲尿療法」が慢性病や難病に効果があるという情報が入った。自分の尿を飲むと薬のかわりになり、難病も治るといっているのである。これが本当なら、お金もかからず、これほどすばらしいことはない。だが患者にすすめるなら、まずは自分で試してみなければと、二人はその可能性を自ら探ってみることもした。

しかし、さまざまな療法がある中で、ニカラグアの多くの人々を助けていこうとするには、費用があまりかからず、確かな効果がある東洋医学のはり灸治療が一番であった。

またニカラグアの気候は高温多湿で、感染症や皮膚病などの疾患がおこりやすく、そうした風土の違いから、ほかの国で良いとされている治療法がこの国の人々に必ずしも合うとは限らなかった。

ニカラグアで日本でも使っているような漢方薬を使おうとしても、ここではそうした生薬は手に入らないし、それを輸入するほどの資金もない。さらにニカラグア人の体にあうかどうかともわからない。だがそうした中で、ニカラグアにも昔から薬として使われている植物があった。

美知子は「ニカラグア人なら、そこに自生しているものが彼らの体に最もあうのではないか」とそれに目を付け、ニカラグアにある植物をいろいろと調べていった。そして自らも試し、ついに確信した。「これだ」と。

美知子は診療が休みの日を利用して、ときどきマナグアから百二十キロ離れたところへ車で向かった。そこはエル ビエツホ村といい、さとうきび畑が広がる農村である。

村のはずれに美知子の目的の家はある。薬草を作っているペドロ・バヤダーレスという人の家である。

彼は妻と娘ら五人でつましく暮らしながら、畑で三十種類ほどの薬草を栽培していた。

ペドロは幼い頃から病気になる、両親や祖母が薬草でその病気を治し、病院に行く必要はほとんどなかったという。そして少年の頃から祖母や両親のあとについていき、野や山で薬草をとる手伝いをして、薬草についての知識を自然と身につけていった。そのため彼は、ニカラグアに自生する薬草について何でも知っていたのである。

ペドロは自分を訪ねてきた美知子の人柄を見て信頼し、作っている薬草の種類と効能を惜しげもなく教えた。

ペドロは、収穫した薬草を天井に吊って乾燥させる名人である。湿気の強いニカラグアでは、薬草を枯らす事なく良い状態につくることは難しく、それが長年の経験で彼にはできたのである。

これらの薬草をクリニックで患者に使うと、はりの治療に加えてとても良い効果があり、もはや美知子にとって欠かせないものとなっていた。

ペドロの家には、電気も水道もガスもない。電話ももちろんないので、いつも突然のように美知子はやってきた。

それでもペドロ一家は美知子を笑顔で歓迎し、トルテイージャをつくって歓待した。

美知子は幸せそうなペドロの家族をみると、テレビや電気製品、きれいな洋服とか高価な宝石なんかあるよりも、このような素朴な心のあたたかさ、そして静かな自然のなかに身を置いて生きている家族の方が、どんなに幸せなんだろうかといつも思うのであった。

美知子はニカラグアの自然の中で、彼らのように素朴な人々と交流していると、もう日本のせせこましい社会に戻るなどできないとさえ思うようになっていた。

美しい自然と純朴でやさしい人たちがいる限り、この国こそ自分が一生を終えても悔いのないところだとも思うようになっていた。

しかし、ニカラグアでは、日本ではありえないようなことに巻き込まれることもある。

チチガルパにある中米で最大規模のインヘニオ・サンアントニオ製糖工場、その鍼灸クリニックで晴夫が「東洋自然医学展」の開催を予定していたときのことである。

ここで開く医学展の目的は、チチガルパの市民に東洋医学を正しく理解してもらうためであり、すでにこうした「医学展」はレオンでも好評を博していた。

このときニカラグア北西部には八カ所の鍼灸クリニックを開設し、晴夫はそれらを巡廻しながら指導と治療にあたっていた。

チチガルパでの「医学展」開催の一週間前、一九九四年八月一日のことであった。

「医学展」の打ち合わせをレオンで済ませた晴夫は、首都マナグアに向けて一人で車を軽快に走らせていた。

車は、日本の郵政省国際ボランティア貯金の支援金で購入していた四輪駆動のランドクルーザーである。

快晴で暑い盛りの午後のことであった。

警察官による検問に出あった。

警察官は車を停車するように指示し、車の登録証、免許証の提示を求めた。

それらを確認すると、「ちよつとした問題が起きたので、少し先まで車で連れていってこないか」

と頼んできた。

ニカラグアで見知らぬ人を同乗させるのは危険であり、晴夫はいつもなら、はつきりと断っている。しかし、警察官の依頼でもあり、また昼間ということもあって、こころよく協力することにした。

すると、その警察官一名のほかに、突然うしろの方にいた私服の男二人が、なだれ込むように晴夫の車に乗り込んできた。

晴夫は驚いたが、警察の関係者かと思いい、そのまま車を十五分ほど走らせた。

警察官が「ここで降ろしてくれ」と言い、晴夫は車を止めた。

そのとたん、映画のワンシーンのような世界に晴夫は引きずり込まれていった。

横にすわっていた警察官と、うしろの座席にいた男が拳銃をとりだし、晴夫のこめかみと、首のうしろに銃口をあてたのだ。

もう一人の男は、晴夫のえり首をつかみ、車のうしろに引きずり込むと、細い縄で足首を、そして両手を背中ではばり、そのままねじ伏せた。

うつ伏せに倒されたまま、拳銃を首と背中にあてがわれ、銃口の冷たくかたい不気味な感触が晴夫の体に伝わってきた。

男らは「騒ぐな！顔をみるな！」と怒鳴るようにして言いながら、晴夫が身につけていた時計や財布など、金になりそうなものを乱暴に強奪した。

そしてふたたび車を走らせ、舗装されていない道を奥の方へと進んでいった。

およそ二十分後、晴夫は車から外に引きずりだされ、茂みの深いほうへと連れていかれた。足首をしばられているため、歩けない。

男たちは晴夫の肘をかかえて、引きずるように連れて行った。
そして草むらに荒々しく投げだした。

警察官の格好をした男は、二メートルほどの至近距離から、晴夫の額に銃口を向けて立ちはだかつた。

「お前は、サンディニスタ（ニカラグア民族解放戦線）の一員だろ」

「いや違う。日本から来た東洋医学のボランティアだ。毎日たくさんのニカラグア人を治療している。頼むから命だけは助けてくれ」

犯人の顔をじつと見つめ、必死に懇願した。

「これがかわいい息子たちの顔も見ることができなくなる。撃つなら一発でやってほしい……。ああ、もうだめだ！」

晴夫はこれまでかと観念した。

警察官の格好をした男は、しばらく晴夫を見つめていたが、銃の引き金をなぜか引かず、そのままその場を離れていった。

男らは、大切な車もろとも、どこかに消え去ってしまった。

間一髪のところであったが、晴夫にとってそれはとても長い時間に感じられた。

手の縄はすぐにほどけたが、足の縄がきつく縛られていてなかなかほどけず、うさぎ跳びでその場を離れてからようやく縄をほどき、歩いて遠くに見えた民家に助けを求めた。

「襲われた！水を一杯のませてほしい」

喉がからからで、水を飲ませてほしいとたのんだが、今までの緊張からか、その水をいつきに飲め

ず、少しずつ口に浸して、ようやく飲み込んだ。

やつと、どうやら命があったようだ、そのとき実感した。

縄で強く縛られていた手首は内出血をおこし、紫色に腫れあがっていた。

車を盗られたため、ヒッチハイクで車を乗り継ぎ、やつとのことでもマナグアに辿り着いた。

その翌日、日本大使館に事件の報告に出向くと、たまたま日本の社会人野球チームの監督が来ていた。

ちようどその次の日から、ニカラグアで「世界社会人野球大会」が催されることになっていた。大勢の日本選手団もニカラグアを訪問していた。

監督に事件の顛末を伝えると、彼はホテルの宿舎に戻ってすぐに事件のことを選手全員に話した。すると、たちまちニカラグアはとても恐ろしい国だというイメージが選手たちを包んでしまったらしい。

それから数日後、晴夫は日本大使公邸で行われた選手団激励会に招かれて出席した。

「同じホテルに泊まっていた他の外国人選手たちは、夜に外へ出かけていったが、日本人選手だけは、こわがってホテルから一歩もでなかったよ」と、オリンピックでも活躍したエースの杉浦正則投手から笑い話のように聞かされた。

ちなみにこの大会での日本チームは、動きに硬さが見られ、三位入賞を逃してしまったそうである。

事件の悪夢から覚めやらぬ一週間後、インヘニオ・サンアントニオで行われた「東洋自然医学展」に出席するため、事件のあったのと同じ道を晴夫は通っていた。

すると、あの事件があった同じ場所に、あの盗賊の警官が五、六人の警官といっしょにいたではないか。晴夫は急いで車で引き返し、すぐに警察に通報し、それから「自然医学展」に参加した。

「医学展」にはチチガルパの市民五百人以上が集い、お祭りのようなにぎやかさであった。JICAの専門家や、青年海外協力隊員も多数応援に駆けつけ、大盛況で終えることができた。

その翌日、警察から呼び出しがあり、犯人が所属するナガローテの警察へ出向いた。

犯人はどこにいるのかと問われ、穴からのぞきながら、犯人を確定した。

そしてその盗賊の警察官は逮捕された。

しかし、強情にも口を割らず、数カ月の拘留の後、釈放されてしまったとのことであった。

それを伝え聞いたタクシー組合の幹部で、顔中が髭だらけで体重は百キロを軽く超える一人の患者が、晴夫の耳元でささやいてきた。

「ハルオ先生、俺に任せておきな」と。

数日後、彼がニヤニヤしながら晴夫のところに来てきた。

「ヤツをとつちめて、袋叩きにしてきたから、もう安心だよ」と、大きな腹をかかえて笑って言った。

晴夫は、ただあつけにとられるのみであった。

不思議なことに、晴夫が命にかかわるこの事件が起きた後から、東洋医学を弘めるプロジェクトはいつきに大きく動き出したのである。

それは、組織の法人化、ニカラグア厚生省との協定書の締結、東洋医学大学の建設の着手と、次々に大きな力に導かれるように展開し始めた。

「災い転じて福と為す」という言葉を、晴夫はしみじみとかみしめた。

「縛られ、銃口をあてられ、一度は死んだ身だ。もうこれ以上恐れるものは何もない。怖いものは何もない。よし！持てる力をすべてこの事業に捧げよう。自分がやれることは何でもやりきろう。自分の命を全てニカラグアでの使命に捧げよう」

ニカラグアに赴任して七年目。晴夫は大きな事件後、新たな決意が全身にみなぎってくるのを感じた。

それから数カ月して、警察から連絡があった。「車がみつかった。警察が保管しているから見にくれて」というものだった。

「お、車が出てきたぞ」と喜び勇んで警察に出向いたが、思わず口を開けて絶句した。

そこには、無残にも車の恰好をした箱にしか見えない物があるだけであった。

第二章 大学を開学

厚生大臣と協定を結ぶ

「先立つものは金」という格言があるが、晴夫たちの活動は、いつもその先立つものの不足に悩まされてきた。ニカラグアに赴任する前に用意していた蓄えも、すでに底をついてしまっていた。

どれだけ良い治療をして、喜ばれても、貧しいニカラグア人から十分な治療費をとることはできない。むしろ自分たちの生活費から治療を続けるための経費を捻出するしかなかった。

日本の郵政省国際ポランティア貯金からの援助金があったときは、まだ何とかできた。しかし、日本の支援組織と意見が食い違い、別れてしまうと、その援助金まで失うことになってしまった。

新たな支援組織をたちあげたが、生活はままならないほどの苦しい状態に陥り、今まで一緒に苦勞してきた水村靖夫も、生活困難のためにとうとう帰国を余儀なくされた。

「自分たちはどんなに空腹でも、苦しくても、ニカラグア人鍼灸師たちの生活は守らなければならぬ。ここで彼らを見放してしまうと、今まで一生懸命に育ててきた苦勞が水の泡になってしまう——

” お金に困った晴夫と美知子は、資金を得るためなら、悪いこと以外何でもしなければならぬと考えるほど追い詰められてしまった。その思いにはもはや恥も外聞もなかった。

晴夫は何とかかき集めた六千ドルを元手に、小さな雑貨屋を開くことにした。雑貨の売り上げで、クリニックの運営を支えることができればと考えたのである。

売る品物は、米、砂糖、油、豆、ジュース、鶏肉、ビール、コーヒー、飴、ガム、子供のミルク、

卵などの食品や、電球、電池、ちり紙、石けん、タバコ、ノート、鉛筆、ボールペンなど、日本のコンビニ店のようにすぐ売れそうな生活用品が中心である。

しかし、これらの商品を品不足のニカラグアで購入すると高いので、隣国ホンジュラスへ、ヤミの買い出しをするために足を運ばなければならなかった。

中米でもニカラグアは貧しい国のため、ホンジュラスへ入国するときには見下した目で見られ、またいじめのような屈辱も味わった。

それでも、ものを買いきろえないことには店を開けないので、どのような辱めを受けようとも、晴夫はじつと耐えた。

ようやく品物を買いきろえると、大きなバッグの中にすべてを押し込み、肩にかついだ。その重さは想像以上で、バッグの紐が肩の骨まで深く食い込み、気がつくと肩からにじみでた血が服を赤く染めていた。

ヤミで仕入れた品物を販売するだけでは、まだ十分な利益にはならない。そこで土日だけ、家の前で炭をおこし、頭にねじりはちまきをして、鶏の照り焼きを売ることにした。

金曜日の治療の仕事が終わると、自宅で夜中の一時を過ぎるまで鶏肉の下味をつくり、仕込みをした。

日中の暑い日差しに加えて、炭火の熱を全身に受けながら、滝のような汗を流して、「鶏の日本の照り焼きはいかが！」と、道行くニカラグア人に叫んだ。演歌のBGMのおまけつきである。さながら日本の大学祭で模擬店をやっていたころのことを思い出させた。

照り焼きの美味しそうなにおいは、白い煙となってまわりに広がり、足を止める人も多く評判は上

々であった。

しかし、晴夫の母がこんな息子の姿を知ったら、「一体あなたはニカラグアまで行って、なにをやっているの！」と嘆き悲しむ顔が心に浮かんだ。

サンダルや靴も販売し、それらも売れることは売れたのだが、ニカラグア国内のインフレ率が激しく、売った金額で新たに品物を仕入れようとしても、元値の値上がりについていけず、たちまち次の仕入れが困難となった。

結局、貴重なお金を投資してさんざん苦勞したにもかかわらず、期待したほどの収益を得ることができず、やむなく閉店しなければならなくなった。

外国人の素人が玄人のような商売をやっても、うまくいくはずはなかったのである。

厚生大臣と協定書を締結

そのように資金難にあえいでいたある日、一人の夫人がクリニックに治療を求めてやって来た。この女性は、ニカラグアの厚生大臣の報道官の仕事をしているという。

治療が終わると「次回は、ぜひ厚生大臣をお連れしたい」と笑顔で言って帰っていった。

それから数日して、本当に女性のニカラグアの厚生大臣がクリニックにやってきた。

報道官が厚生大臣に晴夫たちのクリニックのことを話すと、「ぜひその治療をうけてみたい」ということになったとのことであった。

厚生大臣の治療を終えると、コーヒーを一緒に飲みながら、今までの活動の経過や研修センター設

立の計画を話した。

すると驚いたことに厚生大臣の口から、「台湾を訪問したとき、東洋と西洋の両方の医学を取り入れた病院を視察して、我が国でも、ぜひとも東洋医学を導入すべきだと前から思っていました」と切り出され、続けて「ニカラグアの経済を立て直すためには、医療コストの低減をはからなければなりません。そのためには東洋医学の力が必要になります」とまで言及してきたのである。その言葉には、晴夫も美知子も目を丸くして驚いた。

すぐさま晴夫たちは、東洋医学でニカラグアの人々を助けたいという思いを熱烈に述べたところ、厚生大臣は感動しながら、「ぜひ『協定書』を結びせてほしい」という話にまで発展した。

厚生大臣と協定書を締結するということは、ニカラグアという国の医療政策のなかに、東洋医学が正式な医療として認められるということを意味するのである。まさに、そのために晴夫たちは何年も苦労して活動してきたようなものであった。

思わぬ話の展開に、晴夫も美知子もわが耳を疑い、夢ではないかと思いつつ、つつしんで厚生大臣の提案を受け入れた。

だが、ことはそう簡単に運ばなかった。東洋医学をニカラグアに受け入れたいという大臣の提案に対して、難色を示す人たちが多くいたのである。ニカラグア各地区で発言権を持つ責任者たちであった。

もし東洋医学が国で正式な医療と認められると、彼らが陰で既存の医療から得ていた利権に影響が出ると考えたのであろう。

各地区の責任者の猛烈な反対にあい、厚生大臣の提案はそのまま暗礁に乗り上げるかのように思わ

れた。

しかし、そうした反対の発言に対し、何と東洋医学クリニックを展開したカリブ海側と北西部の地区の責任者から、東洋医学を強く支持する声上がり、これが締結を推し進める逆の流れに変わっていった。

その発端となったのは、かつて辺境僻地やカリブ海側で行っていた地道な治療活動が、多くの人々に認められ、東洋医学に対して信頼の心が生まれていたからであった。

大勢の一般庶民の感謝の思いと厚生大臣の英断が組み合わさって、まもなく協定書の締結が実現することとなった。

ニカラグアでも史上初めてとなる東洋医学受け入れの調印式は、大臣の執務室で執り行われることになった。

執務室にはたくさんの報道関係者が詰めかけ、そこには日本政府の関係者も立会人という形で参加していた。

ニカラグア政府から一銭のお金も動かない協定書の調印にもかかわらず、部屋の中は多数の報道関係者でごった返した。

協定書には、このとき組織の代表として八巻美知子がサインすることになった。

公式会談などで使われる大きなテーブルに、厚生大臣と美知子が並んで座り、両者の前にスペイン語の協定書の書類が置かれた。

美知子の左隣には厚生大臣がいて、大臣はなんのためらいもなく書類にサインをしている。

ところが美知子は、いつまでたつてもペンをとらず、じつと協定書を見つめたままピクリとも動かない。

大勢の報道カメラマンは、美知子がサインする瞬間を逃すまいと、カメラをかまえたままシャッターチャンスを狙っていた。

しかし、美知子はまったく動かないまま、時間だけが過ぎていく。

誰もが、どうしたのかと固唾を飲んだ。晴夫も、初めて見る不可解な美知子の様子に戸惑った。

晴夫は理由がすぐにわかった。感きわまった美知子の手はふるえていて、サインができなくなっていたのである。

それを晴夫から伝え聞くと、今度は厚生大臣が感激して涙ぐみ「大丈夫だから、サインして下さい」と、やさしく美知子に語りかけた。

美知子は「漢字ではとても無理なので、ひらがなで書いてもいいですか」と了解を求め、そしてふるえる手で、ひらがなで自分の名前をやつとのこと書きあげ、歴史的調印を終えたのである。

今この瞬間から、ニカラグア政府が東洋医学を正式な医療と認めたことになり、トップニュースでニカラグア全国に報道された。そして、それは画期的な出来事として中国にまで流れたのである。

このひらがなでの調印式以降、美知子のサインはすべてひらがなとなってしまった。

後日談になるが、調印式から何年もたったある日のこと、一人の女性患者がクリニックに治療を受けにきた。

晴夫がその患者のわきに立ち、カルテを見て思わず「アッ」と声が出た。

ニコニコしながら治療のベッドに横たわっていたのは、あの時の厚生大臣であったのだ。晴夫はニカラグアでの東洋医学の恩人に、心から感謝の言葉を述べ、「少し歳をとったけど、あのときの調印式のこと、片時も忘れたことはありません」と話した。



第二回目の厚生大臣との調印式



新聞に掲載された調印式の模様

厚生大臣との協定書調印から数日して、研修施設建設のための資金調達の道が、思いがけない形で

飛び込んできた。

調印式に立ち合っていた日本政府の関係者から、「日本政府が予算の一部を出すので、東洋医学のプロジェクトを展開しませんか」と話しを持ちかけてきたのである。

協定書の調印というだけでも驚くべきことであつたが、これも晴夫たちが耳を疑うような話しであつた。

日本政府による援助というのと、国から国に対して行われるのがほとんどであつた。晴夫たちのような非政府組織への援助など、あり得ないことだと思つていた。

しかもこれは、道路や橋を作るといふような、公共事業やインフラ整備の類のものではない。東洋医学のプロジェクトという、前例のないものに対してである。とても信じられないことであつた。

どのように答えてよいか戸惑う晴夫と美知子に、担当者は丁重に言葉をかけた。

「大きな予算が入つて混乱を招き、ご迷惑をおかけするかもしれませんが、よろしくお願いいたします」

晴夫たちは、ただただ頭をたれて、申しわけないという思いに包まれながら、この申し入れを受諾した。

こうして東洋医学が正式な医療としてニカラグア政府に認められ、日本政府の援助により東洋医学研修センターをつくる資金の目途がついたのである。

晴夫と美知子が描いていた大きな夢が、思わぬ形で整つていった。

ハリケーン・救難援助

ニカラグアは日本と同じ火山国である。また津波やハリケーン、地震などの自然災害にもたびたび襲われていた。

一九七二年十二月二十三日の未明に起きた大地震では、犠牲者は二万人を超え、首都マナグアは完全崩壊した。

一九八七年に晴夫たち家族がニカラグアに来てからでも、一九八九年のハリケーン・ファナ、一九九二年の大津波、一九九四年のセロネグロ火山の噴火、一九九八年のハリケーン・ミッチ、そして、二〇〇〇年七月七日にはマサヤ方面でマグニチュード六の大地震などがあつた。

内戦や貧困だけでなく、自然災害にも苦しめられてきたのが、ニカラグアの人々の悲惨な歴史であつた。

セロネグロ火山が噴火した時には、晴夫たちも被災者になつた。

しかし、どんなに被災者になろうとも、できる限りの救難援助を行うのが自分たちの役目だと考えていた。

そうした災害のなかで、一九九八年に来襲したハリケーン・ミッチは、晴夫たちがどんな援助活動ができるかを知るうえで大きな経験を得ることとなつた。

毎年雨期も終わり頃になると、一段と雨が多くなり、そして乾期を迎える。

しかし、一九九八年十月下旬は、未曾有の大雨が約二週間も続いた。それは熱帯性低気圧がカリブ

海に停滞していたためで、ホンジュラス、エルサルバドル、ガマテラ、ニカラグアといった中米諸国は、その影響で甚大な水害に見舞われてしまった。

ニカラグアではカリブ海側の都市が水没し、特に首都マナグアから百十キロ北西に位置するカシータ山が山崩れを起こし、その土石流が数キロの幅で太平洋岸まで流れ込んだ。

その土石流の中に四千人以上の人々が埋もれてしまい、全体で行方不明者七千人、避難民八十万という大惨事となってしまったのである。

晴夫たちはこの事態に何とかしなければと、居ても立ってもいられず、緊急援助に必要な物質を市場で調達すると、それをトラックとジープに積み込めるだけ積み込み、ニカラグア北西部にあるプエルト・モラサンという被災地に駆けつけた。

いつもなら三時間もあれば到着できる場所だが、川の増水でほとんどの橋が崩壊してしまい、遠回りをして、道なき道を走り、九時間もかかってようやく現地にたどり着いた。

現場に入って晴夫を驚かせたのは、被災者の表情であった。

どんなに苦しくても、底ぬけに明るいあのニカラグア人らしい笑顔が、すっかりなくなってしまうていたのである。どんなに貧しくても、虐げられても、いつもしたたかにおどけて生きているあのニカラグア人の人なつつこい笑顔が、まったく消え去ってしまった。そんな彼らを見るのは、はじめてのことであった。

「ハリケーンが皆の顔をすっかり変えてしまった！」

晴夫はハリケーン被害の凄まじさと怖さを、あらためて認識した。

プエルト・モラサンの突端に古びた教会があり、その教会の最上部にある十字架にまで水位が上



ハリケーン・ミッチによる被害

つたという。よく見ると確かにその水の跡がはっきりと確認できた。
水位があがり始めた時は昼ごろであったため、人々は高台に避難し、幸いにも死者はでなかった。
しかし、家畜などの動物は逃げることができず、皆溺死してしまった。そのため、水がひいてもい
たるところに悪臭がたちこめていた。

車いっぱい詰り込んできた援助物資をすべて被災者に配りおわると、晴夫は呆然自失の状態です。途についた。

帰りは来た道をそのまま戻ればよかったのだが、援助活動を行って間にも、土石流が数キロも道を変えてしまい、気がついた時には道がなくなり、迷走を続け、あやうく二重遭難しかかってしまった。

日がしずむ直前になり、ようやく道が見つかったが、その道でさえ、車は四輪駆動であるにもかかわらず、タイヤがたびたびぬかるみにはまり込み、悪戦苦闘してやっとのことで翌日の深夜にマナグアに戻り着いたのである。

マナグアに着いて一息いれているところに、こんどは日本の岡山県に本部を持つAMD A（アジア医師連絡協議会）から、緊急医療チーム派遣のための援助依頼の一報が入った。

もうすでに力を出し尽くし、晴夫は何もできないほど疲労困ぱいの状態であった。

しかし、同じ医療活動をしている日本のNGO組織であり、そして何よりも人道的立場からの支援依頼である。「自分たちがやらなければ、誰もできない」と、晴夫はこの依頼をすぐに受け入れた。

晴夫たちの役目は、現地をよく知っているコーディネーター（調整推進役）としての参加であった。

晴夫たちがはじめに苦慮したことは、活動拠点をどこにするかということであった。それは最も援助を必要としているところに設定するべきであると考え、多くの被害地域の中から、最も被害がひどく、山崩れのあったポ・ソルテガ地区を活動拠点として選んだ。

AMD Aは、一次隊、二次隊、三次隊と来て、約三週間にわたり活動した。

その人員は、外国人医師二名を含む医師四名と看護師八名、それにコーディネーター三名で構成さ

れ、それらのメンバーが被災地に入り医療活動をしたのである。

晴夫は現地在住のカウンターパートとして動きに動いた。美知子もそのとき Deng 熱の病みあがりの状態で医師から入院をすすめられていたにもかかわらず、それを断り、現場の最前線にかけつけ奮闘した。

A M D A は一応の役目を終えて引き揚げていったが、晴夫はそのあとも日本にいる元青年海外協力隊員有志から送られた支援金をもとに、約半年間にわたり、被災者難民キャンプでの治療活動を続け、被災から一年後にようやくニカラグア厚生省に引き継いだのである。

被災から翌月には、ニカラグア在住の日本人医療関係者で医療団チームを結成し、ティビタパという地区で医療活動を二週間おこなったが、これは大使館の医務官、青年海外協力隊員の医師、看護師三名、それに東洋医学の晴夫が加わるという東西両医学の融合医療団チームであり、毎日、夜遅くまで、二百名近くの治療にあたった。

この地には電気がないため、夜は蚊を払いのけながら、ローソクの明かりを頼りにして治療しなければならなかった。

医療団は、毎日異なった保健所を巡廻していたが、ある保健所への道は険しく、車で行けないときには、二時間かけて馬と徒歩で行くということもあった。

僻地では、毒蛇にかまれた患者が運び込まれるなど、全く気の抜けない活動が続いた。

土曜日は半日で切り上げ、午後からは医療活動をおこなった全員が東洋医学クリニックで晴夫の治療を受けた。毎日の疲労が蓄積しており、治療中はみんなこんこんと眠りについていた。

これらの医療援助活動を通して、東洋医学も十分に役に立ち、決して西洋医学にひけを取るもので

はないということも晴夫たちは確信できた。

たとえば、西洋医学では薬剤がなくなると対処できなくなるが、東洋医学は、はりや灸さえあればよいわけで、更に自生している薬草を使えば、かなりの疾患に対応できたのである。

こうした治療のほかに、被災に対する援助活動も晴夫たちのクリニックを通して行った。たとえばニカラグア日本人会から寄付を募り、そのお金を赤十字に届けたり、コストリカからのチャーター便で届いた日本のNGO組織からの薬品を、ニカラグア緊急災害対策本部へ届けたりと、援助出来ることは何でもしたのである。

大学設立へ

晴夫や美知子の名前は、ニカラグアの人々の間で広く知られるようになっていった。

だが、それらの人々が東洋医学をどれだけ正しく理解しているかといえば、十分とはいえなかった。

東洋医学と西洋医学とはどのように違うのか。はりや灸とはどのような治療なのか。どのような病気に効果があるのか。

東洋医学をニカラグアにしっかりと根づかせるためには、それらのことをニカラグアの人々によく知ってもらう必要があった。

晴夫は、新聞の取材、ラジオのインタビュー、テレビの出演などに積極的に応じていった。テレビの番組では、ニカラグア人のモデルにはり灸をるところを実演して見せ、放映してもらったりもした。



日本経済新聞での紹介記事

はじめてはり灸治療を見た人々からの反響は大きく、クリニックへの問い合わせが増え、なかにははり灸治療を受けるために、隣国からたずねてくる人まであらわれたほどである。

こうして東洋医学について、マスコミを通じてニカラグア全土に知れ渡っていった一方、日本のマスコミも、日本から遠く離れたニカラグアの国で活躍する晴夫や美知子のことに関心を持って取り上げた。

一九八九年十二月にはNHKが取材に入り、テレビで二人の活躍を紹介している。

一九九五年三月三十日付の日本経済新聞には「私は日本人 八巻晴夫四十三歳 中米で鍼ボランティア」と題して、顔写真入りの記事が掲載された。

一九九九年七月三日、ラジオ日本の午前六時半からの「塚ちゃんの土曜ニュースアドベンチャー」では、美知子が国際電話によるインタビューに応じている。

二〇〇〇年四月十六日の朝日新聞には「ニカラグアで針きゅうを弘め十三年、八巻美知子さん」と題する記事が載った。

このように、ニカラグアでも日本でも八巻晴夫、美知子の活動は、多くの人に知られるところとなっていた。

しかし、二人にとって、これからもっと大きな目標があった。それは東洋医学の本格的な教育を行うことであつた。

幸運にも日本政府からの助成を受けて、資金に一定の目途がつくと、いよいよ次の段階として、東洋医学研修センターでの教育内容について協議を始めた。

看護師や理学療法士と同じレベルを目指すのであれば、日本の専門学校程度でもよいだろうという意見が多くあつた。

しかし、晴夫はその考えに断固として反対した。世界の医学の潮流を考えると、どうしても大学レベルの教育水準にしなければならぬと主張したのである。そうしなければ、卒業生の社会的地位も永遠に低いものになってしまうと考えたからである。

晴夫の頭の中には、父の正寿が人々に感謝されながらも社会的評価が低かつたこと、そして恩師の代田文彦が鍼灸師の質を医師と同等にあげたいと言っていたことが常にあつた。

ニカラグアの大学はほとんどが五年制で、大学レベルの教育機関を作ろうとすれば、それなりに大変な苦勞を伴うということはわかつていた。だがここで妥協してしまえば、低いレベルでの鍼灸師評

価が、これから永遠にこの国に焼き付いてしまうことになる。

晴夫は絶対に五年制の大学にしななければならないと決めていた。そして、その手始めの行動として、大学創設の実現にむけて関係者に陳情し、推薦者を確保する活動を必死の思いで進めていった。

まずは患者とその家族に大学建設を国に陳情するための署名をお願いした。

すると、予想以上に多くの人たちが署名に応じてくれ、なかには社会的影響力のある人もいた。そうした人たちには推薦状を書いてくれるようにもお願いした。やがて集めた署名人の数は、五千名にものぼった。

さらに国会議員にも次々と会い、四十名の国会議員の推薦状も集めた。

だが、大学の認可は、十一の国立大学の学長の投票で決まり、そのうちの一人でも反対者ができれば、不認可になるといふかなり厳しいものであった。

晴夫は各大学の学長への表敬訪問と大学審議会への陳情にもコツコツとまわった。

大半の学長は、東洋医学と晴夫のことをすでに知っており、その学長たちのなかには、患者として晴夫の治療を受けたことがある者も二名ほどいたのである。また、ある学長の母はエル ビエツホクリニクでの患者であつたりして、「母がお世話になった」とお礼を言われたりもした。

日本政府から大きな援助資金を受け取ると、日本の甲子園球場ほどの広さの土地を購入し、診療ベッド三十床を設置できる待望のクリニク棟を建設した。そして、そこにマナグアの鍼灸クリニクを移転した。

クリニクのスタッフは、八巻美知子、八巻晴夫、一九九七年に青年海外協力隊として赴任してきた鍼灸師の伏見学、医師のマリア・メディーナ、鍼灸師で看護師のマルタ・ロペス、他にも鍼灸師の

レイナ・カノ、レアダ・アロンゾ、レイナ・アギーレ、アナ・ローチエなどである。

クリニック棟が完成すると、さらに診療や教育のための施設を次々に建設していった。

研修センター内に検査棟を作り、血液や尿検査、産婦人科の検査ができるようにし、エコーなどの最新機器も設置した。

図書室を含む教育棟が完成すると、遠方から入学する学生のために学生寮を一棟づくり、将来は体育館兼講堂、本部事務棟の建設も計画した。

大学としての機能を発揮するには、建物や設備だけではなりたない。何と言っても教育は人であり、東洋医学を教える優秀な教員も育てていかなければならない。そうした教授や講師の養成を急がなければならなかった。

隣国のキューバは、東洋の自然医学が非常に盛んな国である。キューバの医科大学では、必ず東洋医学も学ぶようになっていく。

そこで、同じスペイン語圏であるキューバから優秀な東洋医学の講師を招き、ニカラグアの講師陣を育成してもらうことも始めた。とともに、ニカラグア人の教員候補者をキューバと日本へ一〜二年間派遣し、東洋医学に精通した教員を養成することも考えた。

世界に目を向けると、韓国には東洋医学の六年制の大学が十一もあり、ドイツでは日本の倍の漢方薬が処方され、フランスでは五〇%の国民が東洋医学での治療を受けている。

アメリカでは、ハーバード大学をはじめ、三十四の西洋医学の大学で東洋医学も教えていて、保険診療のなかにも東洋医学治療が代替医療として使えるようになりつつあった。

世界保健機関（WHO）でも、はり治療などの適応疾患を明確に示し、積極的に普及を促している。



このように、東洋医学が正式な医療として世界的に認められ、普通の医療として定着しつつあることはもはや間違いない。



定礎式でのセレモニー

しかしながら日本では、東洋医学の活用に様々な法律上の規制があり、はり治療も医師の同意がなければ保険が使えないなど、制度上では世界の流れから遅れをとっていた。

一方のニカラグアでは、東洋医学に対する確かな法体制がまだないため、晴夫たちのこれからの活動や実績が、良くも悪くも今後の法体制の決定に大きな影響を与えることをよくよく考えていかなければならなかった。

どのようにしたらニカラグア、ひいては中米各国のラテン・アメリカ社会に東洋医学が正しく理解され、受け入れられるようになるか。そのためには、どのようなカリキュラムが必要で、どのような東洋医学の人材に育てることを目指さなければならないのか。晴夫は美知子と何度も話し合い、慎重に考えていった。

東洋医学に対しては、いまだにニカラグアの西洋医師からの反発もあり、そうした医師たちにも説得力のある大学の方針を明示しなければならなかった。そうしなければプロジェクトの遂行に影響がでることは容易に想像できたからである。

晴夫は日本への一時帰国を決め、日本の鍼灸学校、特に大学として設立されている鍼灸大学のカリキュラムを調べ、それをお手本にしようと考えた。

筑波技術短期大学、明治鍼灸大学、関西鍼灸短期大学などを次々に訪問し、大学立ち上げの情報を収集しては、苦労話しを聞き、カリキュラム作成の指導を受け、それらを文書にまとめていった。

そしてニカラグアに戻ると、一千ページにも及ぶ膨大な企画書を完成し、ニカラグア大学審議会へ提出した。

その後、幾度も審査を受け、ようやく二〇〇二年三月に大学審議会から正式な認可を得ることがで

きたのである。



建設工事始まる



Consejo Nacional de Universidades

Managua, 02 de Abril del 2001

Doctor
Haruo Yamakj
Presidente
Junta Directiva ODM-JC/IESMO-JN
Su Despacho

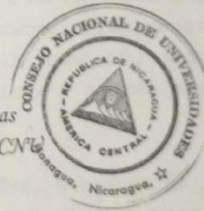
Estimado Doctor Yamakj:

Por este medio le estoy remitiendo Resolución del Consejo Nacional de Universidades No.01-2001 del 8 de Febrero del 2001, donde hace constar que el Instituto de Estudios Superiores de Medicina Oriental (IESMO), fue autorizada como una Institución de Educación Superior, con las correcciones pertinentes.

Sin otro particular, aprovecho para expresarle las muestras de mi estima y respeto.

Atentamente,

Mariano José Vargas
Secretario Técnico del CNU



CC: Archivo

TELEFONOS: 2785072-2781053
TEL: 2783385
EMAIL: cnuni@tmx.com.ni

E-MAIL: cnuni@ibw.com.ni
APARTADO POSTAL: EC-44
MANAGUA, NICARAGUA

大学審議会からの認可状

母との別れ

大学設立への道筋はほぼできあがってきた。

しかし、建物、設備、教員の養成のほかにも、職員や学生の募集など、やるべきことが山積みしていた。まさにこれからが山場であり、少しも気を抜けない日々が続いた。

そのような多忙なときに、晴夫の心を悩ます大きな問題が起きた。母のちとせが体調を崩し、入院したとの知らせが届いたのである。

日本には父も姉もいたが、晴夫はニカラグアでの活動のため、今までほとんど母に対して親孝行を何もできずにいた。

大学建設の最も大事なときにニカラグアを離れると、開校準備に大きな影響を与えかねないと、晴夫は日本に帰ることがはばかられた。

毎日毎日、母のことを思い、回復を祈りながら、仕事の合間をぬっては母の状況を国際電話で家族に尋ねた。

「もうあまり長くないかもしれない…」

いよいよ身内からそう伝えられると、もはや居ても立ってもいられない気持ちになった。

美知子は、そんな晴夫の背中を押した。

「こっちは何とかするから、ぜひ日本に帰って、お母さんに会ってあげて」

晴夫は必要な事務処理を急いで済ませると、あとを美知子に託し、直ちに日本にいる母のもとへ飛

んでいった。

母ちとせは神奈川県入院していた。余命あとわずかと医者から言われていたが、苦しむことなく、意識もはっきりしていた。

晴夫の顔をみると、昔と変わらない、やさしくおだやかな笑顔で彼を迎えた。今、その母が、もうすぐ人生の幕を降ろそうとしている。

晴夫は、長いあいだ日本を離れて母に何もできなかったことを詫び、限られた時間ではあるが、今はできるだけ母のそばにいて、長く離れていた親子の時間を取り戻そうと心を尽くした。

しかしその母は、大事な時期にニカラグアを離れてきた晴夫を気遣い、「ニカラグアの方へ帰らなくてもいいのかい」と何度も何度も心配した。自分のことより、どこまでも人を思いやる昔からの母の深い愛情を晴夫は感じた。

晴夫が初めてニカラグアに旅立つときに、あれほど反対していた母も、最後にはすべてを納得してくれたようであった。

「もうすぐ立派な大学ができるから、ぜひお母さんにも見せたいから、元気になつてね」
晴夫の言葉に、母はニコツと笑顔を見せ、静かに目をつぶった。

母は臨終のとき、渾身の力を振りしぼり、「はるお」と呼びかけ、旅立って行った。家族みんなの歌う「母」の歌に包まれながら。

二〇〇三年一月、「六本木のおかあさん」と多くの若者から呼ばれた母ちとせは、八十歳で人生の幕を閉じた。

夫婦の苦難

大学の建設は紆余曲折を経ながらも、着実に進んでいった。

一九八七年にニカラグアに赴任して以来、晴夫と美知子の二人は数々の困難、苦難の荒波を乗り越えてきた。

時には仲間の日本人やニカラグア人の裏切りにあい、卑劣なバッシングにも耐えてきた。反対に思わぬ人から助けられることもあった。

また日本の支援組織との方針の違いから、神経をすり減らす日々もあった。

しかし、そのひとつひとつの問題を乗り越えるたびに、新たな展開が生みだされていった。

長期にわたる経済的苦難を解決しようと、晴夫は日本へ出稼ぎに行ったこともあった。資金の助成や調達のため、恥を忍んであちこちで頭を下げることも忘れられない思い出となっている。

また毎日大波のように押し寄せてくるニカラグア人の患者のために、休みを惜しんで治療にもあたってきた。「困っている人を救いたい」との自らの信念に従って突き進んできたのである。

そうした十年近い年月は、二十年や三十年、またそれ以上に匹敵するほどの歩みにも感じられた。どうして、そこまでするのか――。

名声のためや、金儲けが目的なら、とつくにやめていたであろう。

自分たちの気持ち突き動かしていたもの、それはもはや避けることのできない運命的なものであったと晴夫も美知子も感じていた。

はじめは二、三年のつもりでこの地に渡って来たが、自分たちがいなくなったら、多くの患者や大
学はどうなってしまうのかを考えると、自分たちが日本からやって来た日本人という特別な意識はな
くなり、ニカラグアに自分の骨を埋めることさえ、いつしかあたりまえのことに思うようにな
っていた。

ニカラグア北西部にあるエル・ビエッホという町に、三番目の鍼灸クリニックが開設された時のこ
とである。そこはレオンから六〇キロほど離れ、マナグアからも大変に遠いところにある街であった。
このエル・ビエッホの鍼灸クリニックが、その後の北西部に開設した複数のクリニックの中心拠点
となり、レオンを除くほかのクリニックのまとめ役となる場所となっていた。

この重要拠点を指導し、守るために、一瞬たりとも晴夫は目を離すことができなかった。この拠点
に問題が起きてしまえば、そのほかの地域のクリニックにまで影響が及んでしまうからである。それ
らは、コリント、トナラ、アセラドーレス、オスピタル・テオドロキン、コシギーナ、アチュアパ、
ソモテイージョ、サント・トマス、ファイガルパなどにあるクリニックであった。

晴夫はエル・ビエッホに単身赴任しながら、毎日異なるクリニックを巡回し、時には午前と午後で
別のクリニックを訪問し、監督していた。そして、たまの日曜日によく家族のいる家に戻ること
ができた。

そうした生活の繰り返しは、当然、美知子や子供たちと触れ合う時間も極端に少なくなっていく、
家族の団らん、語らいの機会はほとんど持てない状態となっていた。

もともと子供たちは、ニカラグア人のなかで過ごす時間の方が長かったので、物心ついたころから、

両親との関わりは限られた時間しかなかった。そのため、見かけは日本人のようでも、考え方、中身などはまるつきりニカラグア人として育っていった。

そのため、晴夫と美知子の二人の間では日本語で会話をするのだが、そこへ子供たちが入ってくると、両親の話す日本語が理解できず、日本人家庭でありながらスペイン語での会話に変えないと子供たちがぐずるといふ現象が起きるようになってしまった。

人間が何を思い、どのように行動し、思考するかの源泉は、言葉から始まると言えよう。その言葉での意思疎通が親子のあいだでうまくとれなくなつたのは、大きな問題であつた。

子供が親をもつとも必要とするときに、父親である晴夫は家にほとんどいない。母親の美知子も追い回されるように患者の治療で毎日悪戦苦闘し、その合間をぬってやっと子供たちの面倒を見ることのできる状態であつた。

晴夫はそのような問題を抱えつつ、気にはなっていたが、どうしても目の前にある仕事を優先してこなしていった。そして仕事をすればするほど、多忙な日々の中で、美知子や家族との愛情を確認する時間も減ってしまい、子供たちとの会話も少なくなり、晴夫に対しての温かみも気がつかないうちに冷めていったのである。

晴夫は寂しさや煩わしさを紛らわせるように、さらに仕事に打ち込んでいった。仕事に精を出し、目標が少しずつではあるが達成すると、新たな目標がわき、それにむけてさらに全力で突き進んでいった。

家族を犠牲にしてこのプロジェクトを遂行してきたつもりはなかったが、家族で和気あいあいとした団らんのある生活をしながらでは、とてもこの事業を達成できなかったかもしれない。

このことは美知子も十分承知のうえで、お互いの仕事の状況は理解していたはずであった。しかし、こうした状況が長く続いた結果、夫婦としての愛情もいつしか冷めてしまい、とうとうやり戻せないところに至ってしまったのである。

二人は決して喧嘩をしたつもりはなく、心の中ではお互いのことを尊重し合い、仕事の上では最高のパートナーと認めあう気持ちには変わりがなかった。相手が居たからこそ今の自分があり、ここまです力を合わせてきたからこそ頑張れたという事実は、お互いに疑いの余地はなかった。

しかし、そうした二人が目指していた同じ目標や活動が、頑張れば頑張るほど、夫婦、家族関係に大きな影を落とし、溝を深めていき、大きな亀裂を生んでしまったのである。

晴夫は単身赴任しながら、すべての時間と労力と心を、各地域に開設したクリニックの維持に費やしていた。一方の美知子も晴夫のいないクリニックで大勢のニカラグア人の治療をしながら、時間をつくって子供のめんどうも見なければならなかった。互いに精一杯の日々をおくる一方で、相手を思いやる気持ちも薄れ、互いに孤立していつてしまったのかもしれない。そして、その度合いがとうとう修復できないところまでに至ってしまった。

晴夫と美知子は何度か話しあったが、互いがそれぞれの立場で頑張ってきた結果であり、どちらが悪いわけでもなかった。しかし、もはやこの心の状況を変えることはできず、だが互いのこれ以上の関係悪化だけでも避けるなければならなかった。

その後、一緒に生活した時期もあったが、一度もつれ、冷え切った夫婦の関係を修復することはできず、冷静に話し合った結果、別々に生活する方がよいということになった。

他人から、どうしてもと問われても、夫婦のこうした感情のすれ違いを言葉で説明するのは難しいだ

ろうが、二人がニカラグアへ赴任してからの唯一の誤算は、当初、想像もしていなかった二人の別離であつたといえよう。

ともあれこの悲劇は、二人が次第にあまりにも仕事最優先となり、夫として、また妻として、また親として、互いに思いやりに欠けるようになってしまったのが原因であつた。

別れた後も、子供たちは時々晴夫と一緒に生活したりもした。

晴夫と美知子はもはや夫婦としての関係ではなくなつたが、皮肉なことに、夫婦としての足かせが外れると、互いを客観的に見ることができるようになり、相手をふたたび素晴らしい人として尊敬できるところになつた。そして、仕事のパートナーとしての協力関係は、今まで以上にうまくいくようになったのである。

晴夫は大学の責任者となり、美知子はクリニックの総責任者として、互いの役目を上手に分担しながら、同じ目標に向かって、ふたたび大きく前進を開始した。

ニカラグアの教育事情

ニカラグアの郊外では、上は白シャツ、下は紺のズボンやスカートをはいた子供たちが、小さなイスを頭に乗せて学校に通う姿をよく見かける。家から持っていったイスに座つて勉強するのである。

イスがない子供は、石や土のゆかにすわつて勉強しなければならない。学校には、机やイスを置いていないところが多いからである。

教室には黒板もない。壁の一部を緑色に塗り、それを黒板がわりにして、先生は授業を行っている。

教科書さえない。先生の話したことや壁に書かれた内容をノートに写し、それを教科書にするのである。

学校の施設といっても、金網で仕切られた敷地のなかに平屋建ての建物があり、その中を区切って教室に使っている。

教室のほかには、トイレと簡単な水飲み場があり、運動場として少々の広場がついているぐらいである。

授業は午前中で終わり、午後一時から別の午後の部が始まり、夕方五時からさらには夜の部が始まる。これは夜間部ということではなく、子供の人数に対して学校の数が不足しているため、生徒を午前、午後、夜間の三つに振り分けて教室を使わざるを得ないからである。

体育の授業はあることはあるが、体育の道具や施設があるわけではなく、体操をして走る程度である。また楽器などもなく、日本のような音楽の授業はほとんど存在しない。音楽の授業がないということとは、子供たちにドレミの音階の基礎がないので、ニカラグア人が歌うと、大半は音程がかなりはズレた歌になる。しかし、本人はそれがメロディーからはずれていることはわかっていない。

だが、リズムに乗って体を動かす能力は抜群である。毎日ラテンの音楽を聴いているからであろうか、リズムカルな音楽が流れてくると、自然と体が動きだすのである。

エネルギーシユリズムと一体となった彼らの踊りには、ニカラグアに来たばかりのとき、晴夫はただただ圧倒された。しかもひとたび踊り出すと、一晩中でも平気で踊っていられるパワーには脱帽するしかなかった。

学校の授業料は無料であるが、子供がたくさんいる家庭は、それだけでも支出が多くなる。



ニカラグアが誇る詩人
ルーベン・ダリオ

特に新学期になると学校に通う靴、制服、学用品をそろえなければならず、子供が多いほど大変な苦勞をすることになる。もしお金の工面ができないと、その子供は経済的問題で、親から学校就学の権利を奪い取られてしまいかねないことになる。

実際にお金がないために、就学できない子供たちが多くいるというのがニカラグアの現状であった。こうした状況下で、子供を大学卒業まで見届けることはかなり難しいことである。小学校に入学した百人の生徒のうち、大学を卒業できるのは一人というデータがでているほどである。

ニカラグアから、ルーベン・ダリオという世界に誇る詩人が輩出された。彼は言う。

「個々の人間の能力は無限の可能性を秘めており、磨けば磨くほど、伸びていくはずである」と。

その言葉にもかかわらず、磨くことを制約された多くの若者達がニカラグアには多くいるのである。

ニカラグアでは、やっと入れた大学も前途多難となる。

ニカラグアには七つの公立大学があり、その公立大学に六%の政府予算が歳出されているが、政府も予算がなく、六%枠を下げるため、毎年予算決定の時期になると学生との間で紛争が起きる。大学や大統領公邸付近で、大学生とそれを鎮圧しようとする警察とが衝突を起こすのである。投石、催涙弾、火炎瓶が飛び

交い、多数の負傷者が出る。死者が出た年もあった。

公立大学以外に私立大学もあるが、政府直属の大学審議会が正式に認めた私立大学があり、全部で五十六の大学が存在する。

そのような中で、晴夫の「日本・ニカラグア東洋医学大学」は、大学審議会から五年制の大学として正式に認可された大学であった。

ニカラグアでは、入学してくる学生は、稀少な存在である。特に「日本・ニカラグア東洋医学大学」に入学してくる学生は、ニカラグアでは未知の分野である東洋医学に身を投じようとする、勇気をもった人達でもあった。何にもかえがたい、まさに貴重な人材群であった。

そうした新生が入学しようとする大学の開学が、今、まさに目前にせまっていた。

大学開校へ

日本・ニカラグア東洋医学大学には予想以上の入学希望者が集まり、学生の選抜面接試験を行わなければならなかった。

知識だけでなく、医療技術を教えるとなると、五年間の学業に耐えられる人でなければならぬし、また頭が優秀であつても、授業料が払い続けられる人でなくてはならない。これらの問題をクリアできる学生を選ぶとなると、ニカラグアでは易しいことではなかった。

入学者の選定にあたっては、こうした点も頭を悩まし、第一期生として四十名の入学の許可を出し、そのうち入学が最終決定したのは三十八名となった。

男女比は女性のほうが二倍多く、平均年齢は二十六歳だが、学生は十六歳から最高齢は六十五歳までと親子以上の歳の差があった。そしてそのほとんどが中産階級出身の人々であった。

入学金は三十ドル、授業料はできるだけ多くの学生に学んでほしいとの意向で、月六十五ドルと安くおさえるようにした。

四人の学生は他大学の生化学部、薬学部、農学部、心理学部を卒業してから再入学してきていた。また、他大学の医学部から三人、理学療法部から二人、心理学部から一人が転学や転入をしてきており、地域別では約十五%の生徒がマナグア以外から入学し、カリブ海側にあるプエルトガペサからも二人が入学してきた。

ニカラグアでの教育制度では、小学校六年間、中学校五年間、そして大学五年間というシステムであるが、東洋医学大学も五年制とし、その五年間を十のセメスターに分け、最初のセメスターで解剖学、発生学、生化学、医学英語、コンピューターを学ぶことにし、その講師も博士号の資格のある教授陣をそろえた。

解剖学、生化学などは、設備がまだ不十分なため、ニカラグア国立自治大学医学部と提携を結び、献体による人体を使って解剖実習や実験などを予定していた。

二年生になるといよいよ東洋医学の授業が加わり、講師は東洋医学の博士号をもつニカラグア人医師やキューバ人医師が中心となつて教授していくことになつていた。

このニカラグア人の医師は、一年以上にわたりキューバに留学させて、博士号をとらせたものである。

臨床の実技は、教室内にある実技室で学んだあと、大学敷地内にある三十床の鍼灸クリニックで実

際の患者に接して体験学習をさせていく予定である。

卒業後、生徒は「東洋自然医学士」という学士の資格が与えられる。これはニカラグア大学審議会、及び東洋医学大学がその身分を証明するものである。

卒業した学生たちはその資格をもって、個人開業あるいは私立病院や公立病院、そして保健所などでの勤務が可能となるのである。

二〇〇四年三月一日、いよいよ大学開校のその日がやって来た。

中南米で初の五年制「日本・ニカラグア東洋医学大学」が誕生する歴史的な日である。

この日の数週間前から、日本のNHKの取材班がBS放送「遠きにありて日本人」のドキュメンタリー番組制作のために、密着取材に入っていた。

ディレクターの女性一人と、カメラマン、音声担当の二人の男性が、晴夫と美知子の仕事から生活、それまでの経緯などを綿密に取材していた。

晴夫も美知子も取材に誠実に対応しながら、開校の準備に追われた。来賓や新入生の家族などにも招待状を送り、受け入れ体制も万全である。

開講式のこの日は朝から快晴で、時折涼しい風も吹いている。

晴夫は朝早くからの打ち合せを済ませ、一息いれていると、花火の音が入ってきた。記念すべき式典の時が、刻一刻と迫ってきているのである。

晴夫は父の形見の背広やネクタイを着用し、靴を履きかえた。

会場に向う準備をしながら、美知子と自分を支え、支援してくれた多くの日本人、ニカラグアの人



大学開学を支えてくれた人々の名前を刻んだ銘板を前に、八巻晴夫と八巻美知子の両氏

々を心に思い浮かべた。

「ようやく皆さんに、御報告ができる」

お世話になった人々に感謝の思いでいっぱいになりながら、あらためて自分に言い聞かせた。

「さあ、これからが本番だ！」

美知子とともに描いてきた東洋医学の太陽を、ここニカラグアから昇らせ、中南米、カリブの国々へも輝かせていくのだ。

晴夫の決意に呼応するかのようには、再び花火の音がにぎやかに何発もとどろき渡った。

エピソード

二〇〇四年、日本のNHKのBS放送で、八巻晴夫、八巻美知子のニカラグアでの奮闘の様子が、一時間に渡り日本全国に放映された。番組の題名は「遠きにありて日本人」である。

二人がニカラグアに渡ってから、東洋医学の大学を建設するまでの苦闘の道のりや、ニカラグアの人々との心のふれあい、患者への治療風景、さらに二人の夫婦としての別れまでもが赤裸々に番組の中で紹介されていた。

二人には何も隠すことはない。大きく見せる必要もなかった。ありのままの自分たちを見てほしいと、飾らぬ姿をカメラの前にさらけ出したのである。

それを視聴した日本の知人や友人たちは、ようやく今までの苦労が実を結んだことを心から喜んだ。とともに、晴夫と美知子が家庭を別にしたことをそのとき初めて知り、驚く人もあった。

だが、二人のことをよく知る友人たちは、夫婦としての関係以上に強いきずなで結ばれている二人は、どんなことがあってもその繋がりは変わることがないと信じた。

晴夫も美知子も互いを最高のパートナーだという。そして二人のどちらが欠けても、この大きな仕事は成し遂げられなかったと言う。

二人は話し合った結果、美知子はクリニックの総責任者として、また晴夫は大学の一切を担う役務を行なうとして仕事を分担し、すつきりと仕事に励めるようにしていった。そしてその結果、すべての歯車は不協和音も上げることなくふたたび大きく回転していった。

そうした晴夫たちの活躍を見届けるようにして、晴夫の父、正寿は息を引き取った。妻ちとせが他界してからちょうど一年後の二〇〇四年一月六日の未明であった。

亡くなる前日の一月五日付、日本経済新聞夕刊には、「ニカラグアに赤ひげ鍼灸師、中南米初、養成大学開学へ 日本人の八巻さん夫妻」という記事が掲載された。その取材を受けたのは、その四ヶ月前のことであつた。

たまたま家族が新聞を見つけ、さつそく正寿に読んで聞かせたところ、正寿は涙を流し「ニカラグア」とひとことひとことゆつくりと声を出し、それが父の最後の言葉となつた。

翌朝、家族が気がついたときには、正寿はすでに眠るように息を引きとつていた。

安らかで、やや笑みを浮かべているような、大満足を感じさせる素晴らしい相であつた。享年八十八歳であつた。

振り返ってみると、晴夫が東洋医学の道をすすむきっかけとなつたのは、父親の存在であつた。また、どんな人にもやさしくしていく母親の愛が、晴夫の人間性を養つたのかもしれない。人の幸せを願ひ、ただひたすらに東洋医学を根幹とする治療に専念していた父、どんな人をも思いやる母の愛、晴夫はまさにその父母の人生を引き継いだのである。

晴夫が父のためにと医師をめざし、医科大学の受験に何度も失敗して、結果として新設校の大学に入学したことを最も喜んだのは父の正寿だったが、正寿には社会的な地位、世間的な名誉など眼中になかつた。息子の晴夫にも大勢の不幸な人々を救える人生を歩んでほしいと願つていたに違いなかつた。

た。大学に入学したら、何のためにこの世にうまれてきたのか、どのように生きていたらよいのか、その答えをしっかりとつかみ、誰かのために何かを残せる価値ある立派な人生を歩んでほしいと強く願っていたに違いなかった。

その父の思いを背負い、晴夫は中南米の空の下で大きな結果を残した。

晴夫や美知子を支援した人は、ほかにも大勢の人々がいた。駐ニカラグア日本大使館の荒船元大使夫妻もその人であった。

大使夫妻がニカラグアに駐在していた間は、何度も週末にJICA専門家や青年海外協力隊の隊員とともに晴夫を大使公邸に招待した。

荒船大使は博識でユーモアセンスも抜群で、国際情勢などについても教えた。

晴夫は懐かしい和食に舌鼓をうちながら、家族的な雰囲気の中で熱い激励を受けたのである。

大使はニカラグア在住の邦人の安全と保護のために「ニカラグア日本人会」を作り、その後、日本、アルゼンチン、スペインに赴任し、外務省を退官した。

退官した大使は、今度は日本で「ニカラグア会」を作り、毎年一回、当時ニカラグアにいた日本人たちを自宅に招き、思い出話に花を咲かせているとのことであった。

晴夫はその後ニカラグアで、大使が創設した日本人会の会長を任せられ、ほかの日本人の世話をする立場になっている。

大使夫人も日本に帰国してから、多くの人々に晴夫たちの活躍を話し、夫人の母堂も協力を願い出でてくれた。そうして、晴夫たちを支援する「日本・中米東洋医学普及委員会」の会員になってくれ

たのである。その母とは、吉田茂元首相の令嬢であった。

二〇〇五年、晴夫はキューバ国立ビーヤ・クララ高等医学院と友好交流協定書を締結し、同年の七月には厚生大臣と新たな協定書を締結した。この協定書により、卒業後の学生の身分が「東洋自然医学医師」の名称を使うことが認められ、厚生省発行の登録番号をつけて出されることが正式に決まった。

これで、卒業生が西洋医学医師のように、社会的にしつかりと認められる立場となり、病院や保健所での実地研修も可能となった。まさに晴夫が思い描いていたニカラグアでの鍼灸師の理想的なあり方が現実となったのである。

晴夫と美知子の決断と行動が結実した「日本・ニカラグア東洋医学大学」はニカラグアでも評判を呼ぶ大学となり、新入生も、他国からの留学生が着実に増えていった。今後、東洋医学を基軸とした「臨床心理学部」、「理学療法学部」、「視覚障害者教育学部」そして「東洋医学大学院」の開設も確定している。

晴夫と美知子の二人の息子も立派に成長した。

次男の寿晴は日本・ニカラグア東洋医学大学を一期生として卒業したあと、その後キューバに留学し医学博士号をとり、東洋医学を更に発展させる重責を担ってくれている。

長男の専太郎は、得意のコンピューターの技術を活かして、大学の建設を支える立派な人材に

成長している。

美知子は二〇一五年から「スズコ基金」を創設した。

大学では在籍する約二五パーセントの学生に授業料を部分的に免除しているが、それとは別に貧しい地方からの学生の五年間の学費を援助するために、美知子は自分の年金を充ててこの基金を創った。そしてこの基金の名前には、自分を生み、育ててくれた母の名前を冠した。

晴夫のこれまでの功績は、日本政府からも認められ、二〇一一年には『外務大臣表彰』、二〇一三年には『医療功労賞』を受章した。

この二つの賞を一人で受賞した人物は、今のところ八巻晴夫だけだと聞く。

日本・ニカラグア東洋医学大学の開学のあとも、厚生省やWHOニカラグアとの協定書締結、そしてニカラグア国会で東洋医学推進が議決されるなど、この国での東洋の医術は確実に認められ、国民に定着し、さらに発展している。

振り返れば、三十年も前に八巻一家がニカラグアへ赴任したときは、一体どうなるのか、全く見当もつかなかった。見知らぬ土地でみんなに笑われながら、みんなと一緒に笑って生きてきた。

晴夫は病気や強盗で死に直面したこともあったが、父から受け継いだ「困っている人を救いたい」という強い思いをしっかりと抱いて、ただひたすらに走ってきた。

そして今このとき、『たから労苦と使命の中のみ人生の価値は生まれる』という、大学生活で学んだ原点となる言葉を、心からかみしめることができる。



外務大臣表彰 授与 2011年9月
在ニカラグア日本大使公邸



医療功労賞 授与 2013年3月
帝国ホテル

「開学十二年を迎えて」……日本ニカラグア東洋医学大学 創立者 八巻 晴夫

本大学の基本理念に、「大学は弱者を支援する事」を謳っている。さらに「商業主義に走らず、東洋医学を根幹とした活動を行う事」を徹底している。

弱者支援としては学生、患者、障害者等への支援が挙げられる。即ち、大学は学生主体、患者優先、障害者支援を主とした活動をしていく事が本大学の理念につながっていく。

私と美知子は、専門学校で東洋医学を学んだ時に、按摩の課外授業を受けた。その時に指導を受けたのが全盲の栗原勝美先生であった。

先生は全盲であるにも関わらず、走行する筋肉、神経などすべてを諳んじている学識があり、しかも料理や洗濯、掃除などを一人ですべて賄っている方であった。その健常者以上にやりきる姿、生き様に感動を覚え、いつかその先生に恩返しが出来たらと誓ったのが約三十年も前のことであった。

ニカラグアに赴任して東洋医学の鍼、灸、薬草などは指導実践していたが、按摩指圧マッサージはまだ教えていなかった。と言うのも患者の数が多すぎて、手が回らなかったためである。

しかし、大学開学の少し前から、ニカラグアの理学療法士に手技療法を教え、治療に取り入れはじめていた。そして一期生が卒業する年の二〇〇九年から、視覚障害者のために指圧マッサージ講座を開設したのである。

六百万人の人口を有するニカラグアには、四千人から七千人ほどの盲人が存在すると言われている。しかし、この盲人の数さえニカラグア政府は正確に把握しておらず、統括する機関や政策実行機関もないのが実情であった。

また、ニカラグアには盲人教育のための盲学校も存在していない。首都マナグアに障害者一般を受け入れている小中学校が一枚あるのみである。

ニカラグアには四つの盲人組織があり、外国の非政府機関から単発的に援助を受けていたりするが、組織に所属していない盲人も多く、安定した職につける者はほとんどいないと言つてよかつた。

こうした盲人は家庭や社会からも疎んじられ、この状況を打開するためにも、指圧マッサージの技術を盲人に学んでもらい、社会の一員として堂々と生きていけるといふ支援を私は常々考えていた。

美知子を責任者としての講座は二年間とし、内容は筑波医療技術大学のカリキュラムを参考にして作成した。授業料は無料であつた。

指圧技術を指導するのは、この大学を卒業した一期生二名と、私たちが手塩にかけて育ててきた理学療法士の資格を持つ指圧講師、そして全学生のひとりひとりである。その中には私の次男寿晴も含まれていた。

盲人が大学敷地内に入るや否や、学生は飛んで行き、腕をとり、肩をかし、盲人を教室まで案内する。そうした光景は、一幅の美しい名画を見るようである。

授業は解剖、生理学といった基礎医学と実技が中心である。

使う教材は、日本語からスペイン語に翻訳したり、更にそれを点字に移し替えたりと、大変に手間をかけて作ったものであつた。

実技を含めた授業は六百時間を越えるが、二十五名の盲人の学生の意欲は大変に高かつた。

長期の授業は彼らにも負担が大きく、しかも中途失明の年配の生徒が多かつたため、最終的に修了できたのは十三名だけであつた。

講座の修了式には在ニカラグア日本大使、JICA、国会議員、盲人協会、私企業の団体、労働省関係者など多数の来賓の出席を仰ぎ、多くの報道関係者が駆けつけるなか、大学敷地内で盛大に執り行った。

「人の役に立つ仕事ができる」「自立して生活ができる」と夢の実現を果たした受講生達と、そして式に参列した来賓のすべてが一体となり、式典は感動が感動の波紋を呼び、ほとんどの参加者が感涙にむせぶという思いがけない光景となった。

その模様は翌日の一般紙の一面を大きく飾り、コメントには大変感動的なセレモニーであったと紹介され、修了者全員の氏名が掲載されたのである。

その後、視覚障害者への講座は毎年行われ、現在まで五十四名の修了者を輩出した。

また、二〇一〇年からは、視覚障害者教育三十年の実績を持つ全盲の綱川章先生が、奥様の幸子様とJICAシニアボランティアとして四年間赴任され、視覚障害者講師も養成してくださった。その優れた功績に、JICA理事長賞が授与された。綱川先生が残された教訓足跡は計り知れない。

ニカラグアには乳癌患者を支援する（財）オルティス・グルディアンという組織がある。

その組織が把握する健康管理者や患者に対して、東洋医学を通して協力するプロジェクトが六年前から始められた。

その協力とは、薬草の講義、指圧、リンパマッサージの教授、治療と多岐にわたる。

西洋医学の治療後、乳癌患者にどれだけのアプローチができるかは、これからの課題とされているが、西洋医学の副作用とも言うべく症状緩和に東洋医学が関与することにより、痛み、嘔気、頭痛、食欲不振、不安、不眠、浮腫等の治療に期待されている。

同時に治る病氣と治らない病氣に対しても、どの様に患者と向き合い寄り添うことが出来るかを学ぶ機会を、大学は学生に提供している。しかも患者は無料で治療を受けられるのである。

開学から早十二年が経過した。この十三年間の大学の実績を振り返って、簡潔にまとめてみる。

(一) 第八回の卒業式を行い、五年間の教育課程を修了した百十八名の東洋医学医師を養成。
(二) 視覚障害者自立支援を目的とした二年間の指圧講座を行い、第六回の講座で五十四名の指圧按摩師を養成（現在七期八期生が受講中）。

(三) 短期の指圧、薬草学、足の反射療法、虹彩診断法の講座を行い、千三百名が受講。

(四) 半年間の医師向け東洋医学講座を三年間行い三十五名が修了。

(五) 大学付属鍼灸クリニックでの年間患者数一万八千八百八十四名、大学付属指圧クリニックでの年間患者数一万四千七百十六名。

(六) 大学付属鍼灸コミュニティークリニックでの年間患者数九百七十二名。

(七) ムルティセントロ・シヨップینگセンターでの年間患者数千二十名。

(八) 他の組織や企業での年間患者数二百名。

*年間患者数四万五千九百九十二名。

*ニカラグアへ赴任してからの患者総数百万名以上。

(九) これまで締結した協定書。厚生省五回、マナグア国立自治大学、サンディノ市、世界保健機関パンアメリカ州ニカラグア支部、キューバ国立ビーヤ・クララ医科大学二回、マリセラ・トレドニカラグア視覚障害者協会、乳癌患者を支援する（財）オルティス・グルデイアン二回。



WHO ニカラグアとの
調定書調印式

LA GACETA		
DIARIO OFICIAL		
Teléfonos: 2228-3791 / 2222-7344		
Tiraje 750 Ejemplares 48 Páginas	Managua, Miércoles 18 de Enero de 2012	Valor C\$ 45.00 Córdobas
AÑO CXVI		No. 10
SUMARIO		
ASAMBLEA NACIONAL	Pág.	BANCO CENTRAL DE NICARAGUA
Ley No. 774 Ley de Medicina Natural, Tiempos Complementarios y Productos Naturales en Nicaragua.....	361	Avisos.....
		387
		ESTADOS FINANCIEROS
		Banco Productivos.....
		388
CASA DE GOBIERNO		ALCALDIAS
Decreto No. 69-2011.....	370	Alcaldía Municipal El Tuma, La Dalia Licitación.....
Acuerdo Presidencial No. 02-2012.....	373	390
Acuerdo Presidencial No. 03-2012.....	373	Alcaldía Municipal La Concordia Convocatorias.....
Acuerdo Presidencial No. 04-2012.....	374	390
Acuerdo Presidencial No. 05-2012.....	374	UNIVERSIDADES
Acuerdo Presidencial No. 06-2012.....	374	Títulos Profesionales.....
		391
MINISTERIO DE GOBERNACION		FE DE ERRATA
Estatutos Asociación Comisiones de Justicia y Paz-Diócesis de León (C.P.-LEON).....	374	La Gaceta, Diario Oficial.....
Estatutos Asociación Vínculos Solidarios (VINCULOS SOLIDARIOS).....	378	400
MINISTERIO DE FOMENTO, INDUSTRIA Y COMERCIO		ASAMBLEA NACIONAL
Marcas de Fábrica, Comercio y Servicio.....	381	LEY No. 774
INSTITUTO NICARAGÜENSE DE APOYO A LA PEQUEÑA Y MEDIANA EMPRESA		El Presidente de la República de Nicaragua
		A sus habitantes, Salud:

法律 774 号 官報

- (十) 協定のある団体、組織。
テレビ第二チャンネル局、六年以上に渡り年間四十回東洋医学を放映。
ラジオテイーグレ局、三年以上年間二回東洋医学特集放送。
ISUNIN, 女性保護団体が運営するクリニックへの東洋医学治療。
(十一) 大学が支援している団体。
青い鳥、障害者を支援する団体。
オガール・セニール、老人保護施設。
NAPANICA、小児癌患者を支援する団体。
(十二) 二〇〇八年荒船清彦元在ニカラグア日本大使へ名誉博士号を授与。
二〇一二年、自然医学、代替補完医療を推進する法案「774号」が国会で可決。



国会議長から祝福を受ける
視覚障害者講座修了生



乳癌患者を支援する組織との協定書調印



第8回卒業式

この様な多角的な活動実績は、ニカラグアに蒔かれた東洋医学という種が芽を出し苗木となり、生長した木となり、花を咲かせるようになった事を意味している。

私は十二年前の大学開学式のスピーチで「近い将来ニカラグアの東洋医学がニカラグアの誇れるものの一つに必ずなっていく」と訴えた。

そして大学七期生の卒業式では「今や卒業生が、ニカラグア全土で、そして南米でも活躍し、多くの患者さんに喜ばれています。カリブに浮かぶキューバ国の大学で、医師、看護師、理学療法士に指圧を教えている卒業生もいます。視覚障害者も指圧按摩を習得し、立派に自立しています」と話した。

開学十二年目を迎えて、開学式のスピーチが紛れもなく現実のものとなっているのである。

二〇一六年記す

追記…二〇一六年暮れ、在ニカラグア今井日本大使から電話があり、マレンコ総括外務次官と東洋自然医学のプロジェクトの件で打ち合わせをしたいので一緒に同席してほしい旨の連絡を受けた。翌日、ロペス長官、厚生省グスタボ厚生労働者連盟代表、マレンコ外務次官とプロジェクトの件で打ち合わせが行われ、ニカラグア政府が全国の病院保健所等に東洋自然医学クリニックを開設したいのである。大使も両者がお互いの利益となればとその要請を受け入れ、私も喜んでその提案を受け入れた。と申し出た。これによってニカラグア東洋医学は国を挙げてのプロジェクトとなった。今までの三十年の活動の上に新たな展開が始まる事となった。しかもロペス長官、グスタボ厚生省代表は何と共に我々がお世話になった故ウイロン・バヤダレスの弟子であったのである。

ニカラグアの地で東洋医学の道を歩むことができ、あらためて東洋医学の力を実感出来ている。しかし一人だけの力では決してここまで到達できなかったに違いない。たくさんの方々の協力を戴いたその賜物と感謝の気持ちを表したい。

八巻晴夫プロフィール…一九五一年十月三十日山梨県甲府市に生まれる。一九七五年創価大学法学部卒業、一九八二年東京衛生学園東洋医学総合学科卒業、一九八二年～一九八六年（財）日産厚生会玉川病院東洋医学内科にて代田文彦内科医師に師事。一九八七年中米ニカラグア共和国へ東洋医学ボランティアとして赴任。二〇〇四年日本ニカラグア東洋医学大学創立。二〇一一年外務大臣表彰受賞。二〇一三年医療功労賞海外部門受賞。現在、日本ニカラグア東洋医学大学学長。

あとがき

私は八巻晴夫さんと同じ創価大学の後輩である。八巻晴夫さんと私は似た歩みをしてきた。大学卒業後、社会人として勤務している。その後、やむにやまれぬ思いで、東洋医学の道に進んだ。私も同じく「困っている人を救いたい」との思いからだった。しかし、現実には海外での活動は実現できなかった。そのような中で、私の叶わなかった夢を、大変に苦勞しながら見事に実現している人を大学の広報で知った。その人を応援したい気持ち膨らみ、連絡をとった。その後、鍼の専門学校の教員団をひきつれて、ニカラグアを訪問したり、光栄にも私自身が大学の開校式に来賓として参加させていただいたりした。それから月日がたち、様々な困難を乗り越えて、東洋医学大学は着実に発展していった。そしていつしか私は、八巻晴夫さんの類いまれな偉業を後世の記録として残さなければならぬと考えるようになった。というのも、私の所には八巻晴夫さんからいただいた資料がたくさんあり、八巻晴夫さんの心をよく知るものとして、これが私自身の役目であると思ったからである。このたび原稿を書かせていただくことのご了解を得て、詳細な年譜をつくり、そこに様々なエピソードを埋めていった。何度も何度も八巻さんとメールのやりとりをして、内容の不正確なところは修正し、また私の知らなかった多くの話しも提供していただいた。最後には貴重な写真まで提供していただいた。本来、文章を書くことが専門でない私にとって、こんな私で申し訳ないとの思いで一生懸命にとり組ませていただいたが、全ての苦闘を書き切ることにはできない。ここに描いた内容は氷山の一角であり、その奥には膨大な闘争の歴史があり、そのように貴重な記録を託してくださいました八巻晴夫さんに、心から感謝を申し上げます。

二〇一七年四月

東京都江戸川区西葛西七の十四の三 高橋治療院 高橋正夫

電話〇三(三六八六)〇一〇二